公益財団法人八尾市文化財調査研究会報告141

Ⅰ　太田遺跡（第14次調査）
Ⅱ　大竹西遺跡（第７次調査）
Ⅲ　恩智遺跡（第26次調査）・郡川遺跡（第13次調査）
Ⅳ　恩智遺跡（第27次調査）
Ⅴ　楽音寺遺跡（第４次調査）
Ⅵ　亀井遺跡（第18次調査）
Ⅶ　木の本遺跡（第23次調査）
Ⅷ　木の本遺跡（第24次調査）
Ⅸ　久宝寺遺跡（第81次調査）
Ⅹ　久宝寺遺跡（第83次調査）
ⅩⅠ　郡川遺跡（第12次調査）
ⅩⅡ　水越遺跡（第11次調査）
ⅩⅢ　弓削遺跡（第16次調査）
ⅩⅣ　弓削遺跡（第18次調査）

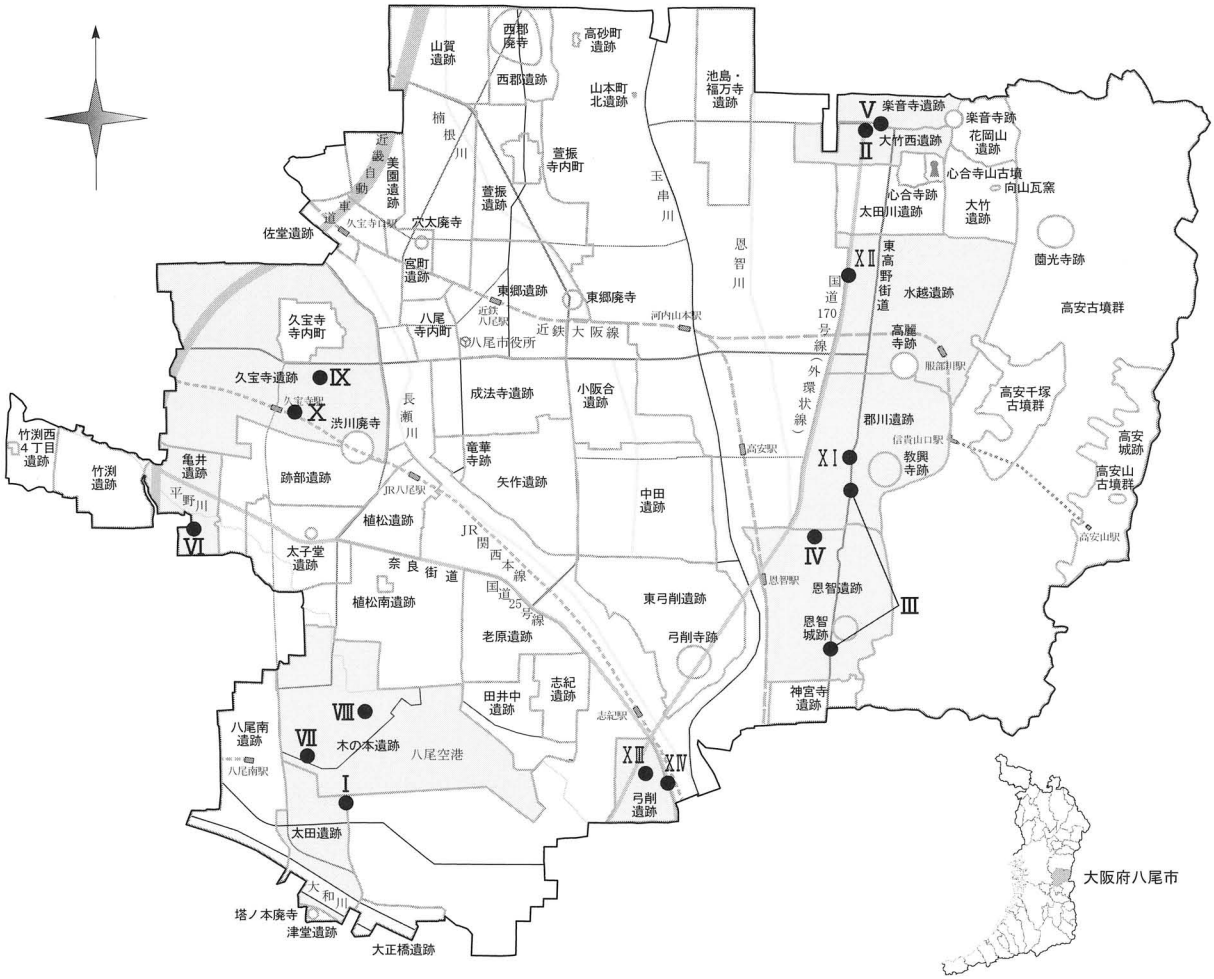
下水道工事に伴う埋蔵文化財発掘調査

2013年

公益財団法人八尾市文化財調査研究会

Ⅰ　太 田 遺 跡（第14次調査）
Ⅱ　大竹西遺跡（第７次調査）
Ⅲ　恩智遺跡（第26次調査）・郡川遺跡（第13次調査）
Ⅳ　恩 智 遺 跡（第27次調査）
Ⅴ　楽音寺遺跡（第４次調査）
Ⅵ　亀 井 遺 跡（第18次調査）
Ⅶ　木の本遺跡（第23次調査）
Ⅷ　木の本遺跡（第24次調査）
Ⅸ　久宝寺遺跡（第81次調査）
Ⅹ　久宝寺遺跡（第83次調査）
ⅩⅠ　郡 川 遺 跡（第12次調査）
ⅩⅡ　水 越 遺 跡（第11次調査）
ⅩⅢ　弓 削 遺 跡（第16次調査）
ⅩⅣ　弓 削 遺 跡（第18次調査）

下水道工事に伴う埋蔵文化財発掘調査



2013年

公益財団法人八尾市文化財調査研究会

はしがき

八尾市は、大阪府の中央部東に位置し、西は上町台地、東は生駒山地、南は羽曳野丘陵に囲まれた山麓・丘陵先端から平野部にかけて立地しています。山麓や丘陵先端部には、古くは旧石器時代に遡り得る人々の生活の痕跡が点在しています。また、平野部では古大和川水系の河川が運び続ける土砂が厚く堆積しており、その中に弥生時代以降の生活の跡が連綿と積み重なっています。

このような先人達の残した財産－埋蔵文化財－は、市民が共有すべき財産であるといっても過言ではありません。しかし、市民生活の利便性や豊かさを追求するための開発工事は、一方ではこのような共有財産を破壊することが前提となってしまいます。そこで私どもは、開発工事によって破壊される埋蔵文化財について事前に発掘調査を行い、記録保存・研究に努めているところであります。

本書は、市民生活に密接にかかわる公共下水道工事に伴う発掘調査の報告をまとめたもので、平成23・24年度に行った14件の調査成果が収録されています。いずれも小規模な調査ではありますが、縄文時代後期以降、中近世に至るまでの遺構や遺物が検出されております。本書が地域史、ひいては日本史解明の一助になれば幸いに存じます。

最後になりましたが、多くの関係諸機関および地元の皆様方に、多大な御協力をいただきましたことを心から厚く御礼申し上げます。

平成25年３月

公益財団法人八尾市文化財調査研究会

理事長　西浦　昭夫

序

1．本書は、公益財団法人八尾市文化財調査研究会が平成23・24年度に実施した八尾市公共下水道工事に伴う発掘調査の成果報告を収録したもので、内訳は下表のとおりである（平成23年度は財団法人八尾市文化財調査研究会が実施）。

1．本書で報告する発掘調査業務は、八尾市教育委員会と八尾市、及び当調査研究会の三者により締結した協定に基づくもので、八尾市教育委員会からの埋蔵文化財発掘調査指示書により当調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。

1．本書作成の業務は、八尾市と当調査研究会で交した覚書に基づき、各現地調査終了後に着手し、平成25年３月をもって終了した。

1．本書に収録した報告は，目次のとおりである。

1．本書の構成・編集は当調査研究会　坪田真一が行った。

1．本書掲載の地図は，大阪府八尾市役所発行の2,500分の１地形図（平成８年７月発行）・八尾市教育委員会発行の『八尾市埋蔵文化財分布地図』（平成24年度版）をもとに作成した。

1．本書で用いた標高の基準は東京湾標準潮位（T.P.）である.

1．本書で用いた方位は座標北（国土座標第Ⅵ系〔日本測地系〕）を示している。

1．遺構名は下記の略号で示した。

井戸－ＳＥ　土坑－ＳＫ　溝－ＳＤ　ピット－ＳＰ　落込み－ＳＯ　自然河川－ＮＲ
石列・用水施設－ＳＸ

1．遺物実測図の断面表示は、須恵器が黒、その他を白とした。

1．土色については『新版標準土色帖』1997年後期版　農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所色票監修を使用した。

1．各調査に際しては、写真・カラースライド・実測図を、後世への記録として多数作成した。各方面での幅広い活用を希望する。

平成23年度	平成24年度（平成23年度からの継続含む）
Ⅱ　大竹西遺跡第７次調査（ＯＴＮ2011－７）	Ⅰ　太田遺跡第14次調査（ＯＯＴ2012－14）
Ⅶ　木の本遺跡第23次調査（ＳＫ2011－23）	Ⅲ　恩智遺跡第26次調査（ＯＪ2012－26）・郡川遺跡第13次調査（ＫＲ2012－13）
Ⅸ　久宝寺遺跡第81次調査（ＫＨ2011－81）	Ⅳ　恩智遺跡第27次調査（ＯＪ2012－27）
ⅩⅢ　弓削遺跡第16次調査（ＹＧＥ2011－16）	Ⅴ　楽音寺遺跡第４次調査（ＧＯ2012－４）
	Ⅵ　亀井遺跡第18次調査（ＫＭ2012－18）
	Ⅷ　木の本遺跡第24次調査（ＳＫ2012－24）
	Ⅹ　久宝寺遺跡第83次調査（ＫＨ2012－83）
	ⅩⅠ　郡川遺跡第12次調査（ＫＲ2011－12）
	ⅩⅡ　水越遺跡第11次調査（ＭＫ2012－11）
	ⅩⅣ　弓削遺跡第18次調査（ＹＧＥ2011－18）

目　次

はしがき
序
Ⅰ　太田遺跡第14次調査（ＯＯＴ2012－14）…… 1
Ⅱ　大竹西遺跡第７次調査（ＯＴＮ2011－７）…… 7
Ⅲ　恩智遺跡第26次調査（ＯＪ2012－26）、郡川遺跡第13次調査（ＫＲ2012－13）…… 13
Ⅳ　恩智遺跡第27次調査（ＯＪ2012－27）…… 19
Ⅴ　楽音寺遺跡第４次調査（ＧＯ2012－４）…… 25
Ⅵ　亀井遺跡第18次調査（ＫＭ2012－18）…… 29
Ⅶ　木の本遺跡第23次調査（ＳＫ2011－23）…… 35
Ⅷ　木の本遺跡第24次調査（ＳＫ2012－24）…… 45
Ⅸ　久宝寺遺跡第81次調査（ＫＨ2011－81）…… 49
Ⅹ　久宝寺遺跡第83次調査（ＫＨ2012－83）…… 57
ⅩⅠ　郡川遺跡第12次調査（ＫＲ2011－12）…… 63
ⅩⅡ　水越遺跡第11次調査（ＭＫ2012－11）…… 69
ⅩⅢ　弓削遺跡第16次調査（ＹＧＥ2011－16）…… 83
ⅩⅣ　弓削遺跡第18次調査（ＹＧＥ2011－18）…… 93
報告書抄録

Ⅰ　太田遺跡第14次調査（ＯＯＴ2012－14）

例　　言

１．本書は、大阪府八尾市太田新町２丁目地内で実施した下水道工事(24-31工区)に伴う発掘調査報告書である。

１．本書で報告する太田遺跡第14次調査(ＯＯＴ2012－14)の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の埋蔵文化財発掘調査指示書に基づき、公益財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。

１．現地調査は、平成24年10月29日～25年１月15日(外業実働４日)に、坪田真一を調査担当者として実施した。調査面積は約16㎡である。

１．内業整理業務は坪田が行い、現地調査終了後随時実施し、平成25年３月31日に完了した。

１．本書の執筆・編集は坪田が行った。

本　文　目　次

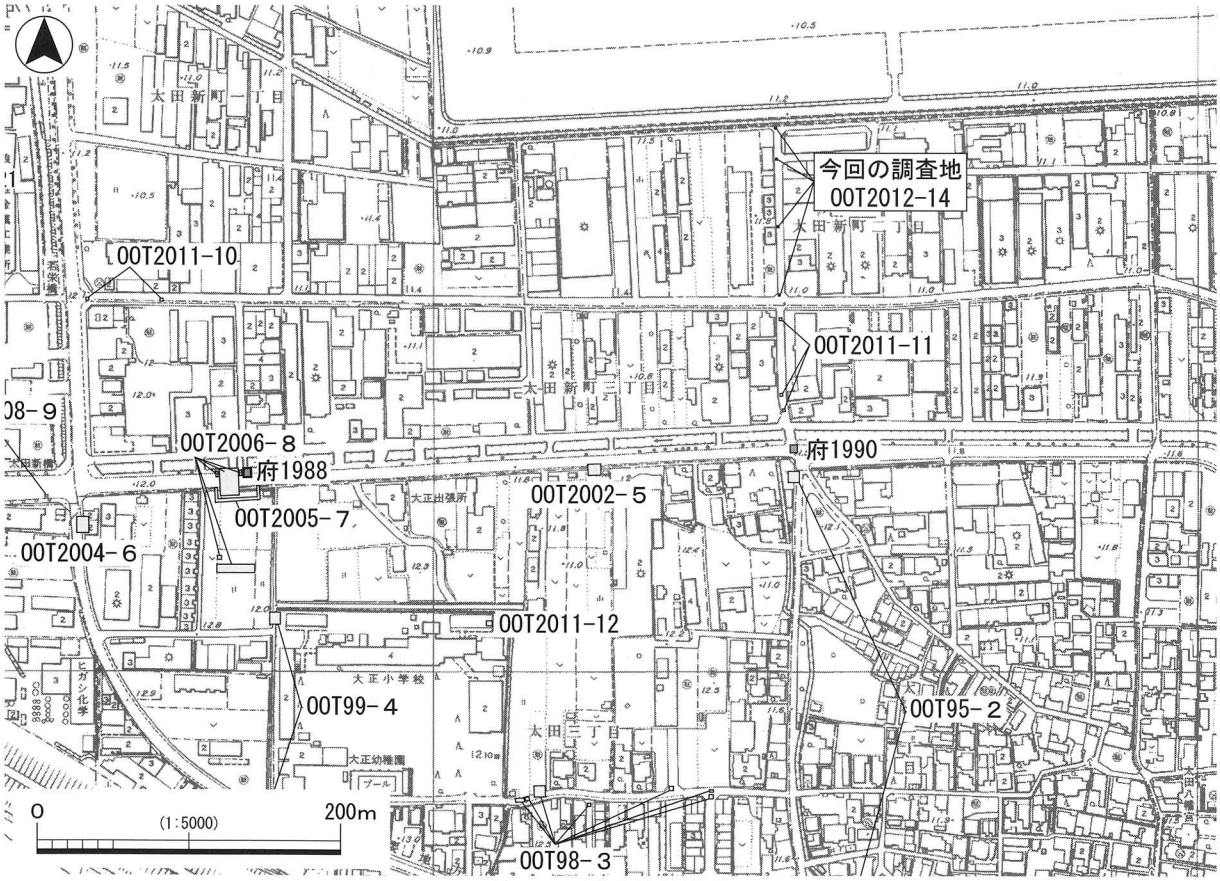
１．はじめに……1
２．調査概要……2
　１）調査の方法と経過……2
　２）基本層序と出土遺物……2
　３）検出遺構と出土遺物……2
３．まとめ……2

Ⅰ　太田遺跡第14次調査（ＯＯＴ2012－14）

１．はじめに

太田遺跡は八尾市南部に位置する弥生時代～中世に至る複合遺跡である。現在の行政区画では、太田３・４・９丁目、太田新町１・３丁目がその範囲とされている。地理的には南から延びる羽曳野丘陵の先端部と、北側に広がる旧大和川が形成した沖積地との接点部に位置する。周辺では、北側に木の本遺跡、西側に八尾南遺跡、東側に大正橋遺跡、南側には大和川を挟んで津堂遺跡が存在する。

今回の調査地は遺跡範囲の北東部に位置している。周辺では南側で大阪府教育委員会による調査（府1990）、当研究会による第２次調査（00T95－２）、第11次調査（00T2011-11）が実施されている程度で、あまり発掘調査が行われていない地域といえる。府1990では自然河川、00T95－２では弥生時代末～古墳時代、00T2011-11では弥生時代後期の遺構が検出されている。一方、西部では当研究会第４～10次調査を実施しており、第８次調査（00T2006－８）では縄文時代～中世の遺構・遺物を検出した他、旧石器時代の地層から石器も出土している。



第１図　調査地位置図

２．調査概要

１）調査の方法と経過

今回の調査は八尾市太田新町２丁目地内で実施した公共下水工事(24-31工区)に伴う調査で、当調査研究会が太田遺跡内で行った第14次調査(ＯＯＴ2012－14)である。

調査地は人孔部分(規模約2.0×2.0m)４箇所で、総面積は16㎡を測る。地区名は北から１～４区とした。なお調査はすべて夜間調査である。

調査は現地表(約T.P.+11.3m)下約3.0mまでについて、機械・人力掘削併用で実施した。

調査では工事図面記載の各調査地点地盤高を標高の基準とした。

２）基本層序と出土遺物

１区－０層は盛土。１・２層は撹拌された作土で、時期は近世頃であろう。３・４層の砂層は河川堆積である。

２区－０層は盛土。１～４層は作土と考えられ、時期は中世頃～近世に比定されよう。２層から古代頃までに比定される土師器、須恵器片が少量出土した。５・６層の砂層は河川堆積で、１区３・４層に相当する。

３区－０層は盛土。１層は河川堆積で、２区５・６層に相当する。層中では調査区中心線上を南北方向に並ぶ杭列を確認した。杭は長さ約1.5m・太さ10～15㎝を測る丸木からなる。

４区－０層は盛土。１層は撹拌された作土で、時期は近世頃であろう。２・３層の砂層は河川堆積で、３区１層に相当する。４層は暗色を呈する土壌化層で、南部の第11次調査地で確認している弥生時代後期遺構面に相当すると考えられる。本層は１～３区では見られなかったが、河川により削平されている可能性がある。５層の砂層は河川堆積である。

３）検出遺構と出土遺物

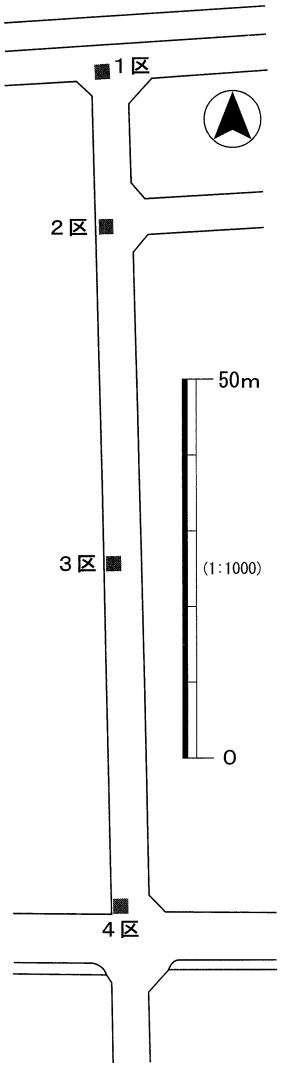
１区１層上面(約T.P.+10.6m)で井戸１基(ＳＥ１)を検出した。詳細な調査は実施していないが、調査区北西角で２段の桶枠と、下部には木組枠を備えている。掘方平面形は円形を呈し、直径３m程度と推察される。近世に通有に認められる農耕用井戸である。

３．まとめ

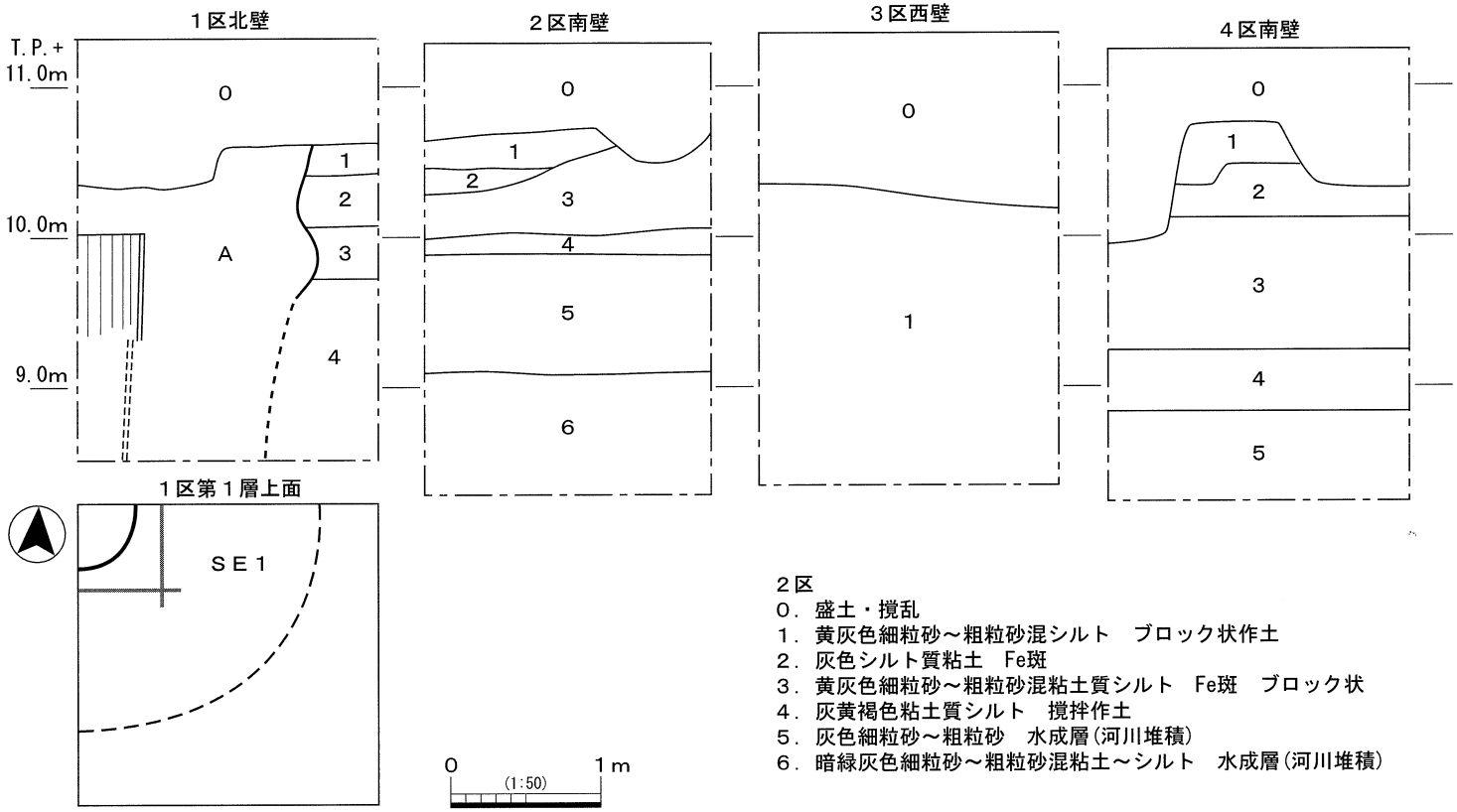
今回の調査では、１・２・４区においてT.P.+9.9m以上で作土が見られ、それ以下では全域で河川堆積が見られた。作土の時期は北部の木の本遺跡第１次調査の成果から勘案して中世～近世に比定されよう。４区第４層は、南部の調査で確認している弥生時代後期の土壌化層に対応する可能性があるが、遺構・遺物は認められず、当地は集落域からは外れているものと考えられる。

参考文献

・亀島重則1990『太田遺跡発掘調査概要』大阪府教育委員会
・西村公助1996「Ⅳ 太田遺跡第２次調査(ＯＯＴ95－２)」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告53』財団法人八尾市文化財調査研究会
・西村公助2007「Ⅱ 太田遺跡(第８次調査)」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告104』財団法人八尾市文化財調査研究会
・坪田真一2012「Ⅱ 太田遺跡(第11次調査)」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告136』財団法人八尾市文化財調査研究会
・原田昌則1983『木の本遺跡－八尾空港整備事業に伴う発掘調査－　財団法人八尾市文化財調査研究会報告４』財団法人八尾市文化財調査研究会



第２図　調査区位置図



1区
0．盛土・撹乱
1．黄灰色細粒砂～粗粒砂混シルト　作土
2．黄灰色細粒砂～粗粒砂混シルト質粘土　作土
3．黄灰色シルトブロック混細粒砂～粗粒砂　水成層（河川堆積）
4．灰色細粒砂～粗粒砂　水成層（河川堆積）

SE1
A．黄灰色細粒砂～粗粒砂混シルト　ブロック状

2区
0．盛土・撹乱
1．黄灰色細粒砂～粗粒砂混シルト　ブロック状作土
2．灰色シルト質粘土　Fe斑
3．黄灰色細粒砂～粗粒砂混粘土質シルト　Fe斑　ブロック状
4．灰黄褐色粘土質シルト　撹拌作土
5．灰色細粒砂～粗粒砂　水成層（河川堆積）
6．暗緑灰色細粒砂～粗粒砂混粘土～シルト　水成層（河川堆積）

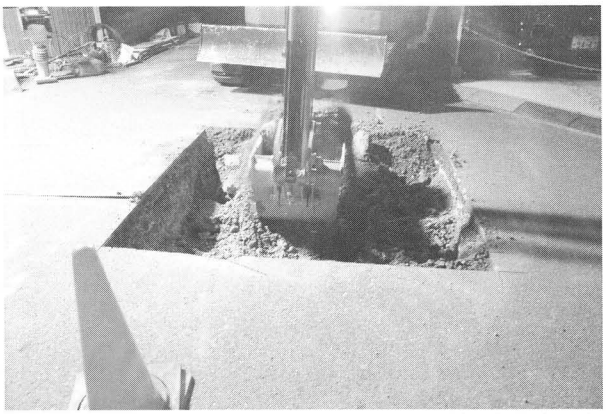
3区
0．盛土・撹乱
1．黄灰色細粒砂～粗粒砂互層　水成層（河川堆積）

4区
0．盛土・撹乱
1．緑灰色極細粒砂～中粒砂混粘土質シルト　撹拌作土
2．オリーブ灰色シルト～極細粒砂互層　水成層（河川堆積）
3．暗灰黄色粘土～シルト互層　水成層（河川堆積）
4．黒褐色細粒砂～粗粒砂多混粘土質シルト　土壌化層
5．灰色シルト混細粒砂～極粗粒砂　水成層（河川堆積）

第３図　平断面図

図版1

調査地（南から）



１区機械掘削（北から）

１区ＳＥ１（南東から）

１区ＳＥ１井戸枠（南東から）

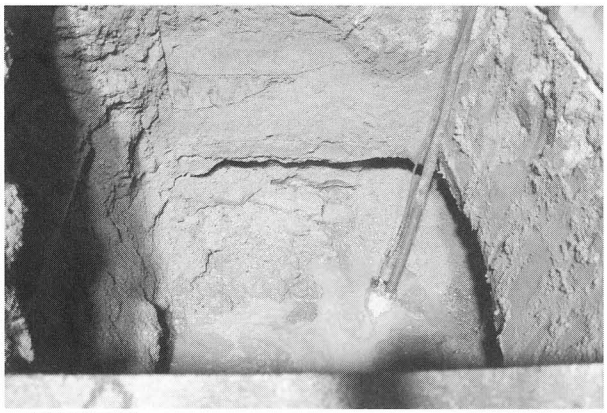
１区北壁

１区下層掘削（東から）

２区掘削機械（北から）

２区南壁上層

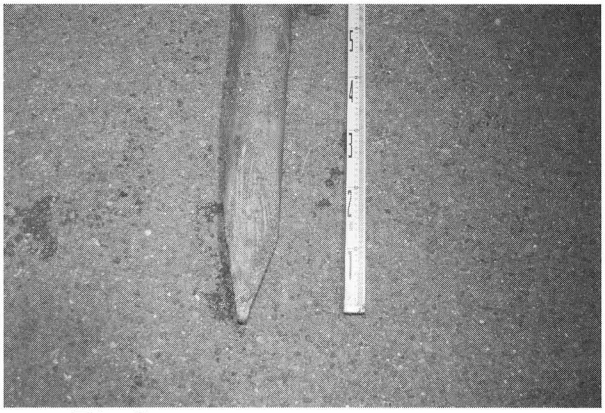
図版2



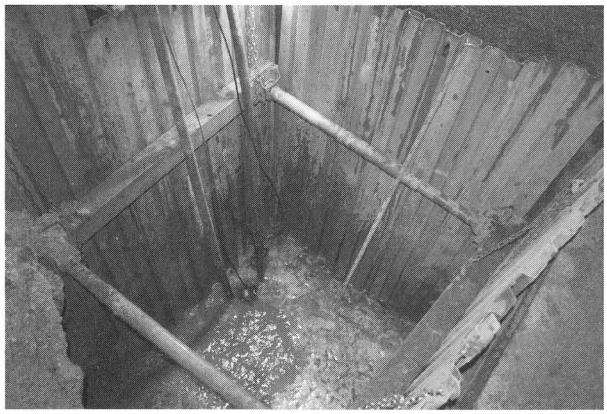
2区南壁下層

3区1層内の杭検出状況（南から）

3区1層内の杭

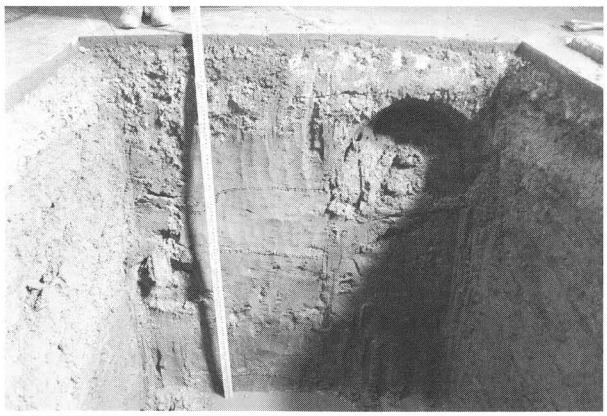


3区1層内の杭



3区（北西から）

3区西壁



4区南壁上層

4区南壁下層

Ⅱ　大竹西遺跡第７次調査（ＯＴＮ2011－７）

例　　言

１．本書は、大阪府八尾市大竹２丁目地内で実施した下水道工事(23-11工区)に伴う発掘調査報告書である。

１．本書で報告する大竹西遺跡第７次調査(ＯＴＮ2011－７)の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の埋蔵文化財調査指示書に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。

１．現地調査は、平成24年３月15日～３月22日(外業実働４日)に、坪田真一を調査担当者として実施した。調査面積は約41㎡である。

１．内業整理業務は下記が行い、現地調査終了後随時実施し、平成25年３月31日に完了した。
　遺物復元・実測・トレースー山内千惠子。

１．本書の執筆・編集は坪田が行った。

本　文　目　次

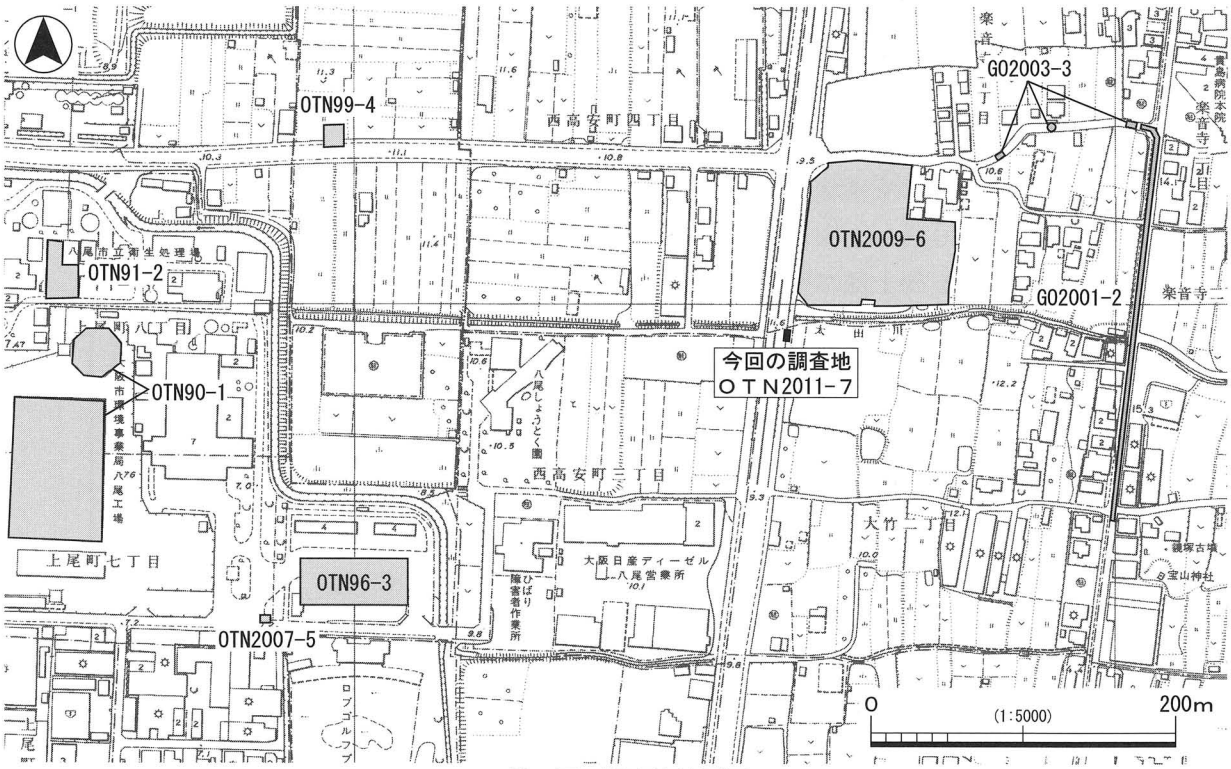
１．はじめに……7
２．調査概要……8
　１）調査の方法と経過……8
　２）基本層序……8
　３）検出遺構と出土遺物……8
３．まとめ……10

Ⅱ　大竹西遺跡第７次調査（ＯＴＮ2011－７）

１．はじめに

大竹西遺跡は八尾市北東部に位置する縄文時代晩期～室町時代の複合遺跡で、現在の行政区画では上尾町７・８丁目、西高安町３・４丁目、大竹２・５丁目、楽音寺１・２丁目の東西1.2km、南北0.35kmがその範囲とされている。地理的には、東部は生駒山地西麓に形成された扇状地の先端部、西部については沖積地上にあたる。周辺には、北に楽音寺遺跡、北東に花岡山遺跡、南東に大竹遺跡、南に太田川遺跡が接する他、西方には池島・福万寺遺跡が所在する。また、東側の生駒山地西麓にかけては、古墳時代中期の中河地域最大の前方後円墳である心合寺山古墳をはじめとして、前期古墳の西の山古墳・花岡山古墳・向山古墳、さらに後期の群集墳である高安古墳群が位置する他、古代寺院である心合寺跡が所在する。

当遺跡の東半部にあたる東高野街道付近では、古くから弥生時代の土器や石器、古墳時代の土師器等が採集されており、これらの時期の遺跡の存在は知られていた。そして平成元(1989)年に上尾町７丁目において八尾市教育委員会が実施した大阪市環境事業局八尾工場建替えに伴う試掘調査の結果、縄文時代から古墳時代に至る遺物包含層が確認されたことで、遺跡範囲は西に拡張されることとなった。その後当遺跡内では第１～６次にわたる調査が実施されており、その結果、弥生時代前期から古墳時代前期にかけての居住域・墓域・生産域に伴う遺構・遺物が検出され、なかでも弥生時代後期～奈良時代にかけては、安定した住環境が連続していたことが判明している。特筆すべき遺物として、第１次調査で出土した古墳時代前期の瑪瑙製の鏃形石製品は他に例



第１図　調査地位置図

を見ないもので、また第３次調査で出土した弥生時代後期初頭の鉄剣は最古の鋳造鉄剣であり注目される。今回の調査地北東部では平成21(2009)年度に第６次調査を実施しており、２棟の竪穴住居や井戸・溝等で構成された弥生時代後期の居住域を確認している。また楽音寺遺跡域では第２・３次調査を実施しており、弥生時代・中世に比定される地層を確認している。

２．調査概要

１）調査の方法と経過

今回の調査は八尾市大竹２丁目地内で実施した下水道工事(23-11工区)に伴う調査で、当調査研究会が大竹西遺跡内で行った第７次調査(ＯＴＮ2011－７)である。

調査地は南北方向に延びる国道170号線(大阪外環状線)、およびその東側の側道に跨って構築される立坑部分(東西約4.8×南北約8.4m、面積約41㎡)である。

調査は現地表(T.P.+11.6m)下4.0mまでについて、機械・人力掘削併用で実施した。また以下については現地表下7.3mまで下層確認調査を実施し、地層の確認を行った。なお調査はすべて夜間調査である。

調査では工事設計図記載の現況地盤高(T.P.+11.63m)を標高の基準とした。

第２図　調査区位置図

２）基本層序

０層は大阪外環状線敷設時の盛土。１層は旧耕土である。２・３層は撹拌された作土で、時期は中世～近世であろう。４層は水成層と考えられる。5A～5D層はシルト～細礫からなる水成層で、堆積状況からみて東方からの洪水砂と考えられる。６層は土壌化層、７層も暗色を呈する土壌化層である。６層上面が第１面である。８層以下は扇状地性の地山層である。

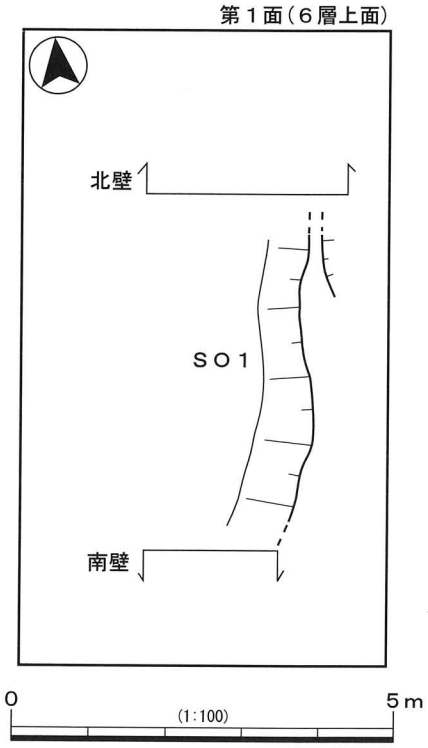
３）検出遺構と出土遺物

第１面

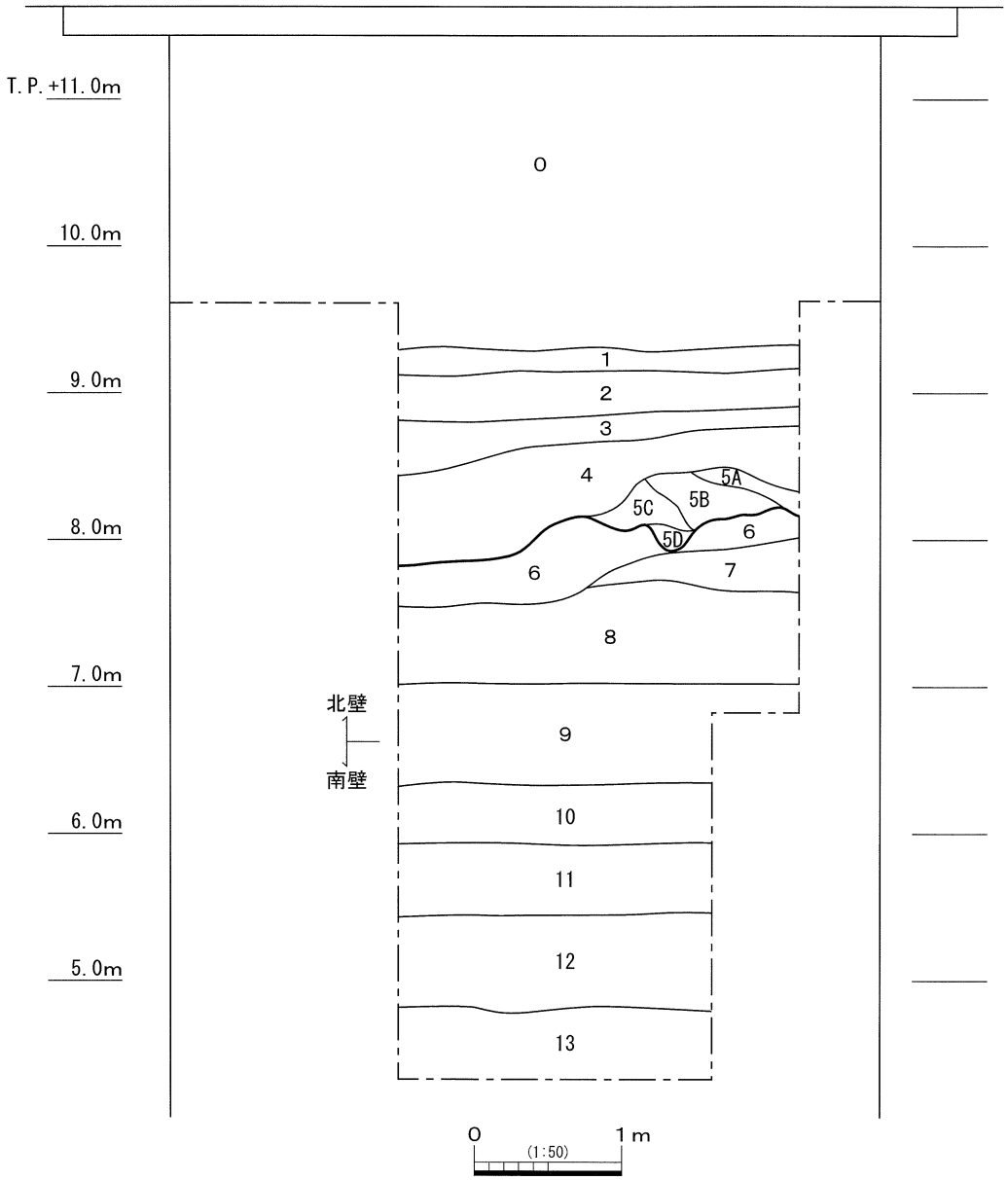
自然地形の可能性もあるが、６層上面で落ち込み１箇所(ＳＯ１)を検出した。

ＳＯ１

南北方向の蛇行する肩から西に落ち込むもので、規模は南北4.0m以上・幅2.3m以上・深さ約30㎝を測る。埋土は水成層である４・５層である。なお北部では近接して東側に落ち込む状況の肩も一部分確認している。



第３図　平面図



０．盛土
１．暗オリーブ灰色極細粒砂～細粒砂混シルト　旧耕土
２．オリーブ灰色細粒砂～粗粒砂混シルト　撹拌作土
３．緑灰色細粒砂混粘土質シルト　撹拌作土
４．灰黄褐色細粒砂～極細粒砂混粘土質シルト　水成層？
5A. 褐灰色シルト混細粒砂～細礫　水成層
5B. 黄褐灰色シルト～細礫　水成層
5C. 褐灰色極細粒砂～粗粒砂混粘土質シルト　水成層
5D. 黄灰色極細粒砂　水成層
６．褐灰色細粒砂～極粗粒砂混シルト質粘土　土壌化層
７．オリーブ黒色細粒砂～細礫混粘土　土壌化層
８．黄褐色細粒砂～中礫混粘土　以下地山層
９．黄褐色細粒砂～極粗粒砂少混粘土
10. 暗褐色粘土細粒砂～極粗粒砂
11. 褐色粘土～極粗粒砂互層
12. 青灰色粘土～粗粒砂互層
13. 青灰色細粒砂～極粗粒砂混粘土

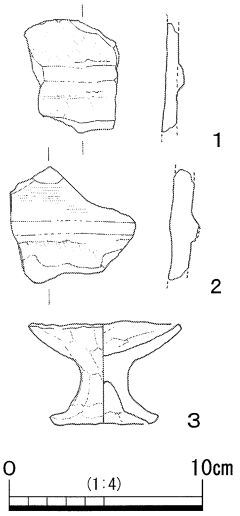
第４図　断面図

６層出土遺物

第１面検出時に弥生土器片・土師器片・円筒埴輪片が出土しており、円筒埴輪（１・２）を図化した。共に磨耗が著しいが、外面調整は１がナナメハケ、２がヨコハケ・タテハケである。共に突帯は低い台形を呈するもので、円筒埴輪編年のⅣ～Ⅴ期、時期的に５世紀末～６世紀に位置付けられよう。

７層出土遺物

弥生土器片・土師器片が出土しており、小形高杯（３）を図化した。成形は手捏ねによるもので、脚柱部は面取り風のナデによる凹凸が顕著である。奈良時代に通有に見られる器種であり、当資料も該期のものと考えたい。他に土師器片の中には古墳時代前期～中期頃と考えられる高杯片が見られる。



第５図　出土遺物

３．まとめ

調査では奈良時代頃に比定される土壌化層（７層）を検出し、またそれ以下は扇状地性の堆積（地山）であることを確認した。７層は北東部の第６次調査（OTN2009-6）で確認している弥生時代後期の生活面とほぼ同レベルであることから、弥生時代の地層は削平されている可能性がある。

また６層からは５世紀末～６世紀頃の磨耗した円筒埴輪片が出土した。当調査地の南東約300ｍ地点には同時期に比定される鏡塚古墳が位置しているが、さらに近接する地にも該期の古墳の存在が考えられよう。

参考文献

・原田昌則・荒川和哉他2007『大竹西遺跡第１次発掘調査報告書－大阪市環境事業局八尾工場建設に伴う－　財団法人八尾市文化財調査研究会報告94』財団法人八尾市文化財調査研究会
・高萩千秋1992「Ⅹ　大竹西遺跡第２次調査（OTN91-２）」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告　八尾市文化財調査研究会報告34』財団法人八尾市文化財調査研究会
・西村公助・樋口　薫2008『大竹西遺跡第３次調査　－八尾市立屋内プール建設に伴う発掘調査報告－　財団法人八尾市文化財調査研究会報告106』財団法人八尾市文化財調査研究会
・樋口　薫2001「Ⅳ　大竹西遺跡第４次調査（OTN99-４）」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告67』財団法人八尾市文化財調査研究会
・成海佳子2008「Ⅰ　大竹西遺跡第５次調査（OTN2007-５）」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告112』財団法人八尾市文化財調査研究会
・岡田清一・高萩千秋・樋口　薫2010「４．大竹西遺跡第６次調査（OTN2009-６）」『平成21年度　（財）八尾市文化財調査研究会事業報告』財団法人八尾市文化財調査研究会
・高萩千秋・成海佳子2003「Ⅱ　楽音寺・大竹西遺跡第２次調査（GO2001-２）」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告76』財団法人八尾市文化財調査研究会
・西村公助・樋口　薫2005「Ⅰ　楽音寺遺跡第３次調査（GO2003-３）」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告112』財団法人八尾市文化財調査研究会

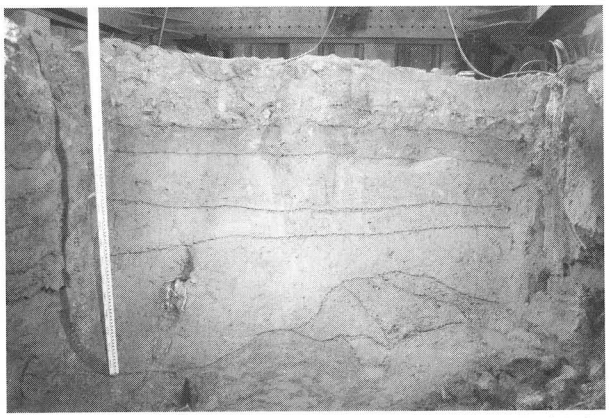
図版1

調査地（南から）

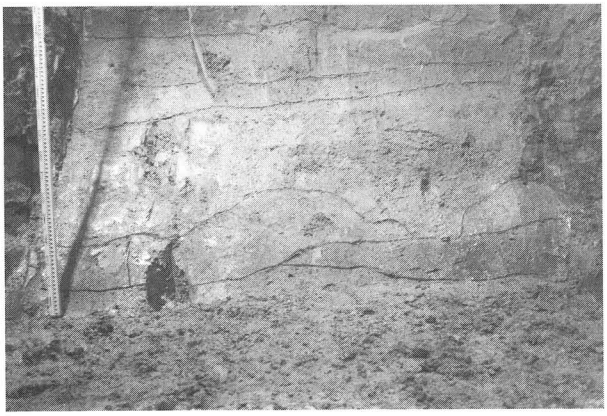
調査状況（北東から）

第１面（東から）

７層内土器（３）出土状況（南から）



北壁上部

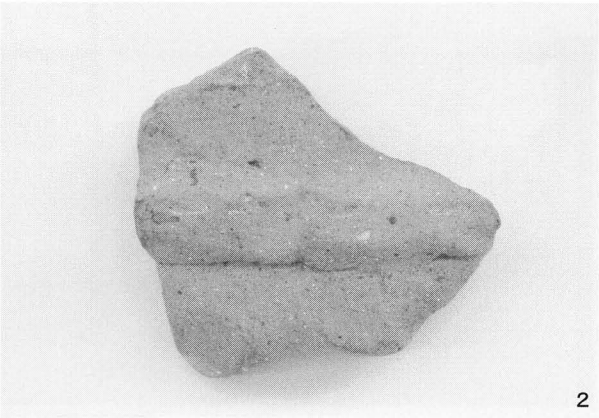


北壁下部

南壁下部

下層機械掘削（北東から）

図版2



Ⅲ　恩智遺跡第26次調査（ＯＪ2012－26）
郡川遺跡第13次調査（ＫＲ2012－13）

例　　言

１．本書は、大阪府八尾市恩智南町４丁目地内、垣内３丁目地内で実施した下水道工事(23-43工区)に伴う発掘調査報告書である。

１．本書で報告する恩智遺跡第26次調査（ＯＪ2012－26）・郡川遺跡第13次調査（ＫＲ2012－13）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の埋蔵文化財調査指示書に基づき、公益財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。

１．現地調査は平成24年４月11日～９月28日（外業実働４日）に、高萩千秋・西村公助を担当者として実施した。調査面積は約16㎡である。

１．現地調査においては、伊藤静江・市森千恵子・竹田貴子・田島宣子の参加を得た。

１．内業整理業務は下記が行い、現地調査終了後随時実施し、平成25年３月31日に完了した。
　トレース、その他－高萩。

１．本書の執筆・編集は高萩が行った。

本　文　目　次

１．はじめに……13
２．調査概要……14
　１）調査の方法と経過……14
　２）基本層序……14
　３）検出遺構と出土遺物……14
3. まとめ……14

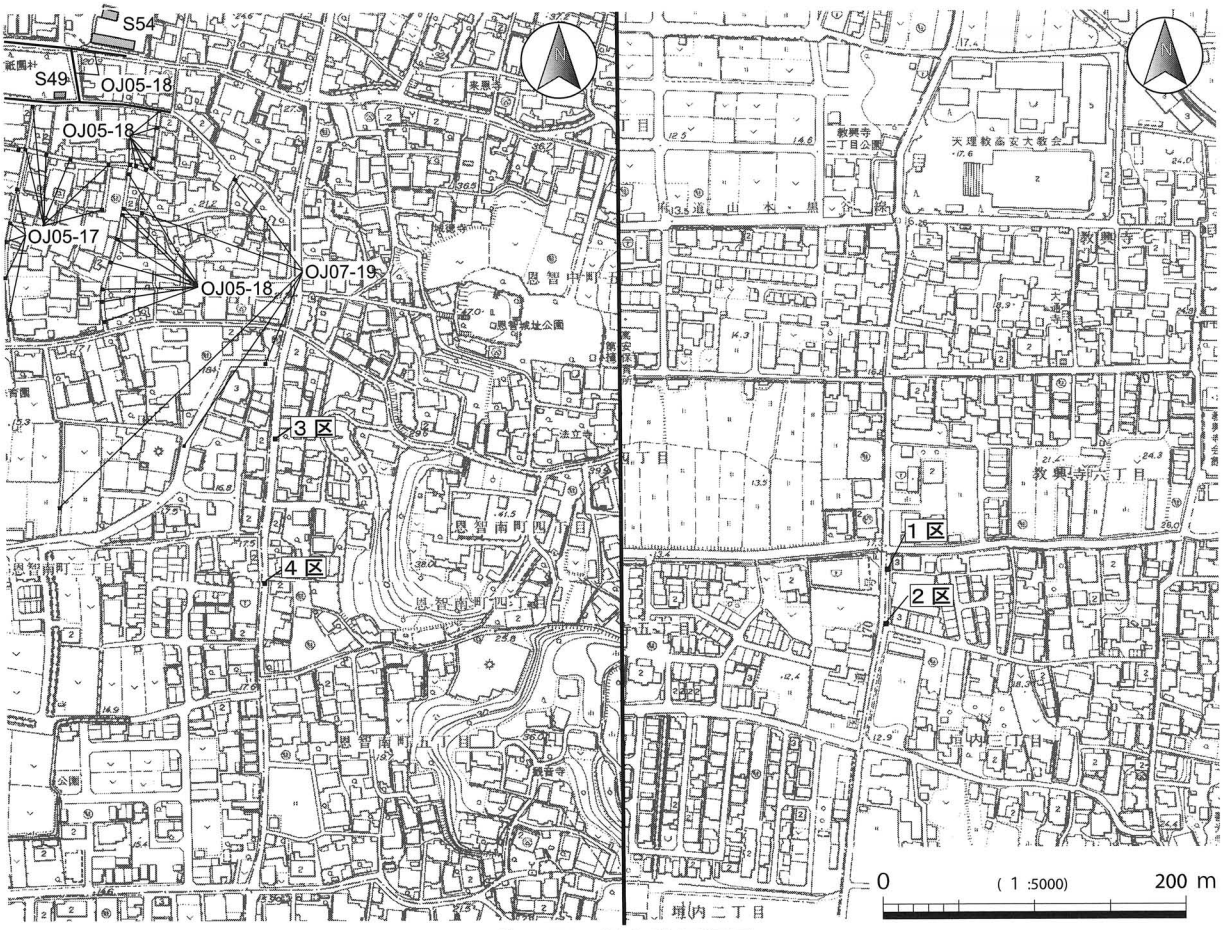
Ⅲ　恩智遺跡第26次調査（ＯＪ2012－26）郡川遺跡第13次調査（ＫＲ2012－13）

１．はじめに

恩智遺跡は、八尾市南東部に位置する旧石器時代～鎌倉時代に至る複合遺跡である。現在の行政区画では、恩智北町１～４丁目、恩智中町１～５丁目、恩智南町１～５丁目にあたり、南北約1.0km、東西約1.2kmがその範囲とされる。地理的には生駒山地西麓に形成された扇状地から低地部にかけて広がっており、周辺では、北側に郡川遺跡、南側に神宮寺遺跡が存在する。

恩智遺跡は、古くは大正６(1917)年の梅原末治・島田貞彦両氏による踏査と鳥居龍蔵氏による試掘調査、昭和14(1939)年の大阪府の事業に伴う藤岡謙二郎氏の発掘調査、昭和23(1948)年の今里幾次氏による出土遺物の報告等がある。そして昭和50～53年(1975～1978)には恩智川改修工事に伴う大規模な調査が瓜生堂遺跡調査会により実施された。これらの調査により当遺跡は縄文時代～弥生時代を中心とした遺跡として認識されている。近年も天王の杜周辺とその南～南西側、北側を中心に多くの発掘調査が行われ、本遺跡は天王の杜周辺から北西～西側を中心に展開していたことが判明している。

また、郡川遺跡は、八尾市の東部にあたる縄文時代中期末～室町時代に至る複合遺跡である。地理的には生駒山地西麓の扇状地上に位置する。現在の行政区画では郡川１～５丁目、教興寺、教興寺１～７丁目、垣内１～５丁目、黒谷１～４丁目が郡川遺跡の範囲としている。当遺跡周辺には、東に高安古墳群、南に恩智遺跡、北に水越遺跡が隣接している。



第１図　調査地周辺図

当遺跡内では、八尾市教育委員会(以下、市教委)や八尾市文化財調査研究会(以下、当研究会)が発掘調査を実施し、弥生時代から中世に至る遺構及び遺物を検出している。

当地の周辺では、当研究会第２次調査で弥生～室町時代の遺構・遺物を検出し、また、第３次調査では縄文時代中期末～近世の遺構、遺物を検出している。この調査では弥生時代後期～古墳時代前期にかけての周溝墓や土器棺墓の墓域、竪穴住居等の住居域が確認されている。

２．調査概要

１）調査の方法と経過

今回の調査は、八尾市恩智南町４丁目地内、及び垣内３丁目地内で実施された公共下水工事(23-43工区)に伴う調査で、当調査研究会が恩智遺跡内で行った第26次調査(ＯＪ2012－26)と、郡川遺跡内で行った第13次調査(ＫＲ2012－13)である。

調査区は南北方向に走る東高野街道の道路上に設定された人孔部分(約２×２m)の４箇所である。報告では北側より１～４区と称した。恩智遺跡側が２箇所(３・４区)、郡川遺跡側が２箇所(１・２区)である。

調査はそれぞれの工事掘削深度である現地表(T.P.+11.0～12.5m)下2.7～2.9mまでについて、人力・機械を併用して実施した。調査区の標高は、下水工事用の仮ベンチマークを使用した。

２）基本層序

郡川遺跡(１・２区)

１区－上部は既設管路により現地表下1.5mまで撹乱されている。０層はアスファルト・盛土・撹乱、１層以下は砂礫を多く含む扇状地性堆積層である。遺物は出土していない。

２区－０層はアスファルト・盛土・撹乱、１層は旧耕作土層。２層は弥生～古墳時代の遺物包含層。３層は作土層である。４層以下は１区と同じく扇状地性堆積層である。

恩智遺跡(３・４区)

３区－１層はアスファルト・盛土・撹乱。３層以下はいわゆる地山層で、岩盤層である。

４区－１層はアスファルト・盛土・撹乱、３層以下は水成層で、砂礫層の河川堆積である。

３）検出遺構と出土遺物

検出遺構はなかった。出土遺物は、弥生～古墳時代の土器片が少量出土した。

３．まとめ

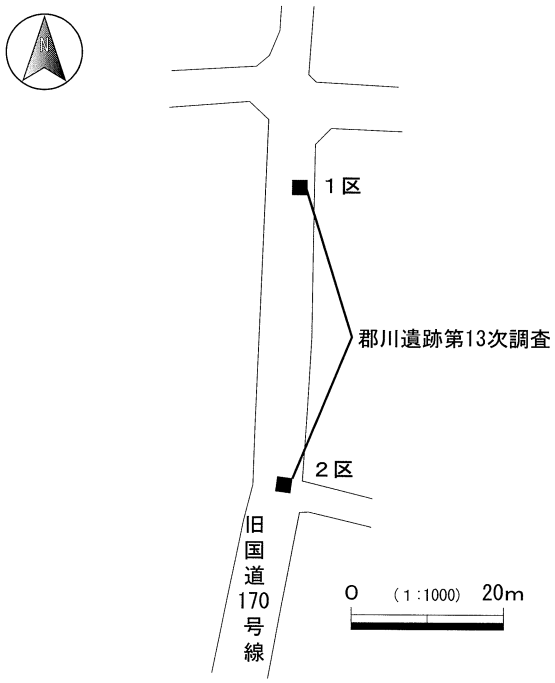
今回の調査は、恩智遺跡と郡川遺跡の２遺跡に亘る調査で、旧国道170号線(東高野街道)上の調査であった。それぞれの調査成果について記す。

恩智遺跡では３区と４区の２箇所で、遺跡の南側にあたる。調査では上層部分は削平されており、岩盤層、河川堆積層の自然堆積である。

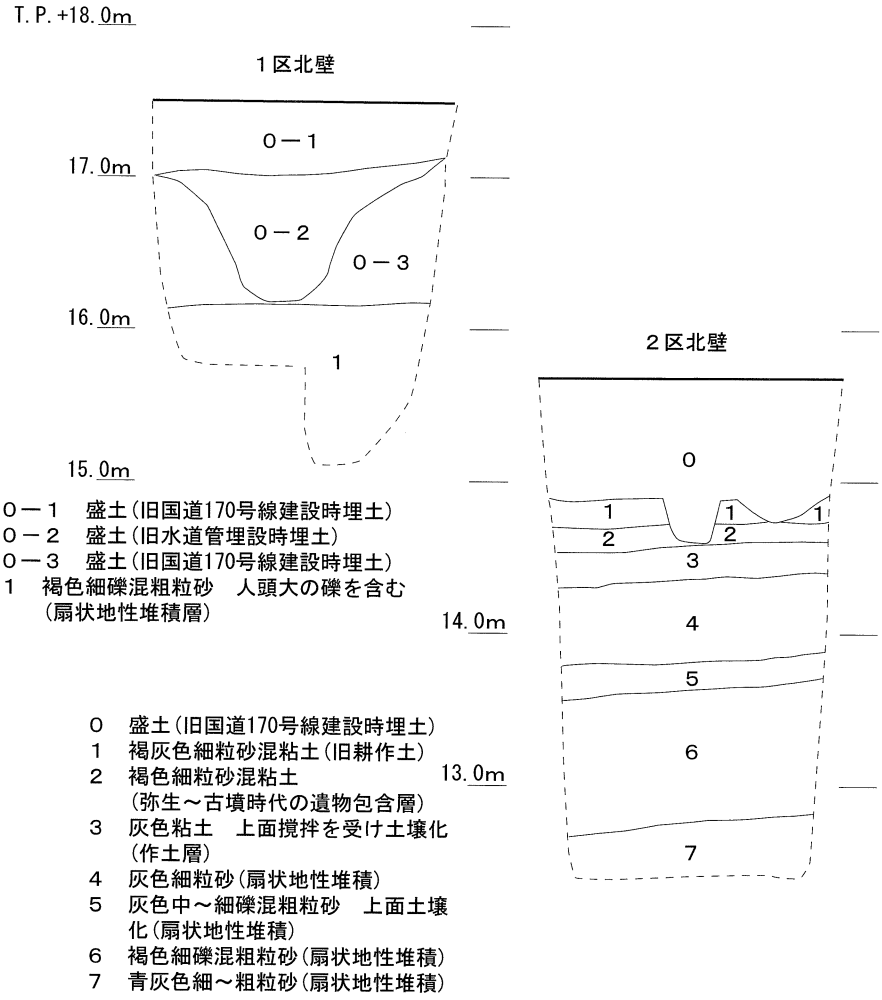
郡川遺跡では、１区と２区の２箇所で、遺跡の南側にあたる。１区は盛土以下扇状地性の堆積であった。２区では２層が弥生～古墳時代の地層であることを確認した。したがって付近に遺構が存在している可能性が高いと考えられよう。

参考文献

・原田昌則2007「Ⅲ　恩智遺跡(第18次調査)」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告98』財団法人八尾市文化財調査研究会
・坪田真一2011「Ⅱ　郡川遺跡(第11次調査)」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告135』財団法人八尾市文化財調査研究会

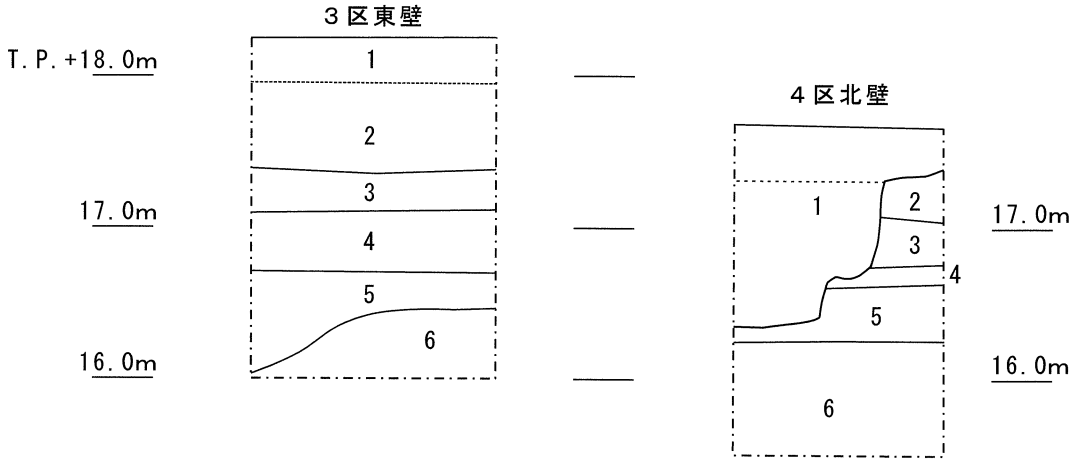


第２図　調査区位置図



第３図　断面図　Ｓ＝１/50

第４図　調査区位置図(S=1000)



1 盛土、アスファルト・バラス
2 客土・作土
3 暗青灰色礫混じり粘質シルト
4 灰オリーブ色細粒砂混粘質シルト(Fe含む)
5 オリーブ灰色シルト質混細粒砂(洪水層)
6 暗オリーブ灰色細粒砂混シルト質土(Fe含む)

1 盛土、アスファルト・バラス
2 客土
3 暗緑灰色シルト混細粒砂
4 灰オリーブ色細粒砂混シルト
5 オリーブ色粘質シルト混細粒砂(洪水層)
6 暗灰黄色細粒砂混細粒砂〜粗粒砂
(拳大〜人頭大の礫含む。洪水層)

第５図　断面図(S=1/50)

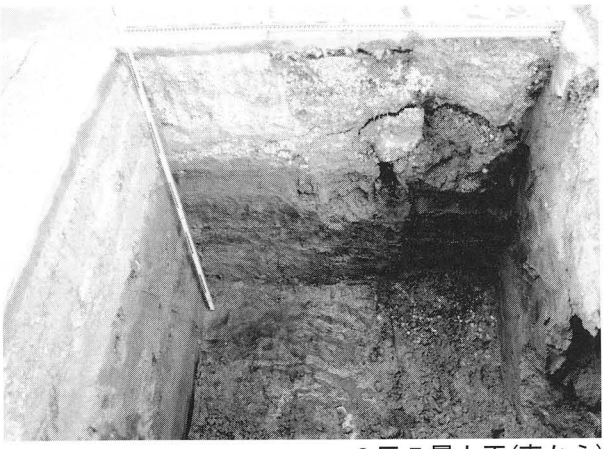
図版1　郡川遺跡第13調査

１区周辺（北西から）

１区北壁（南から）

２区周辺状況（南西から）

２区３層上面全景（南から）

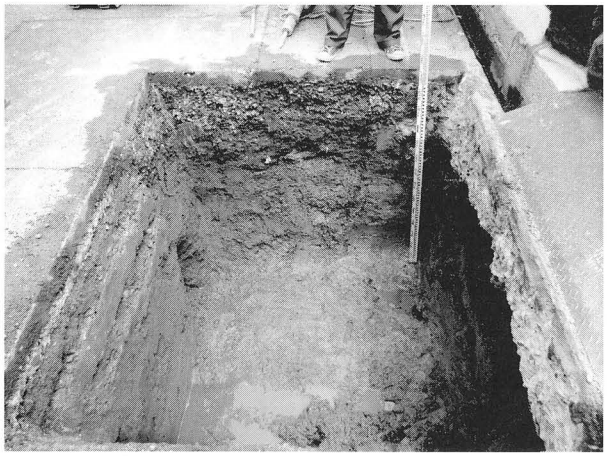

２区５層上面（南から）

２区７層上面（南から）

図版2　恩智遺跡第26次調査

3区全景(北から)

3区下層東壁

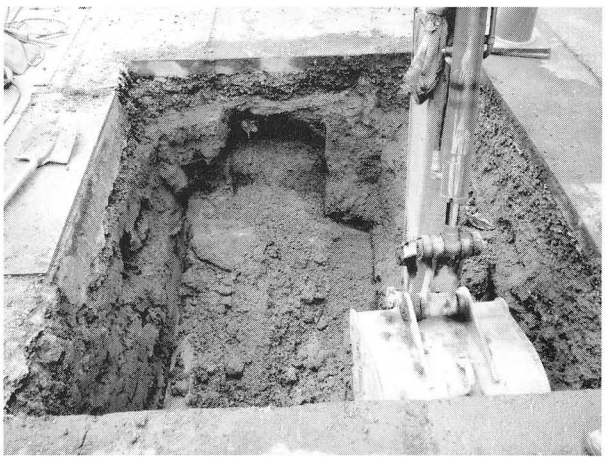

3区上層全景(南から)

4区機械掘削(北から)

4区全景(南から)

4区東壁下層

4区人力掘削(西から)


4区機械掘削(北から)

Ⅳ　恩智遺跡第27次調査（ＯＪ2012－27）

例　　言

１．本書は、大阪府八尾市恩智北町２・３丁目地内で実施した下水道工事(23－19工区)に伴う発掘調査報告書である。

１．本書で報告する恩智遺跡第27次調査(ＯＪ2012－27)の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の埋蔵文化財調査指示書に基づき、公益財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。

１．現地調査は平成24年５月14日～７月24日(外業実働５日)に、高萩千秋を担当者として実施した。調査面積は約20㎡である。

１．現地調査においては、市森千恵子・伊藤静江・梶本潤二・北原清子・徳谷尚子・田島宣子・永井律子・村田知子の参加を得た。

１．内業整理業務は下記が行い、現地調査終了後随時実施し、平成25年３月29日に完了した。
　トレース、その他－市森。

１．本書の執筆・編集は高萩が行った。

本　文　目　次

１．はじめに……19
２．調査概要……19
　１）調査の方法と経過……19
　２）基本層序……20
　３）検出遺構と出土遺物……20
３．まとめ……20

Ⅳ　恩智遺跡第27次調査（ＯＪ2012－27）

１．はじめに

恩智遺跡の概要については、前頁Ⅲの恩智遺跡第26次調査で報告しており、ここでは省略する。

今回の調査地は遺跡範囲の北部にあたり、周辺では、市教委による遺構確認調査が実施されている。

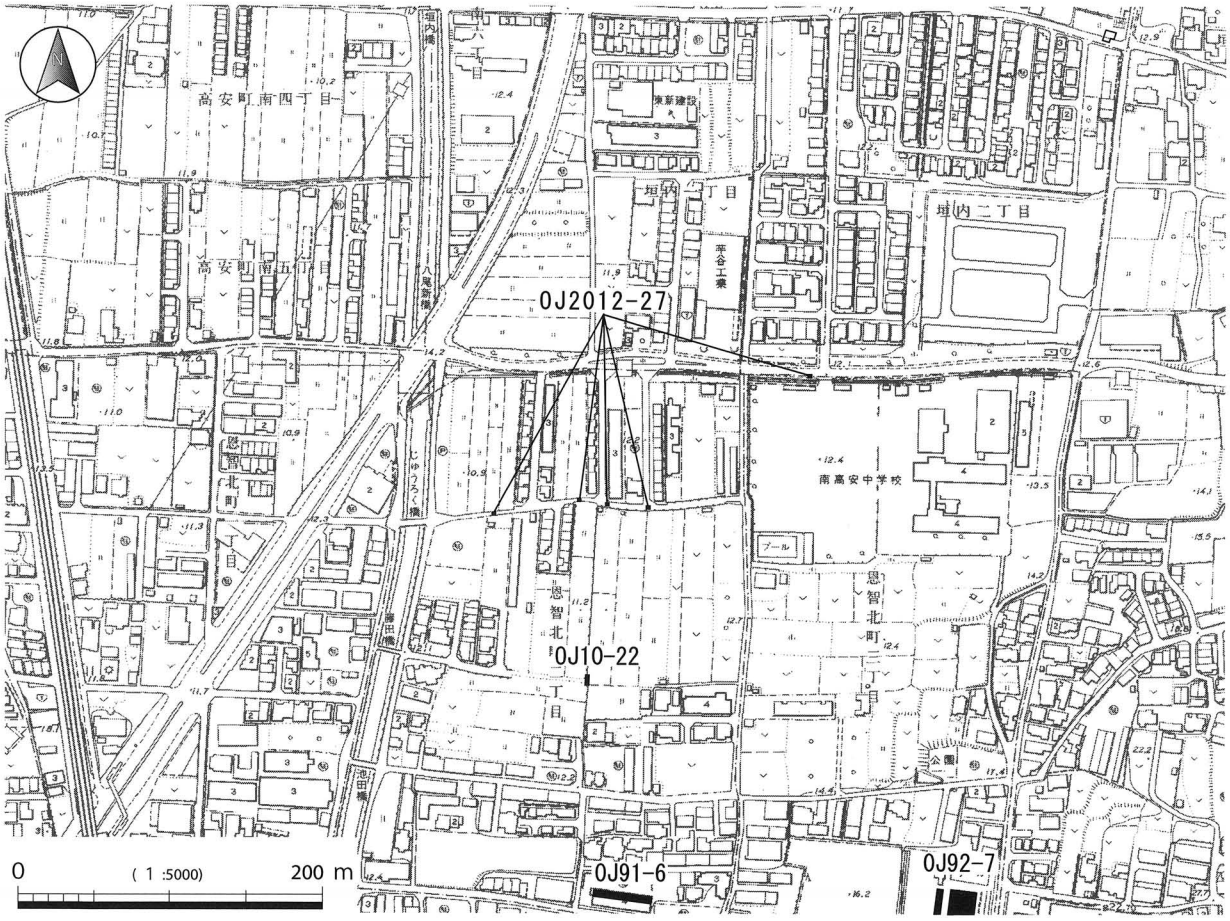
２．調査概要

１）調査の方法と経過

今回の調査地は八尾市恩智北町二丁目地内の道路上で実施した公共下水工事（23-19工区）に伴う調査で、当研究会が恩智遺跡内で行った第27次調査（ＯＪ2012－27）である。

調査区は新興住宅内の東西道路上に設定された人孔部分（約２×２ｍ）４箇所と、旧国道170号線（高野街道）と外環状線（国道170号線）を結ぶ東西道路で、南側の南高安中学校入り口付近に設定された人孔部分１箇所の計５箇所で、調査面積は計20㎡を測る。調査では工事番号をそのまま付し、記録作成を行った。報告においては人孔№順に１～５区を付した。

調査は各地区の工事掘削深度である現地表（T.P.＋11.0～12.8m）下2.5～2.9mまでについて、機械及び人力掘削により実施した。調査区の標高は、下水工事用の仮ベンチマークを使用した。



第１図　調査地周辺図

２）基本層序

１区(No.1人孔)

上部は既設管路により現地表下1.5mまで撹乱されている。１層はアスファルト・盛土・撹乱である。２層は洪水層と思われる砂層が堆積する。３層以下は粘土質又はシルト質層が堆積している。３層は土壌化がみられることから生産域の作土層と考えられる。この層からは土師器・瓦器等の細片遺物が出土している。

２区(No.3人孔)

１層は１区と同じで現在の撹乱層である。２層は砂が堆積する洪水層である。３層は土壌化した粘質土の作土層である。４層はシルト混粘質土、５層は粘質土、６層はシルト混粘質土である。

３区(No.7人孔)

１層は２区と同じで現在の撹乱層である。２層は砂が堆積する洪水層である。３層は土壌化した粘質土、４層はシルト混粘質土層である。

４区(No.9人孔)

１層は３区と同様の撹乱層である。２層は砂が堆積する洪水層である。３・４層は土壌化した作土層と考えられる。３層からは土師器・瓦器の細片が少量出土している。

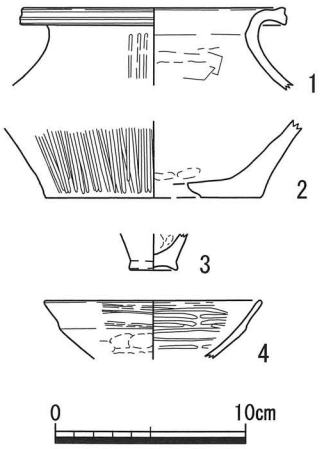
５区(No.15人孔)

他の調査区から一つ北の道路部分で、東側へ100m付近に設定された人孔部分の調査区である。この調査区も他の調査区同様の堆積である。この調査区では３層からの遺物の出土はなかった。以下の堆積層も他の調査区とほぼ同じであった。

３）検出遺構と出土遺物

検出遺構はなかった。全体の調査区には洪水による堆積層、生産域関係の作土層と考えられる層が確認できた。

出土遺物は、弥生時代中期の弥生土器、古墳時代前期の古式土師器、中世ごろの土師器・瓦器片が少量出土した。図示できたものは、第２図掲載の４点で、１～３は４区と５区間の開削工事で出土した遺物である。１・２は弥生土器である。１は壺で口縁が大きく外反し、端部に面をもつ。２は壺の底部で底径11.2cmを測る。弥生時代中期に比定される。３はミニチュア土器の底部で底径2.4cmを測る。４は１区２層出土の瓦器椀である。口縁部で内外面にヘラミガキを施している。



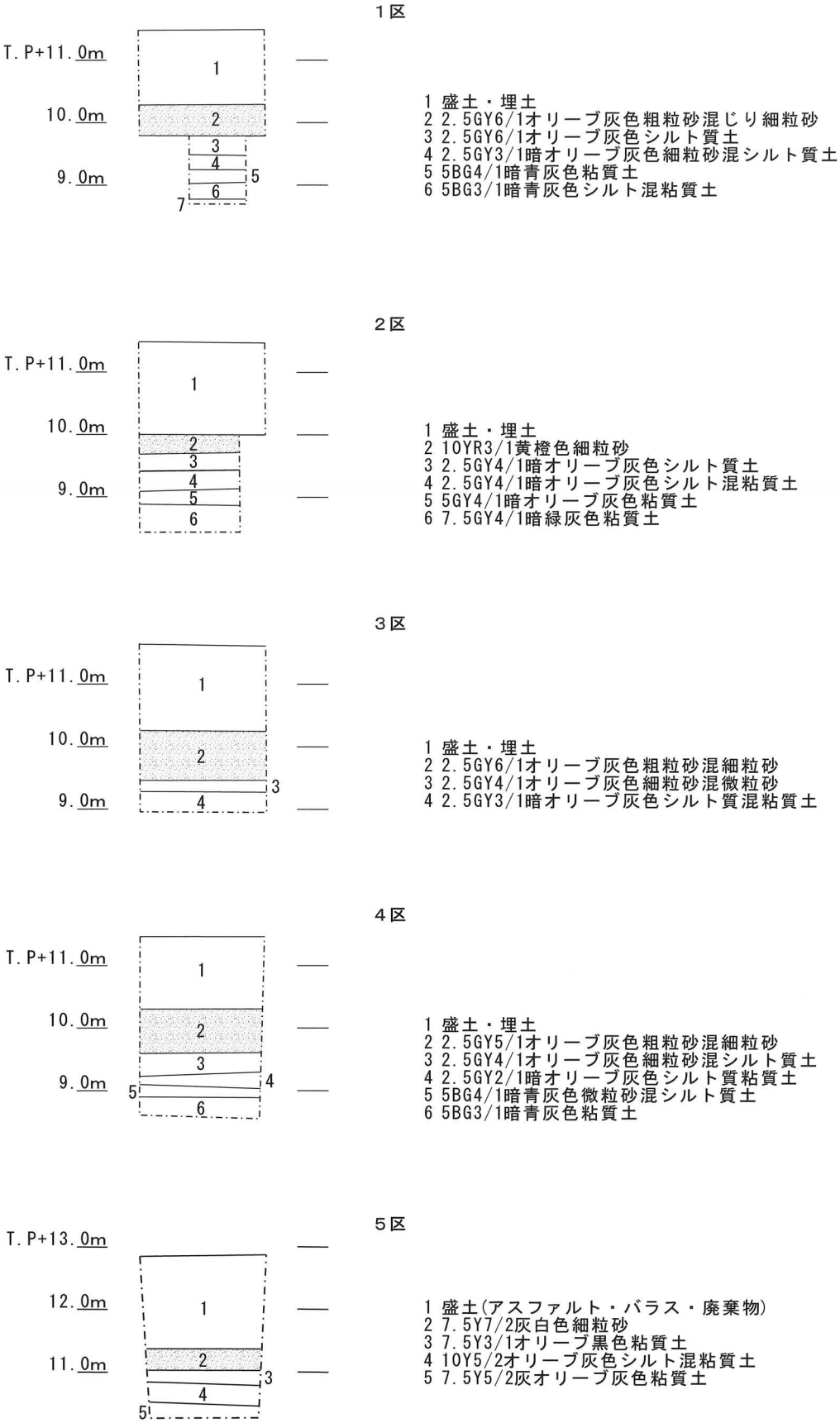
第２図　出土遺物実測図

３．まとめ

今回の調査では、恩智遺跡の北側にあたる新興住宅地内の道路上で実施したものである。調査成果では生産域と考えられる中世の作土層、その直上に堆積する洪水層が調査区全域で確認されており、最低でも東西320mの範囲の生産域が中世以降の洪水により埋没していることが今回の調査でわかった。

参考文献

・吉田野乃　1999.3「2-2.恩智遺跡（98-278）の調査」『八尾市内遺跡平成10年度発掘調査報告書Ⅰ』八尾市文化財調査報告40　平成10年度国庫補助事業　八尾市教育委員会



第３図　断面図（Ｓ＝1/100）

図版1

1区(南から)

1区下層北壁断面

1区人力掘削状況(西から)

1区機械掘削(西から)

2区全景(南から)

2区下層北壁

2区人力掘削(南から)

2区機械掘削(西から)

図版2

３区全景（北から）

３区全景（西から）

３区人力掘削状況（南から）

３区機械掘削（西から）

４区全景（南から）

４区北壁

４区人力掘削（西から）

４区機械掘削（西から）

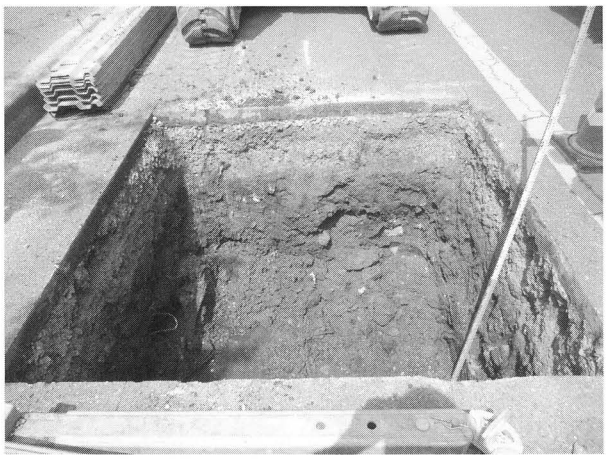
図版3

5区工事掘削深度(南から)

5区下層北壁

5区下層北壁状況

5区人力掘削状況(南から)



5区上層全景(東から)

5区機械掘削状況(東から)

Ⅴ　楽音寺遺跡第４次調査（ＧＯ2012－４）

例　　言

１．本書は、大阪府八尾市楽音寺１丁目地内で実施した下水道工事(24-７工区)に伴う発掘調査報告書である。

１．本書で報告する楽音寺遺跡第４次調査(ＧＯ2012－４)の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の埋蔵文化財発掘調査指示書に基づき、公益財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。

１．現地調査は平成25年１月31日～２月６日(外業実働４日)に西村公助を調査担当者として実施した。調査面積は約23㎡である。

１．現地調査においては、梶本潤二・北原清子・田島宣子・徳谷尚子・山内千惠子の参加を得た。

１．内業整理業務は西村が行い、現地調査終了後随時実施し、平成25年３月31日に完了した。

１．本書の執筆は西村が、編集は坪田が行った。

本　文　目　次

１．はじめに……25
２．調査概要……26
　１）調査の方法と経過……26
　２）検出遺構と出土遺物……26
３．まとめ……26

Ⅴ　楽音寺遺跡第４次調査（ＧＯ2012－４）

１．はじめに

楽音寺遺跡は八尾市北東部に所在し、東大阪市との境界に位置する。行政区画では楽音寺１・３～５丁目がその範囲である。地形的には生駒山地西麓の扇状地に位置する。同一地形上には、南に大竹西遺跡、鏡塚古墳、心合寺跡、心合寺山古墳、太田川遺跡、水越遺跡などがあり、東には楽音寺跡、花岡山遺跡、南東には大竹遺跡が存在している。また、高安古墳群が生駒山地西麓から扇状地にかけて存在している。

今回の調査地が存在する楽音寺１丁目付近では、過去に数回の調査を行なわれている。特に近隣での調査成果をあげると、東側に近接している当研究会第１次調査（高萩1984）では、T.P.＋14.0ｍ前後で縄文時代後期の落ち込み状遺構を、T.P.＋15.85ｍ前後で平安時代の井戸と柱穴を検出している。南東に近接している当研究会第２次調査では、弥生時代および中世と思われる地層を確認し（高萩2003）、北東に近接する当研究会第３次調査でも近世以前の土壌層を確認している。東側に隣接する遺構確認調査（成海2003）では、縄文時代と平安時代の遺構面に相当する可能性がある地層を確認している。さらに、南東に近接する大竹西遺跡第６次調査では、弥生時代後期初頭の竪穴住居や井戸が見つかっている（岡田・高萩・樋口2010）。

以上の調査結果から、今回の調査地にも縄文時代以降の遺構が存在している可能性が高いと予想され、今回の調査に到った。

第１図　調査地周辺図

２．調査概要

１）調査の方法と経過

今回の調査は八尾市楽音寺１丁目地内で実施した下水道工事(24-７工区)に伴う調査で、当調査研究会が楽音寺遺跡内で行った第４次調査(ＧＯ2012－４)である。

調査地は立坑部分１箇所(南北約3.2×東西約7.2m)で、面積は約23㎡を測る。

調査は、現地表下約1.3～3.8mまでを機械と人力による掘削を実施し、遺構・遺物の有無の確認および記録保存の作成に努めた。

調査で使用した標高は、八尾市街区多角点10A87(調査地東部：T.P.+14.412m)である。

２）検出遺構と出土遺物

遺構の検出および遺物の出土はなかった。

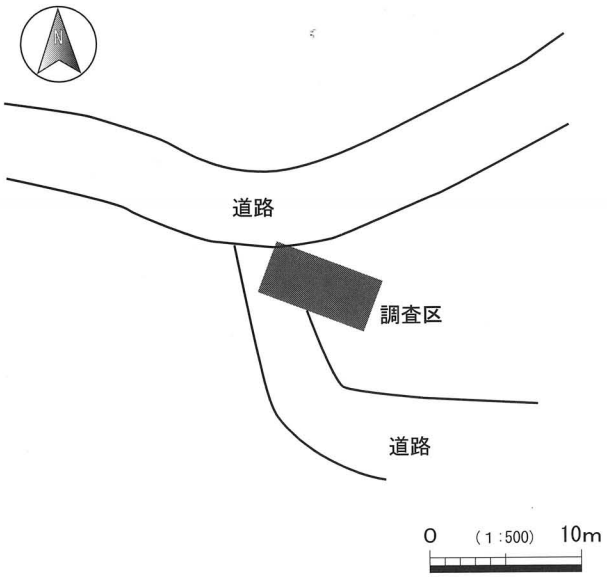
３．まとめ

今回の調査では、遺構の検出および遺物の出土はなかった。各地層の時期は不明であるが、大竹西遺跡(2006-414)調査(樋口・西村2008)で確認したT.P.＋10.5m付近の地層が古墳時代中期頃に相当することから、１層以下の地層は古墳時代より古い地層である可能性が高い。

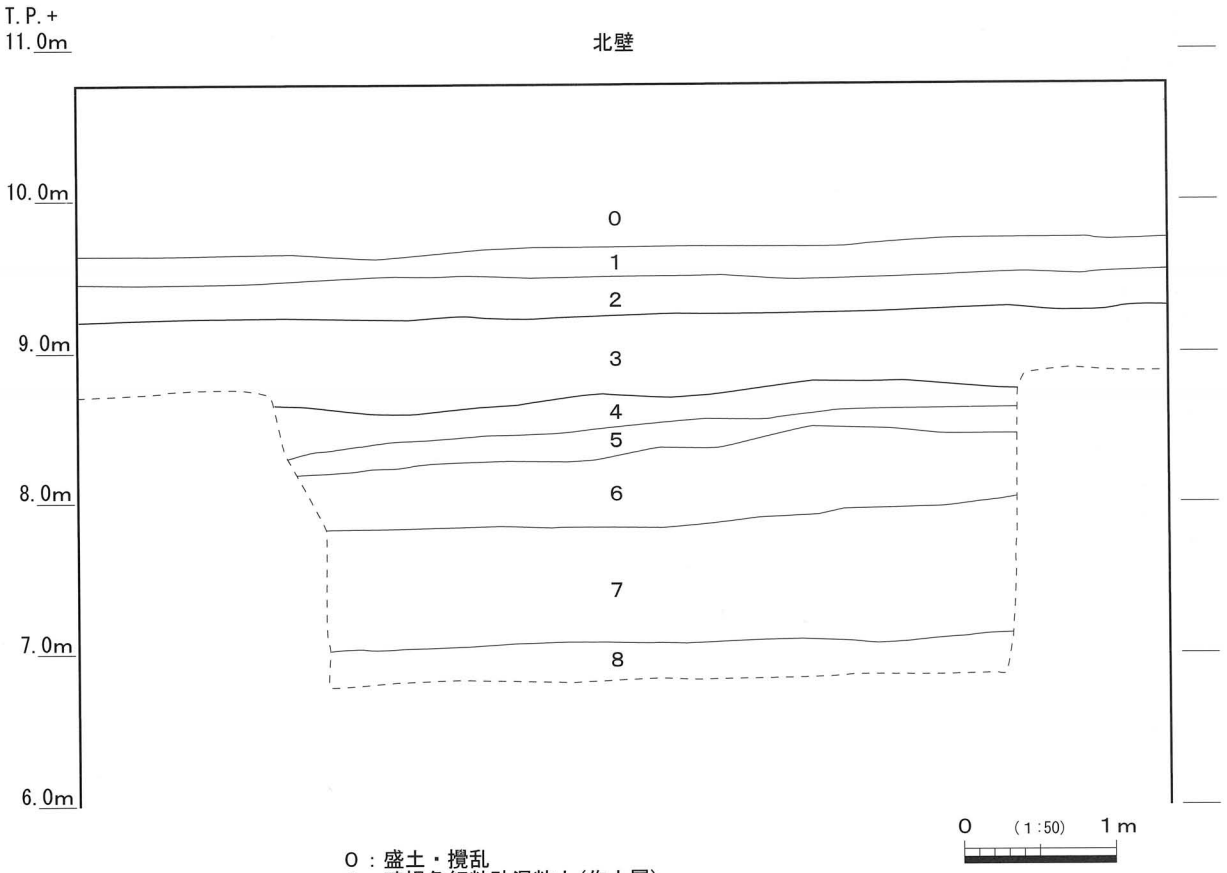
３層以下は、シルトや砂および礫の扇状地性堆積層であり、今回の調査地は、谷地形であったと考えられる。

参考文献

・原田昌則1999「Ⅲ　郡川遺跡第２次調査(ＫＲ90－２)」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告64』財団法人八尾市文化財調査研究会
・高萩千秋1984「７楽音寺遺跡」『昭和58年度事業概要報告　財団法人八尾市文化財調査研究会報告５』財団法人八尾市文化財調査研究会
・成海佳子2003「10　楽音寺遺跡(2002－293)の調査」『八尾市内遺跡平成14年度発掘調査報告書　八尾市文化財調査報告48　平成14年度国庫補助事業』八尾市教育委員会
・高萩千秋2003「８．楽音寺・大竹西遺跡第２次調査(ＧＯ2001－２)」『平成14年度　(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』財団法人八尾市文化財調査研究会
・西村公助・樋口　薫2005「Ⅰ．楽音寺遺跡第３次調査(ＧＯ2003－３)」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告85』財団法人八尾市文化財調査研究会
・樋口　薫・西村公助2008「大竹西遺跡(2006－414)」『八尾市内遺跡平成19年度発掘調査報告書　八尾市文化財調査報告57　平成19年度国庫補助事業』八尾市教育委員会
・岡田清一・高萩千秋・樋口　薫2010「４．大竹西遺跡第６次調査(ＯＴＮ2009－６)」『平成21年度　(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』財団法人八尾市文化財調査研究会



第２図　調査区位置図

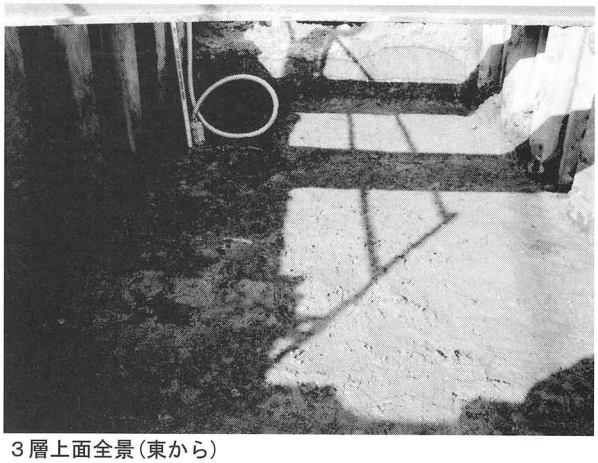


０：盛土・攪乱
１：暗褐色細粒砂混粘土（作土層）
２：黒褐灰色細礫～粗粒砂混粘土（土壌化層）
３：褐色細礫混粗粒砂　上面土壌化（扇状地性堆積層）
４：黄褐色細～粗粒砂（扇状地性堆積層）
５：暗青灰色シルト（扇状地性堆積層）
６：青黒色細～粗粒砂（扇状地性堆積層）
７：青灰色粘土質シルト（扇状地性堆積）
８：灰色細～粗粒砂【植物遺体含む】（扇状地性堆積層）

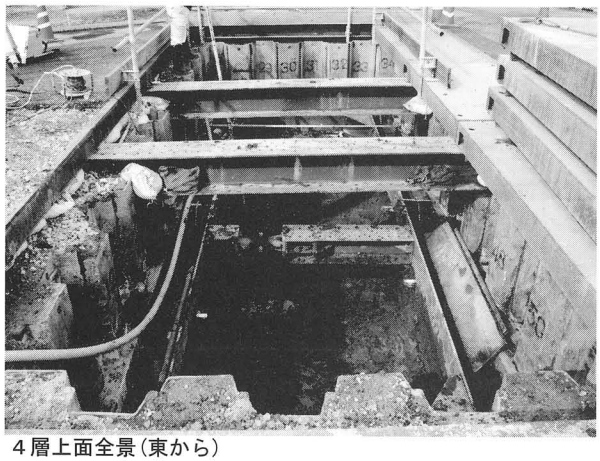
第３図　断面図

図版1

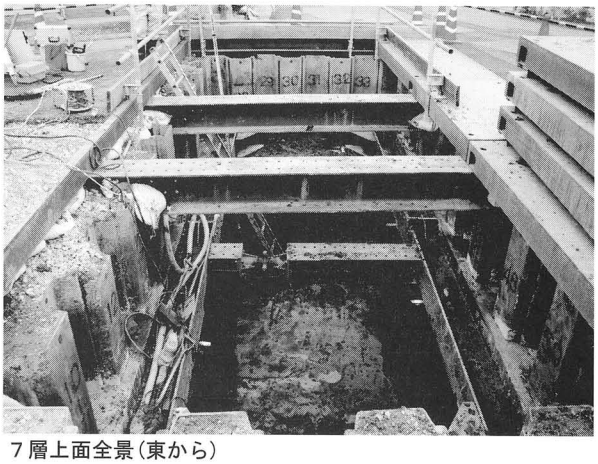
調査地周辺（西から）



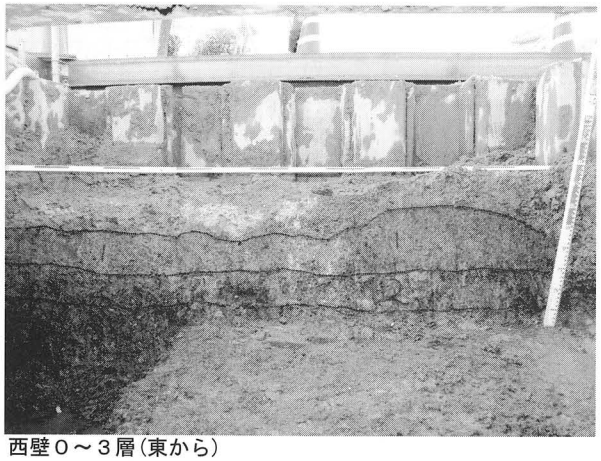
３層上面全景（東から）



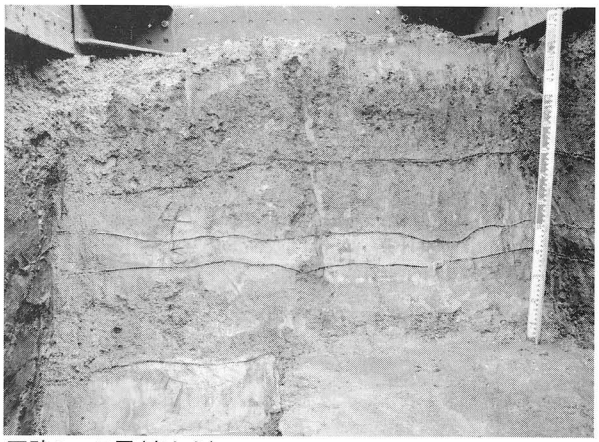
４層上面全景（東から）



７層上面全景（東から）



西壁０～３層（東から）



西壁３～７層（東から）

北西壁８層（南東から）

北壁３～７層調査状況（南東から）

Ⅵ　亀井遺跡第18次調査（ＫＭ2012－18）

例　　言

１．本書は、大阪府八尾市南亀井町４丁目地内で実施した下水道工事(24-23工区)に伴う発掘調査報告書である。

１．本書で報告する亀井遺跡第18次調査(ＫＭ2012－18)の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の埋蔵文化財発掘調査指示書に基づき、公益財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。

１．現地調査は、平成24年12月11日～12月26日(外業実働８日)に、坪田真一を調査担当者として実施した。調査面積は約39㎡である。

１．現地調査においては、伊藤静江・芝﨑和美・竹田貴子・田島宣子の参加を得た。

１．内業整理業務は坪田が行い、現地調査終了後随時実施し、平成25年３月31日に完了した。

１．本書の執筆・編集は坪田が行った。

本　文　目　次

１.はじめに……29
２.調査概要……30
　１)調査の方法と経過……30
　２)基本層序と出土遺物……30
　３)検出遺構と出土遺物……30
３.まとめ……32

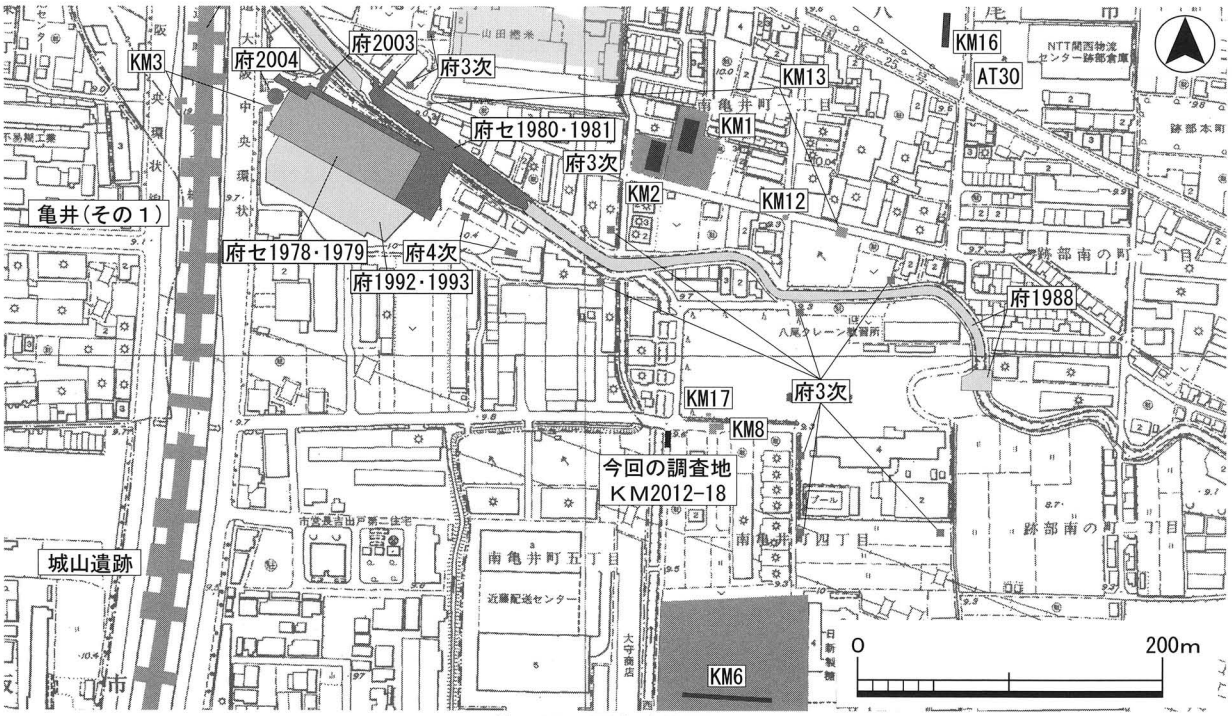
Ⅵ　亀井遺跡第18次調査（ＫＭ2012－18）

１．はじめに

亀井遺跡は八尾市の南西部、現在の行政区画では、亀井町１～４丁目及び南亀井町１～５丁目の東西約0.6km、南北約0.8kmがその範囲と推定されている。地理的には旧大和川水系の主流であった長瀬川と平野川に挟まれた低位沖積地上に立地する。周辺では北部に久宝寺遺跡、東部に跡部遺跡、西部に竹渕遺跡、南部に大阪市長原遺跡などが位置する。

本遺跡は、昭和43(1968)年の大阪中央環状線建設に先立つ平野川改修工事が行われた際、多量の弥生土器が出土したことによりその存在が確認され、大阪府教育委員会(以下、府教委)による第１次調査が実施された。そして昭和44(1969)年の大阪中央環状線建設予定地内における遺跡範囲確認調査以後、昭和53(1978)～56(1981)年には長吉ポンプ場建設及びこれに関連した平野川改修工事に伴う発掘調査、昭和63(1988)年には平野川改修工事に伴う発掘調査が府教委により実施された。また(財)大阪文化財センター(現、公益財団法人大阪府文化財センター)では、近畿自動車道建設に伴う確認調査を昭和48(1973)年に、そして昭和54(1979)～61(1986)年には本調査を実施している。こうした大規模な調査に加え、八尾市教育委員会や当調査研究会による小規模な調査も継続的に行われており、これらの結果、当遺跡は縄文時代～近世の複合遺跡であり、特に弥生時代においては中河内最大の拠点集落であったことが確認されている。

今回の調査地は遺跡範囲の南部に位置し、前述の府教委による平野川改修工事に伴う調査地(府1988)の南方約100ｍに位置する。周辺では東側約30ｍで当調査研究会が下水道工事に伴う第８次調査(KM8)を、また南約200ｍでは第６次調査(KM6)を実施しているが、遺跡南部では大規模な調査は実施されておらず、遺跡の実態は不明な点が多い。



第１図　調査地位置図

２．調査概要

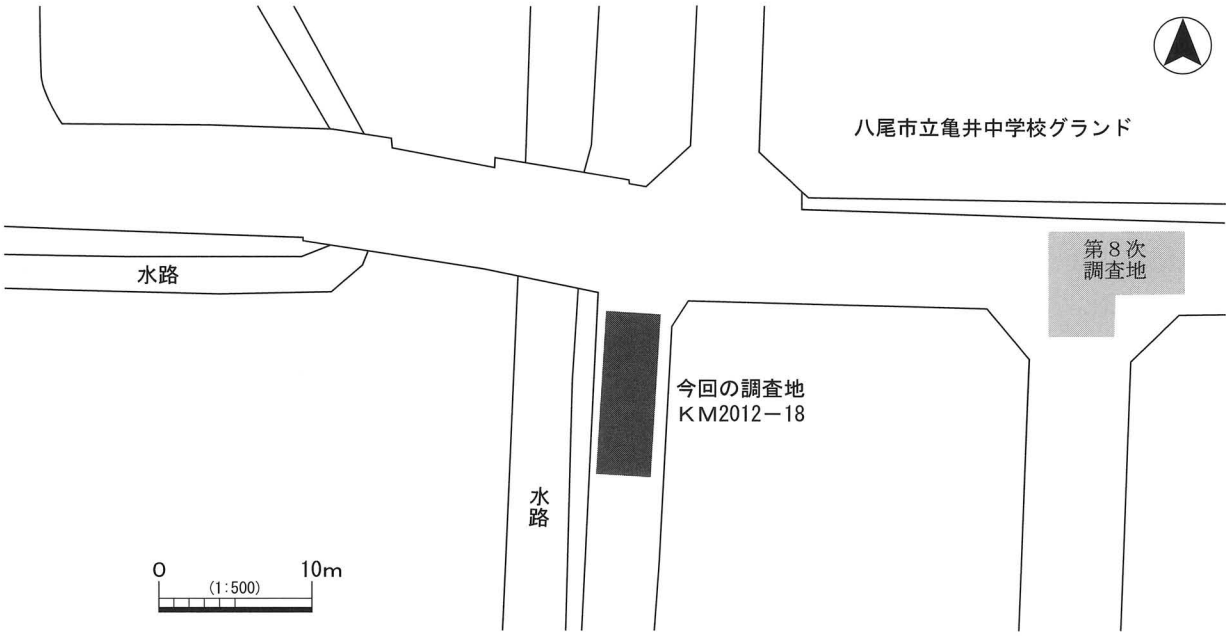
１）調査の方法と経過

今回の調査は八尾市南亀井町４丁目地内で実施した公共下水工事(24-23工区)に伴う調査で、当調査研究会が亀井遺跡内で行った第18次調査(ＫＭ2012－18)である。

調査地は立坑部分(東西約3.6m×南北約10.8m)１箇所で、総面積は約39㎡を測る。

調査は現地表(T.P.+9.5m)下約7.0mまでについて、地層観察用の壁を北・東に残しながら機械・人力掘削併用で実施した。

調査では工事図面記載の仮ＢＭ５(T.P.+9.813m)を標高の基準とした。



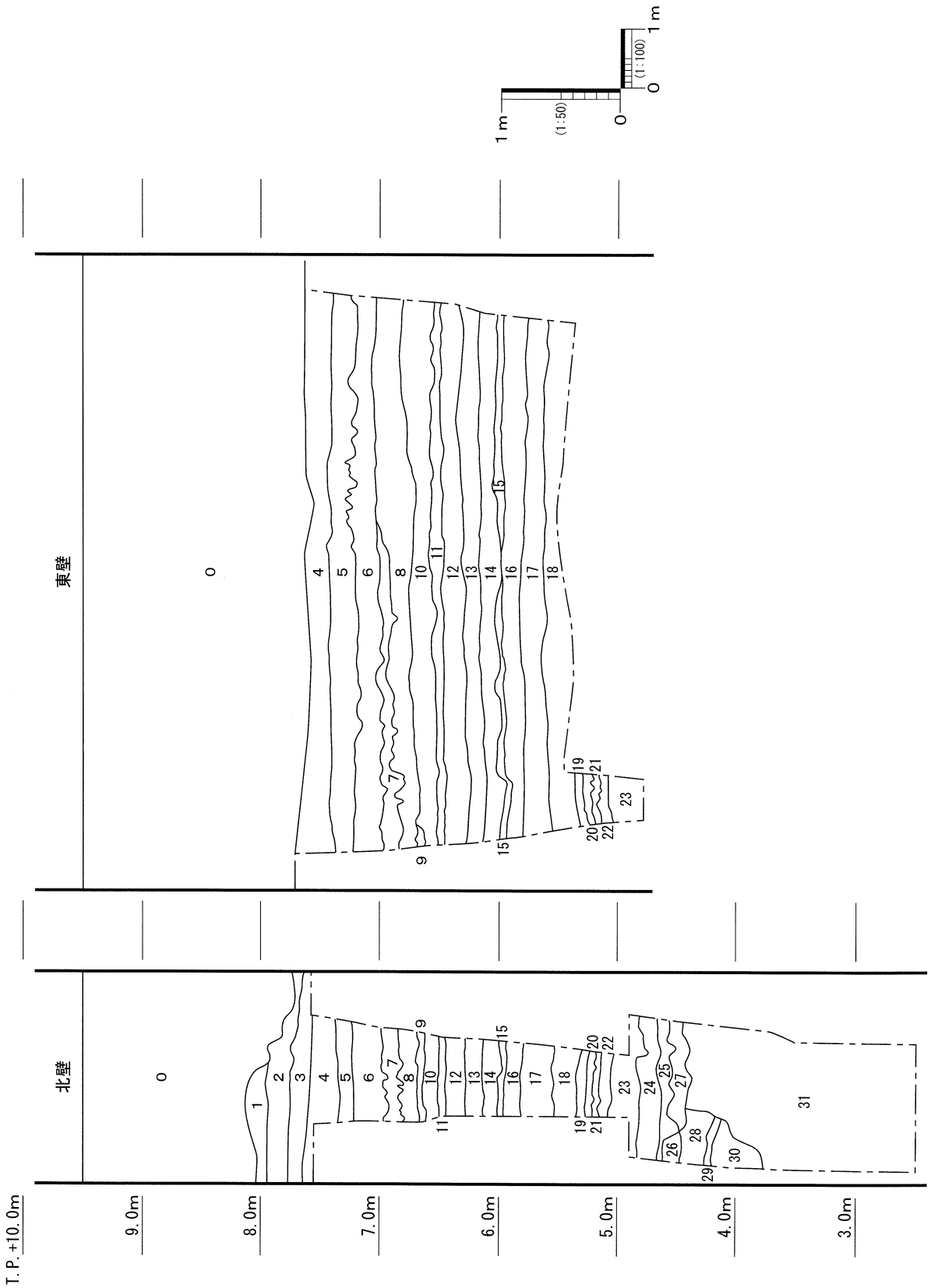
第２図　調査区位置図

２）基本層序と出土遺物

０層は盛土・撹乱。１層は旧耕土である。２～５層(T.P.+7.9～7.2m)は作土層で、２～４層は撹拌が著しく、５層はブロック状を呈する。時期的には中世～近世が考えられる。５層(T.P.+7.3m)から時期不明の土師器片が少量出土した。６～８層の粘土～極細粒砂互層は湿地性の水成層である。９～16層の粘土～シルト互層も湿地性の水成層で、植物遺体や炭酸鉄を多く含む。特に12層(T.P.+6.4m)は未分解の植物遺体をラミナ状に多量に含む層相である。17～23層の粘土互層も湿地性の水成層であるが、17層(T.P.+5.8m)・18層(T.P.+5.6m)は上部が暗色を呈し、また21層(T.P.+5.2m)も暗色を呈し土壌化している可能性がある。24～27層(T.P.+4.8～4.4m)の細粒砂～粗粒砂混粘土～粘土質シルトは土壌化層と考えられる。28～31層(T.P.+4.4m以下)は河川堆積で、28～30層が最終的な流路部分(深さ0.7m以上)であろう。31層の細粒砂～細礫互層は層厚1.9m以上を測る。

３）検出遺構と出土遺物

調査では遺構は認められなかった。



第３図　断面図

第３図層名

０．盛土・撹乱
１．5GY4/1暗オリーブ灰色極細粒砂～細粒砂混シルト質粘土　旧耕土
２．2.5Y7/2灰黄色シルト質粘土　Fe斑　撹拌作土
３．10YR6/2灰黄褐色シルト質粘土　Fe斑　Mn斑　撹拌作土
４．10YR6/1褐灰色シルト質粘土　Fe斑　Mn斑　撹拌作土
５．10YR7/3にぶい黄橙色極細粒砂混粘土質シルト　Fe斑　Mn斑　ブロック状作土
６．7.5GY6/1緑灰色粘土～シルト互層　水成層
７．2.5GY7/1明オリーブ灰色シルト～極細粒砂互層　水成層
８．2.5GY5/1オリーブ灰色粘土　水成層
９．5GY6/1オリーブ灰色粘土～シルト互層　炭酸鉄　水成層
10．2.5GY4/1暗オリーブ灰色粘土　炭酸鉄　ラミナ状植物遺体　水成層
11．2.5GY3/1暗オリーブ灰色粘土　炭酸鉄極多　ラミナ植物遺体　水成層
12．5GY4/1暗オリーブ灰色粘土～シルト質粘土互層　ラミナ状植物遺体極多　水成層
13．5GY6/1オリーブ灰色粘土～シルト質粘土互層　ラミナ状植物遺体　水成層
14．2.5GY4/1暗オリーブ灰色粘土　ラミナ状植物遺体　水成層
15．2.5GY3/1暗オリーブ灰色粘土　炭酸鉄　ラミナ状植物遺体　水成層
16．2.5GY3/1暗オリーブ灰色粘土～シルト質粘土互層　ラミナ状植物遺体　水成層
17．5GY5/1オリーブ灰色粘土　炭酸鉄　水成層　上部暗色土壌化？
18．5GY4/1暗オリーブ灰色粘土　水成層　上部暗色土壌化？
19．10Y6/2オリーブ灰色粘土　水成層
20．5GY4/1暗オリーブ灰色粘土　水成層
21．5Y2/1黒色粘土　ブロック状土壌化層？
22．5GY7/1明オリーブ灰色粘土　水成層
23．2.5GY5/1オリーブ灰色粘土互層　水成層
24．7.5GY3/1暗緑灰色細粒砂～中粒砂混粘土　暗色土壌化層？
25．5GY3/1暗オリーブ灰色細粒砂～中粒砂混シルト質粘土　暗色土壌化層？
26．2.5GY5/1オリーブ灰色極細粒砂～細粒砂混粘土質シルト　土壌化層？
27．7.5GY5/1緑灰色細粒砂～粗粒砂混粘土質シルト　土壌化層？
28．7.5GY6/1緑灰色極細粒砂～粗粒砂混粘土質シルト　水成層
29．7.5GY6/1緑灰色細粒砂～粗粒砂多混シルト　水成層
30．5GY6/1オリーブ灰色シルト～細粒砂互層　水成層
31．7.5Y5/1灰色細粒砂～細礫　水成層(河川堆積)

３．まとめ

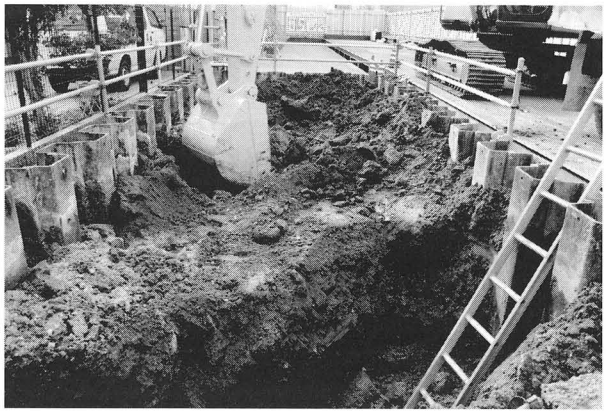
今回の調査では中世～近世と考えられる作土層を確認した。それ以下では基本的に水成層(河川堆積～湿地性堆積)が見られたが、T.P.+5.8～4.4mにおいて土壌化層と考えられる暗色を呈する地層が数枚認められた(17・18・21・24～27層)。西部の調査地との対比から縄文時代～弥生時代の生活面に相当する可能性があるが、遺物等は認められず詳細は不明である。

参考文献

・田代克己・中井貞夫1972『亀井遺跡発掘調査概要・Ⅱ－八尾市南亀井町所在－　大阪府文化財調査概要1971－５』大阪府教育委員会
・森井貞雄1989『1988年度　亀井遺跡発掘調査概要－八尾市南亀井町・跡部北の町所在－』大阪府教育委員会
・高萩千秋1999「Ⅳ　亀井遺跡第６次調査(ＫＭ97－６)『財団法人八尾市文化財調査研究会報告62』財団法人八尾市文化財調査研究会
・岡田清一・樋口薫2000「Ⅶ　亀井遺跡第８次調査(ＫＭ98－８)『財団法人八尾市文化財調査研究会報告65』財団法人八尾市文化財調査研究会

図版1

調査地（北から）



1次機械掘削（北から）

北壁（0～3層）

6層上面（北から）

6層上面（南から）

12層上面（北から）

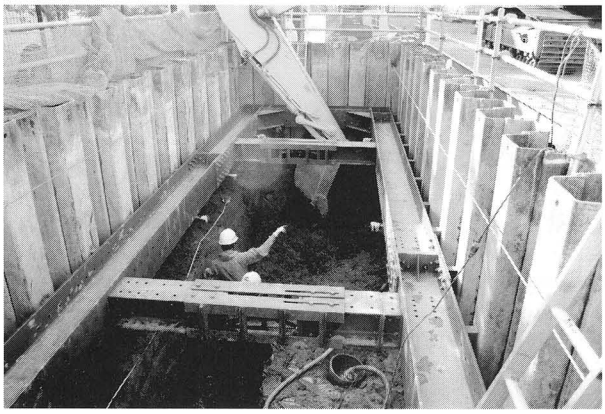
調査状況（南東から）

調査状況（北から）

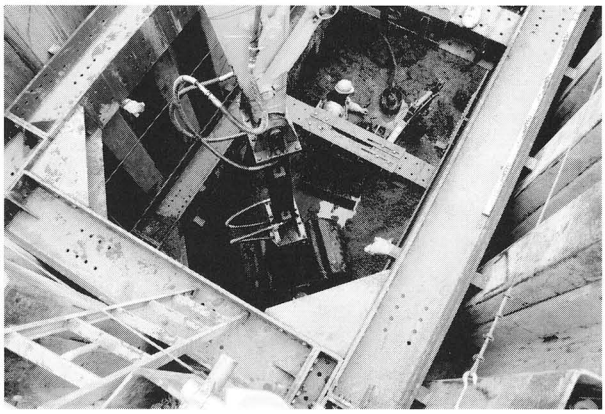
図版2

13層上面(北から)

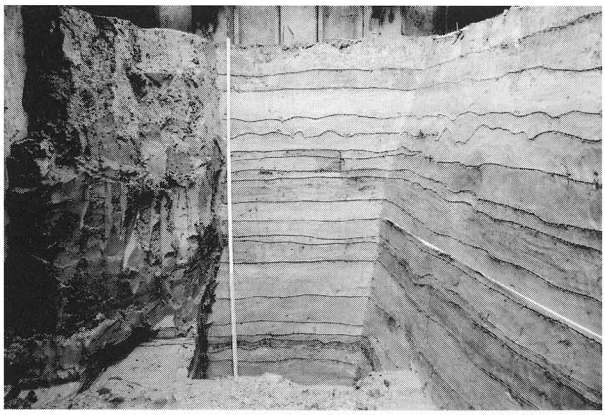
17層上面(北から)



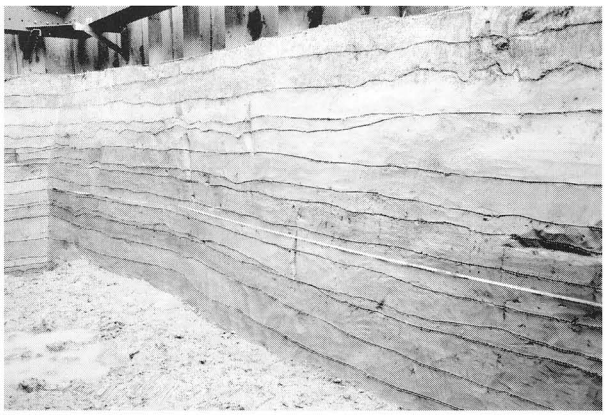
２次機械掘削(北から)



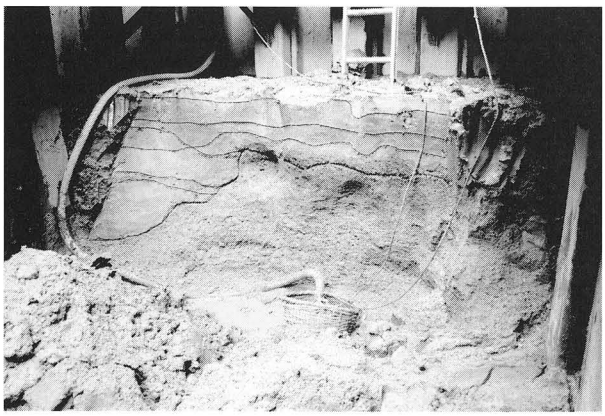
下層掘削(南東から)



北壁(４～23層)



東壁(４～18層)



北壁(23～31層)

北壁(31層下部)

Ⅶ　木の本遺跡第23次調査（ＳＫ2011－23）

例　　言

1．本書は、大阪府八尾市木の本三丁目・南木の本八丁目地内で実施した下水道工事(22-41工区)に伴う発掘調査報告書である。

1．本書で報告する木の本遺跡第23次調査(ＳＫ2011－23)の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の埋蔵文化財調査指示書に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。

1．現地調査は、平成23年７月12日～平成24年３月10日(外業実働８日)に、坪田真一を調査担当者として実施した。調査面積は約32㎡である。

1．現地調査においては、梶本潤二・芝﨑和美・竹田貴子・田島宣子の参加を得た。

1．内業整理業務は坪田が行い、現地調査終了後随時実施し、平成25年３月31日に完了した。

1．本書の執筆・編集は坪田が行った。

本　文　目　次

1．はじめに……35

2．調査概要……36

　1)調査の方法と経過……36

　2)基本層序と検出遺構……36

3．まとめ……38

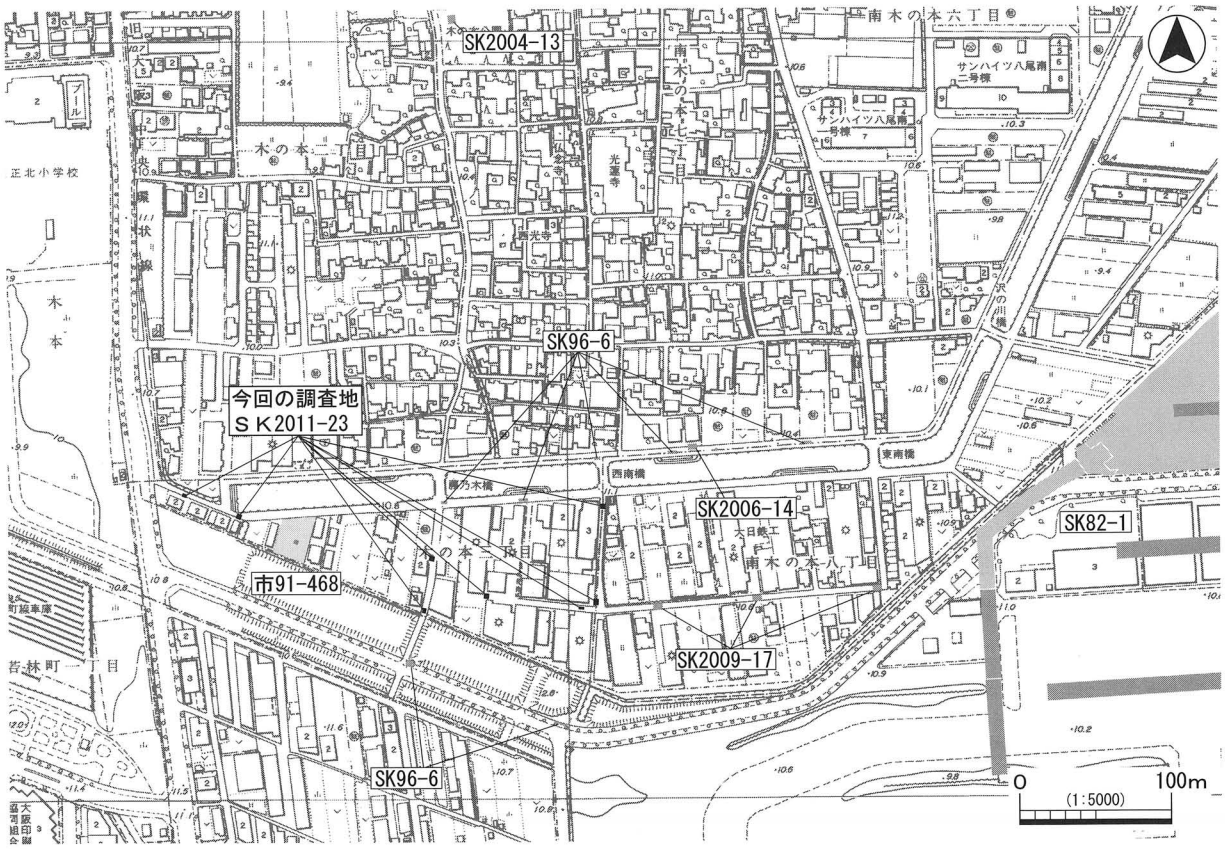
Ⅶ　木の本遺跡第23次調査（ＳＫ2011－23）

１．はじめに

木の本遺跡は八尾市南西部に位置し、八尾空港とその西側一帯、現在の行政区画では木の本１～３、南木の本２～９、空港１丁目の東西約2.0km・南北約1.5kmがその範囲とされている。地理的には河内平野の南西部、旧大和川水系の平野川左岸の沖積地上に位置し、東側に田井中遺跡・老原遺跡、西～南側には八尾南遺跡・太田遺跡が隣接する他、北側には太子堂遺跡・植松遺跡・植松南遺跡といった平野川流域に展開する遺跡群が存在する。

当遺跡は、昭和56(1981)年３月に八尾市教育委員会が南木の本４丁目において実施した試掘調査により認識された遺跡である。この結果を受けて実施された発掘調査では、弥生時代中期、古墳時代前期・中期の集落遺構や多くの遺物が検出されている。その後、当遺跡では大阪府教育委員会・市教委・当研究会により継続的に発掘調査が実施され、弥生時代前期以降の複合遺跡であることが確認されている。昭和57(1982)～59(1984)年には遺跡範囲の多くを占める八尾空港内の整備事業に伴う調査を当研究会が実施し、全域で古代及び近世の条里遺構を確認している。

今回の調査地は遺跡範囲西端にあたる。周辺での調査成果を概観すると、市教委91-468で古墳時代後期の遺構（土坑・溝・水田）・遺物が検出されている他、当研究会第６次調査（ＳＫ94－６）で古代末の水田の可能性がある地層を確認している。また西接する八尾南遺跡域では古墳時代中期～後期の水田が検出されている。



第１図　調査地位置図

２．調査概要

１）調査の方法と経過

今回の調査は八尾市木の本三丁目・南木の本八丁目地内で実施した下水道工事(22-41工区)に伴う調査で、当調査研究会が木の本遺跡内で行った第23次調査(ＳＫ2011－23)である。

調査地は人孔部分８箇所(約2.0×2.0m：西から１～８区)で、八尾空港北濠南側の道路上に位置する。総面積は約32㎡を測る。

調査は現地表(T.P.＋ 10.7～11.4m)下1.6～3.0mについて、機械・人力掘削併用で実施した。

調査では点在する工事使用のベンチマークを標高の基準とした。

２）基本層序と検出遺構

１区

０層は盛土。１層は旧耕土。２・３層も撹拌された作土で、時期は近世頃であろう。４層は河川堆積である。遺物は３層から唐津焼碗が１点出土した。

第１面－２層上面(T.P.+9.8m)で土坑１基(**ＳＫ111**)を検出した。北東部に位置し、北部・東部は調査区外に至るため全容は不明である。平面形は円形に近く、規模は東西0.8m以上・南北0.7m以上・深さ約30cmを測る。埋土は7.5GY5/1緑灰色極細粒砂～細粒砂混シルト質粘土(ブロック状)の単層である。層位的にごく近世の耕作関連遺構と考えられる。

２区

５～８層は粘性の強い粘土～シルト質粘土で作土と考えられ、いずれかが西部や東部で確認されている古墳時代中期～後期の水田作土に該当すると思われる。

１層下面で井戸１基(**ＳＥ211**)を検出した。北西部に位置し、北部・西部は調査区外に至るため全容は不明である。底部が洪水砂である９層に達していることから井戸とした。平面形は直径1.3m程度の円形と考えられ、深さは約1.1mを測る。埋土は2.5GY4/1暗オリーブ灰色粘土ブロック混シルト～粗粒砂の単層で、一気に埋め戻された状況である。井戸枠は見られなかったが、本来素掘りであったのか、廃絶時に枠が除去されたのかは不明である。層位的に時期は近世～近代に比定される。遺物は出土していない。

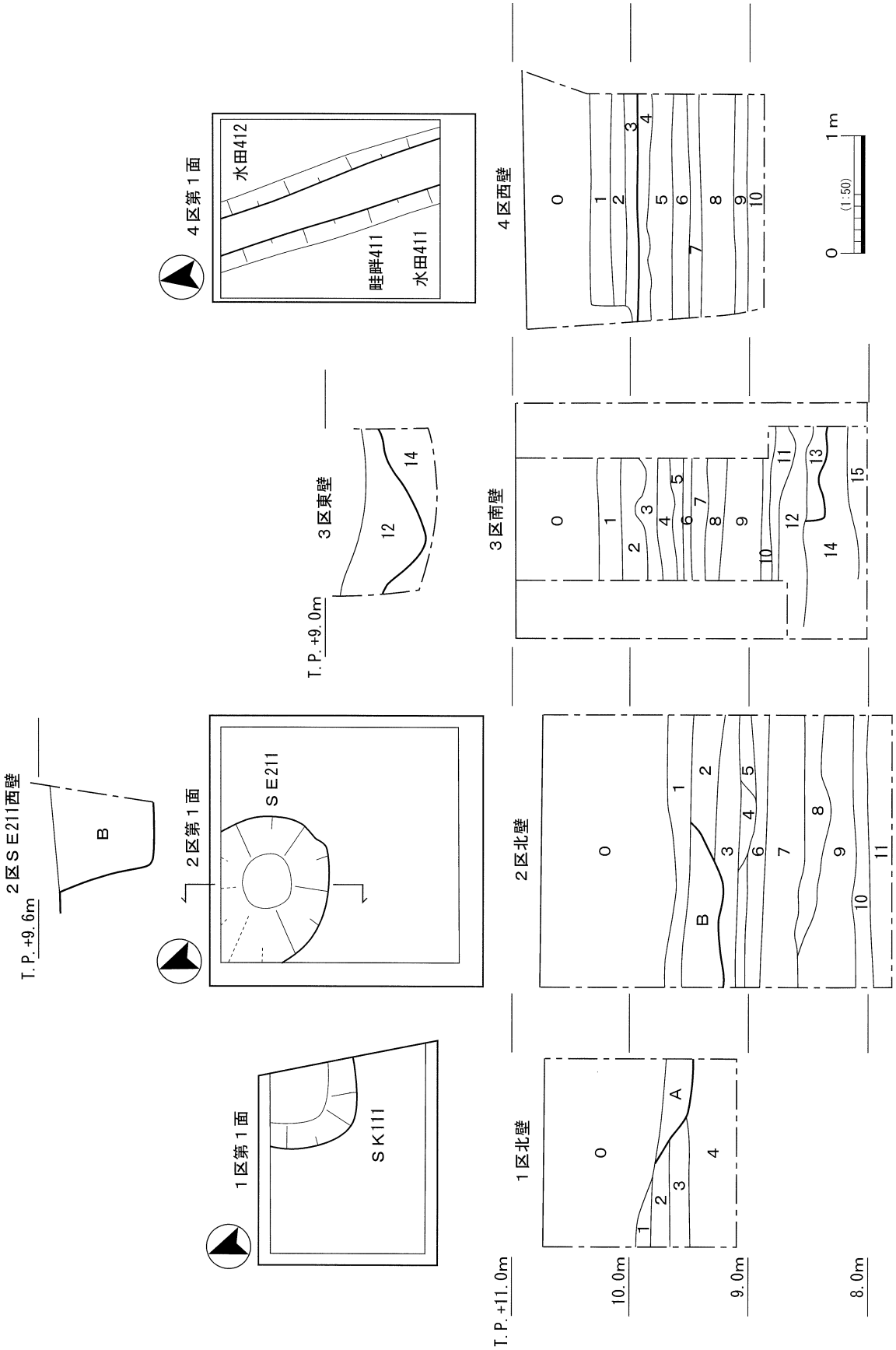
３区

０層は盛土。１層は旧耕土。２～５層も撹拌された作土である。６層は水成層で洪水砂と考えられる。７～10層は撹拌された作土で、８～10層は粘性が強い粘土～シルト質粘土である。11層は静水性の水成層である。T.P.+8.8mの12層が弥生後期～古墳時代初頭頃の遺物包含層となっており、数点の土器片が出土している。T.P.+8.5mの14層以下は水成層で、上面が遺構面で、断面で遺構(13層)を確認した。南壁では深さ15cm程度の落ちが見られ、埋土はブロック状の単層である。また東・西壁では12層を埋土とする深さ30cm程度の落ちが見られ、東西方向の溝である可能性がある。

４区

０層は盛土。１層は旧耕土。２～４層も撹拌された作土である。５層は水成層で洪水砂と考えられ、３区６層に対応すると思われる。６～９層も撹拌された作土である。10層は水成層である。

第１面－４層上面(T.P.+10.0m)で南北方向の畦畔(**畦畔411**)で区画された水田(**水田411・412**)


4区第1面
水田412
畦畔411
水田411
4区西壁
0
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
1m
0
(1:50)
3区東壁
12
14
T.P.+9.0m
3区南壁
0
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
2区SE211西壁
B
T.P.+9.6m
2区第1面
SE211
2区北壁
0
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
B
1区第1面
SK111
1区北壁
0
1
2
3
4
A
T.P.+11.0m
10.0m
9.0m
8.0m

第２図　１～４区平断面図

を検出した。畦畔411は上幅30～40cm・下幅約60cm・高さ約10cmを測る。遺構面からは近世磁器や時期不明の土師器・須恵器片が出土した。また４層からは古代頃に比定される土師器・須恵器片が少量出土している。４層が東方の調査地で確認されている古代水田面に対応する可能性がある。

５区

０層は盛土。１層は旧耕土。２・３層も作土と考えられる。４層は水成層で、洪水砂の可能性がある。５層はブロック状の作土である。６層は水成層で、４層と同様洪水砂の可能性がある。７・８層は撹拌された作土で、北部では間層として洪水砂と考えられる細粒砂～粗粒砂が見られた。９層は水成層と考えられるが、やや土壌化しており作土の可能性もある。

第１面－２層上面(T.P.+10.2m)で南北方向の溝(ＳＤ511)を検出した。直線的に延びる西肩を検出したもので、規模は幅1.6m以上・深さ約70cmを測る大規模な溝である。検出部分から判断して断面逆台形を呈すると思われる。埋土は砂混シルト質粘土を基調とするもので、流水状況は顕著には認められない。18～19世紀に比定される近世陶磁器や瓦が出土した。

第２面－９層上面(T.P.+9.3m)で落ち込み(ＳＯ521)を検出した。東西方向の肩から南に浅く落ち込むもので、規模は幅1.5m以上・深さ10cm程度を測る。埋土は作土である８層が落ち込む状況で、耕作段差と捉えられる。８層からは古墳時代中期～後期頃の須恵器甕片や土師器片が出土しており、該期の生産域の可能性がある。また７層からは古代頃の土師器・須恵器片が出土しており、東方の調査地で確認されている古代水田面に対応する可能性がある。

６区

０層は盛土。１層は近年の整地層である。２層は近代のゴミや廃材を含むシルト～粗粒砂で、整地の際に埋められた地層と考えられる。

７区

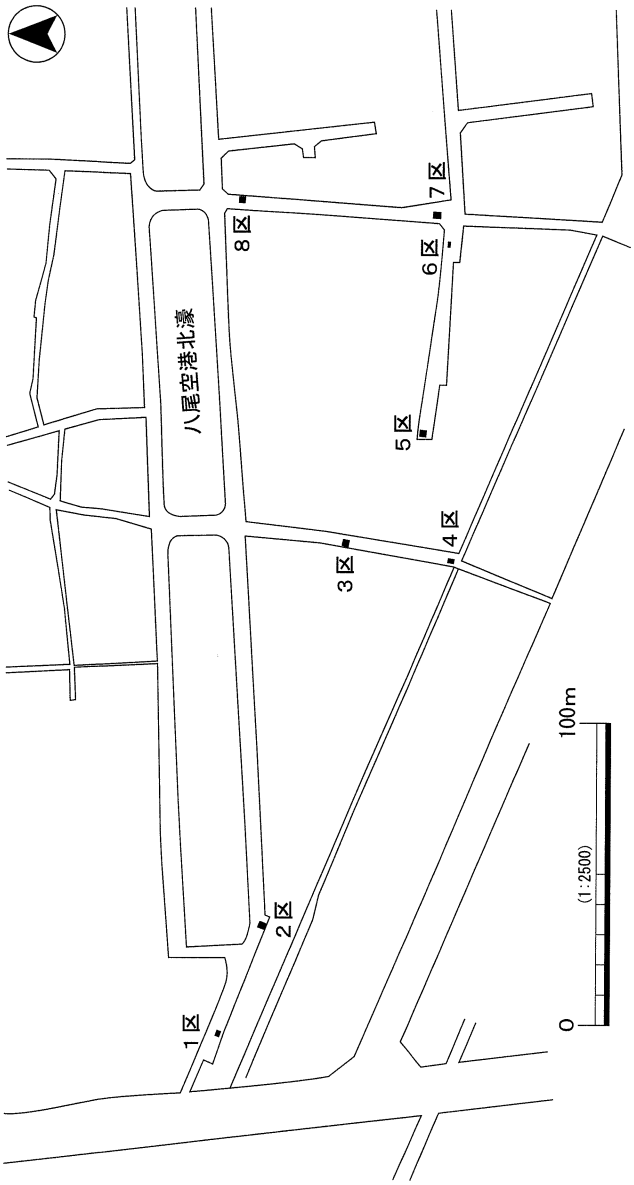
既設管路等による撹乱が調査区全体に及んでおり、東壁断面観察のみ実施した。２・３層は撹拌された作土である。４層はラミナが顕著な河川堆積である。

８区

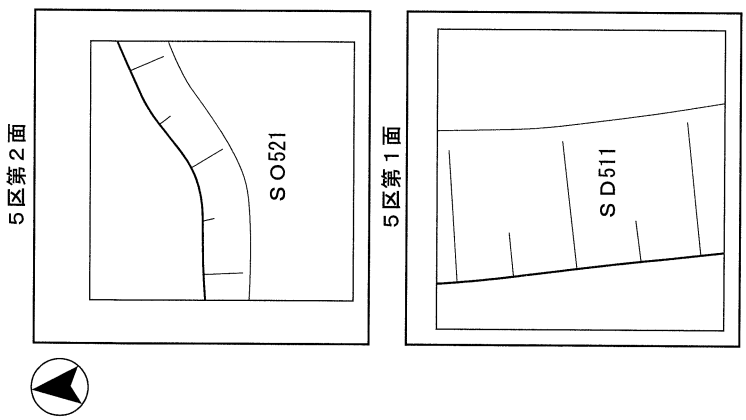
０層は盛土。１層は旧耕土。２～４層は撹拌された作土で、３層から平瓦片１点が出土している。５～７層は河川堆積で、７区４層に相当すると考えられる。８層は炭酸鉄を含む湿地性堆積である。

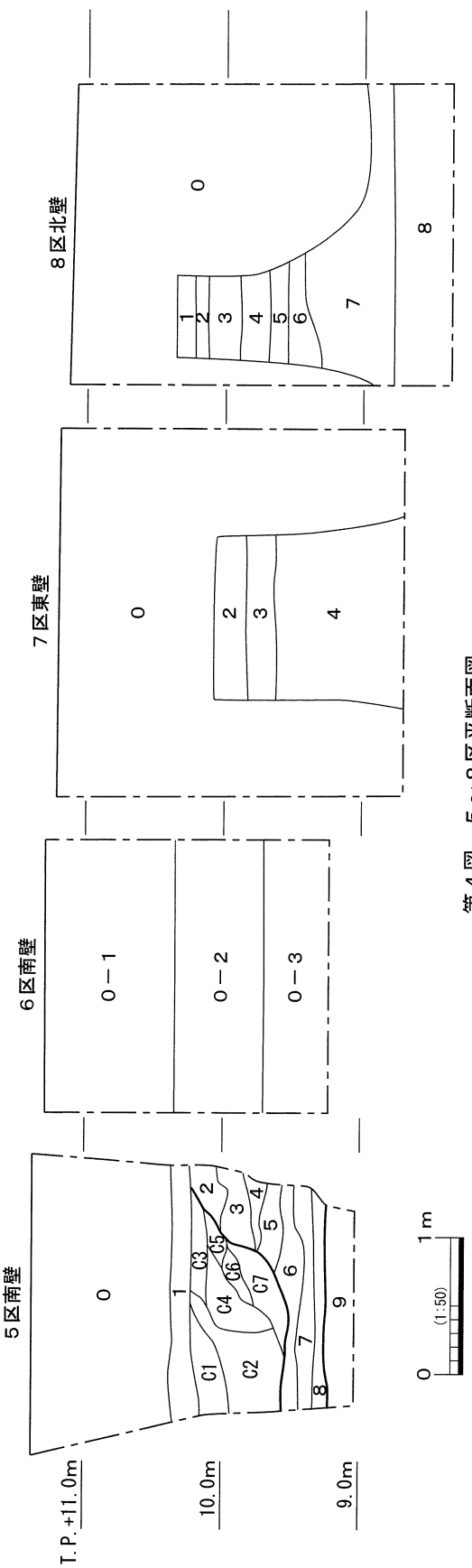
３．まとめ

調査では、調査範囲の中央にあたる５区で古墳時代中期～後期、３区で弥生時代後期頃と考えられる遺物包含層や遺構と考えられる地層を確認した。３区西方の市教委91-468調査地では古墳時代後期の遺構・遺物が検出されているが、弥生時代後期～古墳時代の集落が東西方向に展開していた可能性があろう。また隣接する西の八尾南遺跡、南の太田遺跡で確認されている該期の集落との関連が考えられる。古代以降については東部の既往調査地と同様に生産域となっており、３～５区では古代の土器を含む作土を確認した。



第３図　調査区位置図





第４図　５～８区平断面図

層　名

【１～８区】
０．盛土
１．7.5GY5/1緑灰色極細粒砂混シルト　旧耕土

【１区】
２．10YR5/3にぶい黄褐色極細粒砂～細粒砂混粘土質シルト　Mn斑　撹拌作土
３．10YR6/2灰黄褐色極細粒砂～細粒砂多混シルト　Mn斑　撹拌作土
４．2.5Y6/3にぶい黄色シルト～細粒砂　河川堆積
ＳＫ111
Ａ．7.5GY5/1緑灰色極細粒砂～細粒砂混シルト質粘土　ブロック状

【３区】
２．5GY5/1オリーブ灰色極細粒砂～細粒砂混シルト質粘土　撹拌作土
３．10YR6/1褐灰色極細粒砂混シルト質粘土　Fe斑　撹拌作土
４．10YR5/1褐灰色極細粒砂～細粒砂混シルト質粘土　撹拌作土
５．10YR5/1褐灰色細粒砂～粗粒砂極多混シルト質粘土　撹拌作土　古代の須恵器・土師器
６．2.5Y7/4浅黄色粘土質シルト～粗粒砂　水成層　洪水砂
７．10YR6/1褐灰色シルト～極細粒砂ブロック混シルト質粘土　Fe斑　撹拌作土
８．10YR5/1褐灰色極細粒砂～細粒砂混シルト質粘土　Fe斑　撹拌作土　粘性強
９．10YR5/2灰黄褐色極細粒砂混粘土　Fe斑　撹拌作土　粘性強
10．10YR4/1褐灰色細粒砂～粗粒砂混シルト質粘土　Fe斑　撹拌作土　粘性強
11．5GY6/1オリーブ灰色粘土～シルト質粘土　Fe斑　水成層
12．2.5Y3/1黒褐色極細粒砂混粘土質シルト　弥生土器(後期？)
13．5Y3/1オリーブ黒色シルト質粘土ブロック混シルト　遺構？
14．2.5GY6/1オリーブ灰色シルト～極細粒砂互層　水成層　上部撹拌土壌化
15．5Y6/1灰色細粒砂　水成層(河川)

【５区】
２．2.5Y5/2暗灰黄色極細粒砂～細粒砂混シルト質粘土　撹拌作土？
３．10YR6/4にぶい黄橙色極細粒砂～細粒砂混シルト質粘土　Fe斑多　土壌化層　作土？
４．2.5Y6/2灰黄色細粒砂～中粒砂　水成層
５．2.5Y6/2灰黄色細粒砂～中粒砂ブロック混シルト質粘土　Fe斑　作土？
６．2.5Y7/3浅黄色細粒砂～中粒砂　水成層
７．2.5Y6/1黄灰色細粒砂ブロック混粘土　Fe斑　撹拌作土　古代の土師器・須恵器
８．10YR5/1褐灰色細粒砂ブロック混粘土　Fe斑　ＳＯ521埋土　５～６Ｃの土師器・須恵器
９．2.5Y5/1黄灰色シルト～極細粒砂　Fe斑　水成層？
ＳＤ511
C1．7.5GY5/1緑灰色細粒砂～中粒砂混シルト質粘土
C2．5GY5/1オリーブ灰色細粒砂～中粒砂少混シルト質粘土
C3．10YR5/3にぶい黄褐色極細粒砂～粗粒砂混シルト質粘土　Mn斑
C4．2.5Y7/2灰黄色極細粒砂混シルト質粘土　Fe斑
C5．10YR6/2灰黄褐色極細粒砂～細粒砂混シルト　Fe斑　Mn斑
C6．2.5Y6/1黄灰色極細粒砂～細粒砂
C7．2.5Y6/2灰黄色細粒砂～粗粒砂ブロック混シルト質粘土　Fe斑

【２区】
２．2.5GY5/1オリーブ灰色シルトブロック混細粒砂　ブロック状作土
３．5Y4/1灰色極細粒砂～細粒砂少混粘土　撹拌作土
４．5Y6/1灰色シルトブロック混細粒砂～中粒砂　ブロック状作土
５．5Y6/1灰色極細粒砂少混粘土　Fe斑　撹拌作土　粘性強　南東古墳後期？
６．10YR4/1褐灰色細粒砂混粘土　Fe斑　撹拌作土　粘性強　南東古墳後期？
７．2.5Y4/1黄灰色細粒砂～粗粒砂混シルト質粘土　Fe斑　撹拌作土　粘性強　南東古墳後期？
８．10YR4/1褐灰色細粒砂～粗粒砂混シルト質粘土　ブロック状　作土？
９．5Y5/1灰色シルト～粗粒砂　洪水砂？
10．2.5GY5/1オリーブ灰色細粒砂～粗粒砂少混シルト質粘土　作土？
11．7.5Y4/1灰色シルト質粘土～細粒砂互層　水成層
ＳＥ211
Ｂ．2.5GY4/1暗オリーブ灰色粘土ブロック混シルト～粗粒砂　ブロック状

【４区】
２．2.5Y6/2灰黄色細粒砂混粘土質シルト　Fe斑　撹拌作土
３．2.5Y6/3にぶい黄色細粒砂～粗粒砂混シルト　Fe斑　撹拌作土
４．10YR5/1褐灰色細粒砂～粗粒砂混シルト質粘土　Fe斑　作土？　古代の土師器・須恵器
５．10YR5/4にぶい黄褐色シルト～粗粒砂互層　水成層
６．2.5Y6/1黄灰色極細粒砂～細粒砂混シルト質粘土　Fe斑　撹拌作土
７．2.5Y6/1黄灰色細粒砂～粗粒砂多混シルト質粘土　Fe斑　撹拌作土
８．10YR6/1褐灰色細粒砂混シルト質粘土　Fe斑　撹拌作土
９．2.5GY4/1暗オリーブ灰色シルト質粘土ブロック混細粒砂～粗粒砂　作土？
10．2.5GY5/1オリーブ灰色シルト混細粒砂～粗粒砂　水成層

【６区】
０－１．盛土
０－２．5GY5/1オリーブ灰色細粒砂～粗粒砂混シルト　硬く締まる　整地層
０－３．5GY6/1オリーブ灰色シルト～粗粒砂　近代のゴミ含む

【７区】
２．10YR5/2灰黄褐色細粒砂～粗粒砂混シルト質粘土　Fe斑　撹拌作土
３．2.5Y5/2暗灰黄色細粒砂混シルト質粘土　Fe斑　撹拌作土
４．2.5Y6/1黄灰色極細粒砂～粗粒砂　ラミナ　水成層

【８区】
２．2.5Y5/2暗灰黄色極細粒砂混粘土質シルト　Fe斑　撹拌作土
３．10YR6/3にぶい黄橙色極細粒砂～細粒砂多混粘土質シルト　Fe斑　撹拌作土　平瓦
４．10YR6/2灰黄褐色極細粒砂～細粒砂多混シルト　Fe斑　撹拌作土
５．5Y7/1灰白色極細粒砂～細粒砂　下部Fe斑　水成層　ラミナ
６．2.5Y5/1黄灰色極細粒砂～細粒砂混シルト質粘土　Fe斑　一部ラミナ　水成層
７．2.5Y6/2灰黄色極細粒砂～極粗粒砂　ラミナ　水成層
８．2.5GY4/1暗オリーブ灰色シルト質粘土　植物遺体　炭酸鉄　水成層

参考文献

・渟　斎1993「１．木の本遺跡（91-468）」『八尾市内遺跡平成４年度発掘調査報告書Ⅰ　八尾市文化財調査報告27　平成４年度国庫補助事業』八尾市教育委員会
・西村公助1996「Ⅰ　木の本遺跡第６次調査（ＳＫ94－６）」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告50』財団法人八尾市文化財調査研究会
・米田敏幸・他1981『八尾南遺跡－大阪市高速電気軌道２号線建設に伴う発掘調査報告書－』八尾南遺跡調査会
・坪田真一1998「Ⅵ　八尾南遺跡第21次調査（ＹＳ94－21）」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告61』財団法人八尾市文化財調査研究会
・原田昌則2007「１－１　太田遺跡（2005－366）の調査」『八尾市内遺跡平成18年度発掘調査報告書　八尾市文化財調査報告55　平成18年度国庫補助事業』八尾市教育委員会
・原田昌則1983『木の本遺跡－八尾空港整備事業に伴う発掘調査－　財団法人八尾市文化財調査研究会報告４』財団法人八尾市文化財調査研究会

図版1

1・2区周辺(西から)

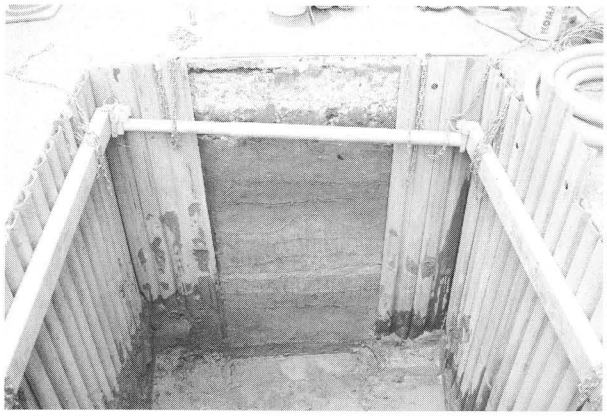
1区第1面(南から)

1区北壁

2区第1面(南から)

2区SE211(東から)

2区北壁

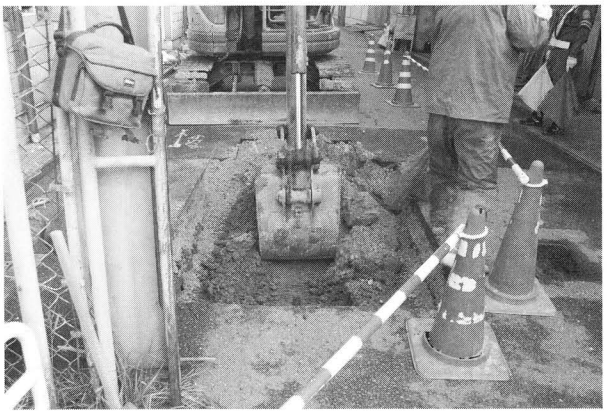


3区南壁上部

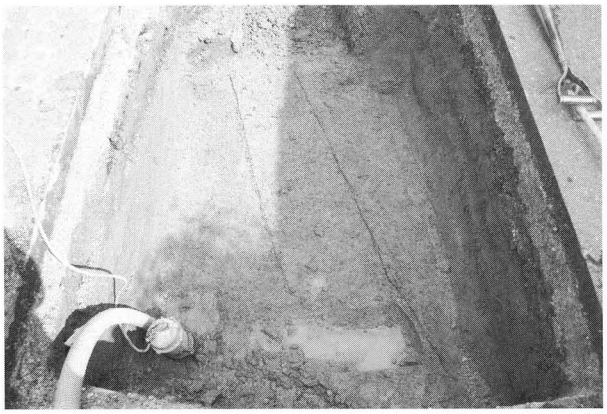
3区南壁下部

図版2

４区周辺（南から）



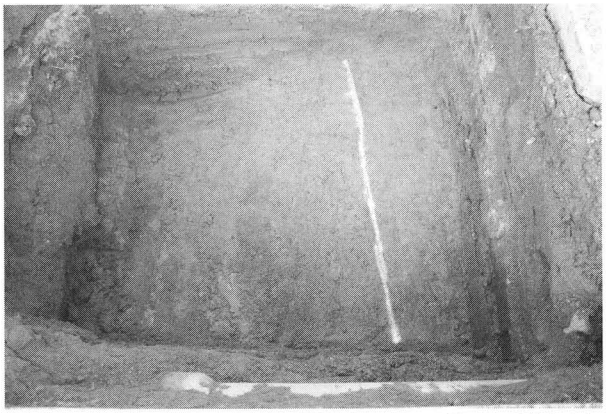
４区機械掘削（南から）



４区第１面（南から）

４区西壁

５区機械掘削（西から）



５区第１面（北から）

５区第２面（西から）

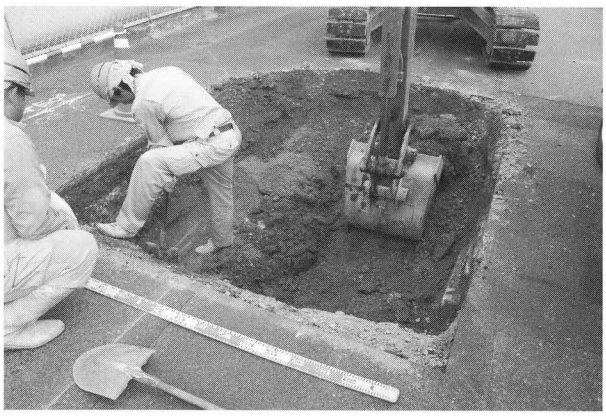
５区南部

図版3

6区機械掘削（西から）

6区（西から）

6区南壁



7区機械掘削（南から）

7区東壁

8区周辺（北から）

8区北壁上部

8区西壁下部

Ⅷ　木の本遺跡第24次調査（ＳＫ2012－24）

例　　言

1．本書は、大阪府八尾市南木の本５・６丁目地内で実施した下水道工事(23-113工区)に伴う発掘調査報告書である。

1．本書で報告する木の本遺跡第24次調査(ＳＫ2012－24)の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の埋蔵文化財調査指示書に基づき、公益財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。

1．現地調査は、平成24年５月30日～平成24年６月28日(外業実働２日)に、坪田真一・西村公助を調査担当者として実施した。調査面積は約８㎡である。

1．現地調査においては、伊藤静江・北原清子・竹田貴子・山内千惠子の参加を得た。

1．内業整理業務は調査担当者が行い、現地調査終了後随時実施し、平成25年３月31日に完了した。

1．本書の執筆・編集は坪田が行った。

本　文　目　次

1．はじめに……45
2．調査概要……46
　1)調査の方法と経過……46
　2)基本層序……46
3．まとめ……46

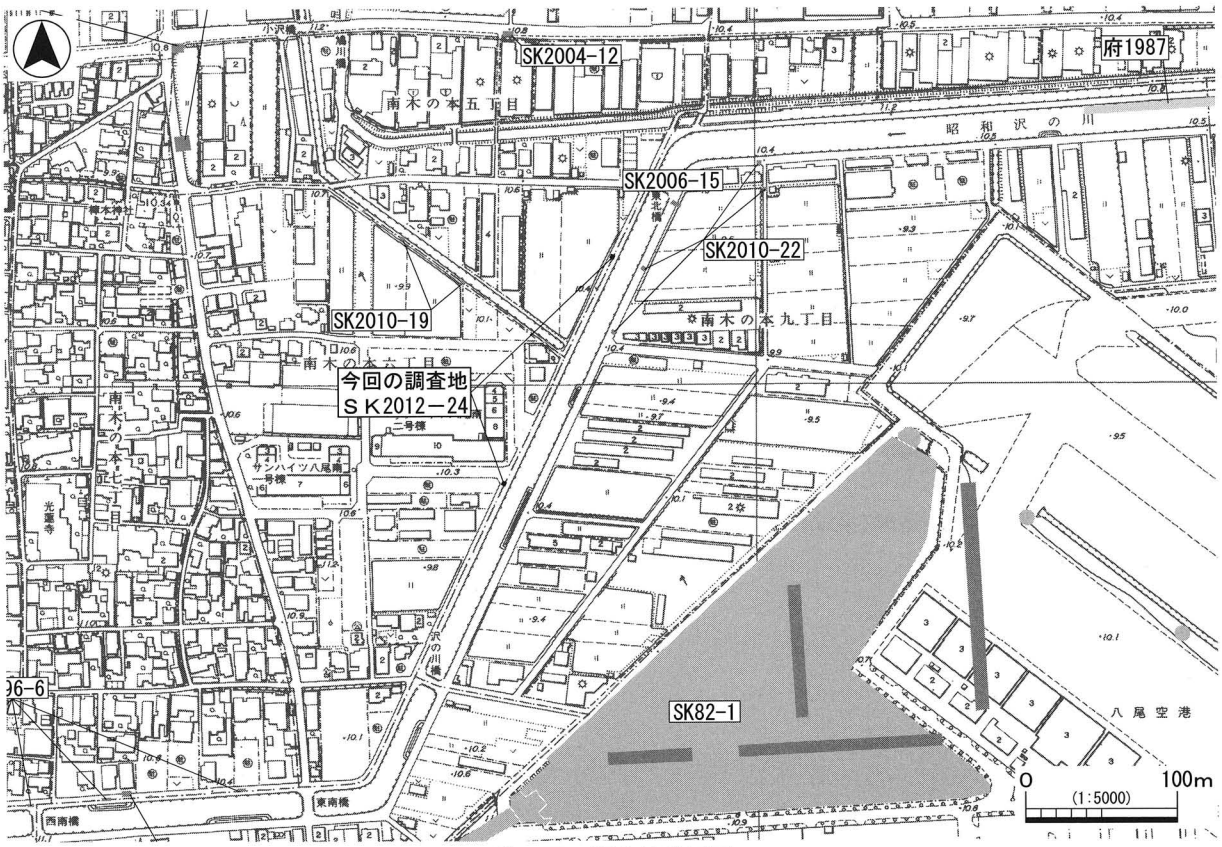
Ⅷ　木の本遺跡第24次調査（ＳＫ2012－24）

１．はじめに

木の本遺跡は八尾市南西部に位置し、八尾空港とその西側一帯、現在の行政区画では木の本１～３、南木の本２～９、空港１丁目の東西約2.0km・南北約1.5kmがその範囲とされている。地理的には河内平野の南西部、旧大和川水系の平野川左岸の沖積地上に位置し、東側に田井中遺跡・老原遺跡、西～南側には八尾南遺跡・太田遺跡が隣接する他、北側には太子堂遺跡・植松遺跡・植松南遺跡といった平野川流域に展開する遺跡群が存在する。

当遺跡は、昭和56(1981)年３月に八尾市教育委員会が南木の本４丁目において実施した試掘調査により認識された遺跡である。この結果を受けて実施された発掘調査では、弥生時代中期、古墳時代前期・中期の集落遺構や多くの遺物が検出されている。その後、当遺跡では大阪府教育委員会・市教委・当研究会により継続的に発掘調査が実施され、弥生時代前期以降の複合遺跡であることが確認されている。昭和57(1982)～59(1984)年には遺跡範囲の多くを占める八尾空港内の整備事業に伴う調査を当研究会が実施し、全域で古代及び近世の条里遺構を確認している。

今回の調査地は遺跡範囲の中央付近にあたる。周辺では今回の調査地北東部で第15次調査（ＳＫ2006－15）・第22次調査（ＳＫ2010－22）を実施している他、西部では第19次調査（ＳＫ2010－19）、また南の八尾空港内では第１次調査（ＳＫ82－１）がある。これらの調査では平安時代以降の耕作土が検出されており、当地一帯に生産域が広がっていたことが確認されている。



第１図　調査地位置図

２．調査概要

１）調査の方法と経過

今回の調査は八尾市南木の本５・６丁目地内で実施した下水道工事(23-113工区)に伴う調査で、当調査研究会が木の本遺跡内で行った第24次調査(ＳＫ2012－24)である。

調査地は人孔部分２箇所(約2.0×2.0m：北から１・２区)で、八尾空港北濠西側の道路上に位置する。総面積は約８㎡を測る。

調査は現地表(T.P.+10.6～10.7m)下2.2～2.5mについて、機械・人力掘削併用で実施した。

調査では調査区付近に位置する工事使用のベンチマークを標高の基準とした。

２）基本層序

１区

０層は盛土。１層は旧耕作土である。２・３層は撹拌された土壌化層で作土である。４層の砂層は河川堆積土である。

２区

０層は盛土。１層は整地層と考えられる。２～９層は作土で、層相はブロック状を呈する層と撹拌の著しい層が見られる。７層は耕作関連の遺構の可能性がある。10層の砂層は水成層で、洪水砂であろう。11層は撹拌された作土である。上面では10層により充填された足跡群を検出した。12層は水成層である。

３．まとめ

調査では作土層の堆積が続く状況が見られ、当地が連綿と生産域であったことを確認した。

２区の11層水田面(T.P.+8.75m)では足跡群が検出され、出土遺物等がなく明確ではないが、南部(SK82-1)の調査成果からみて時期は古代(平安時代中期)と考えられる。

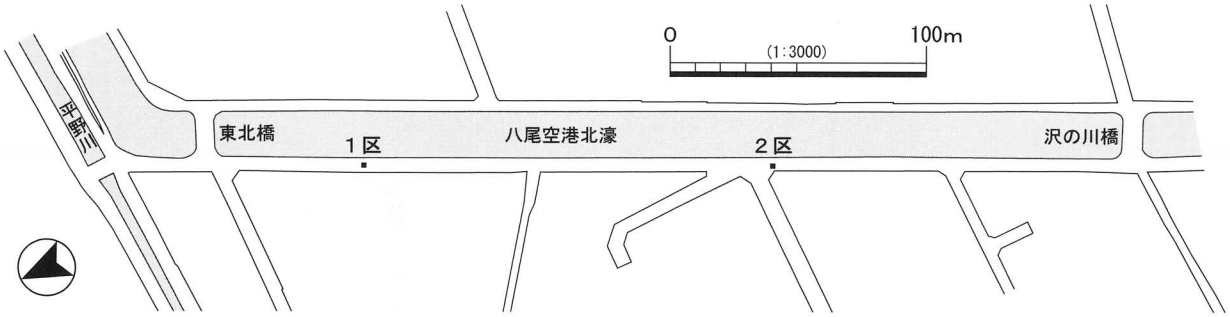
参考文献

・原田昌則1983『木の本遺跡－八尾空港整備事業に伴う発掘調査－　財団法人八尾市文化財調査研究会報告４』財団法人八尾市文化財調査研究会

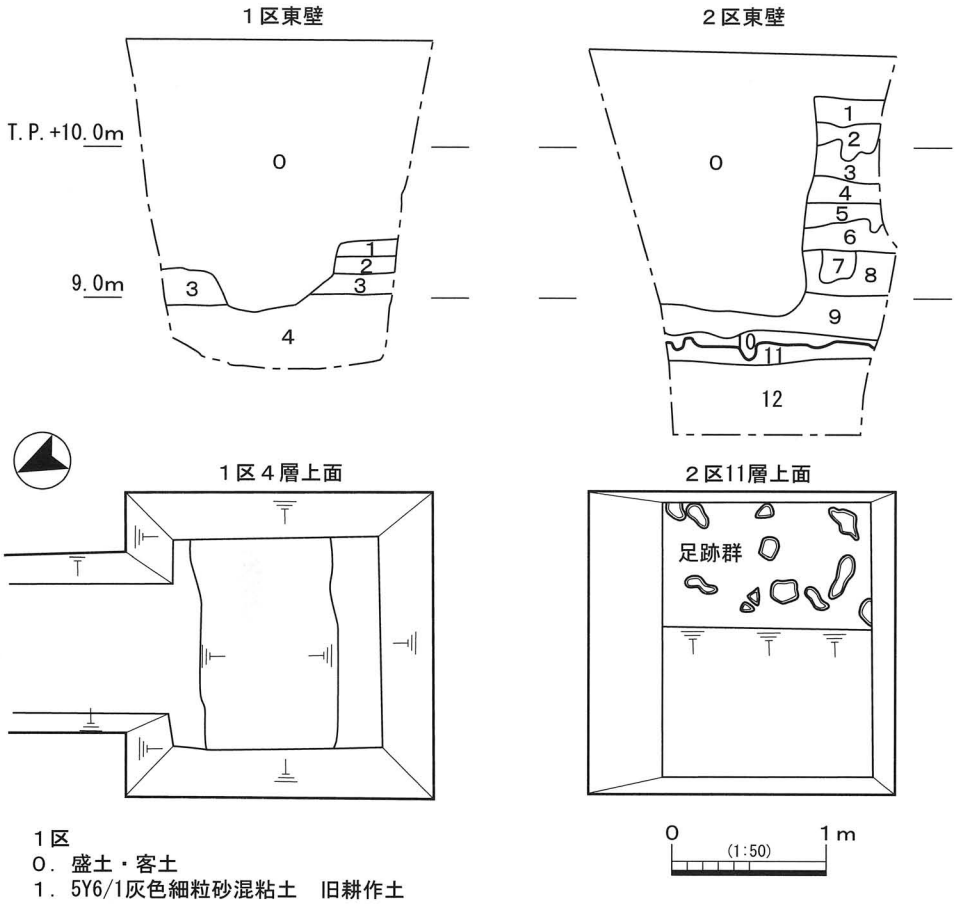
・荒川和哉2008「Ⅲ　木の本遺跡(第15次調査)」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告112』財団法人八尾市文化財調査研究会

・坪田真一2012「Ⅶ　木の本遺跡(第19次調査)」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告136』財団法人八尾市文化財調査研究会

・坪田真一2012「Ⅸ　木の本遺跡(第22次調査)」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告136』財団法人八尾市文化財調査研究会



第２図　調査区位置図



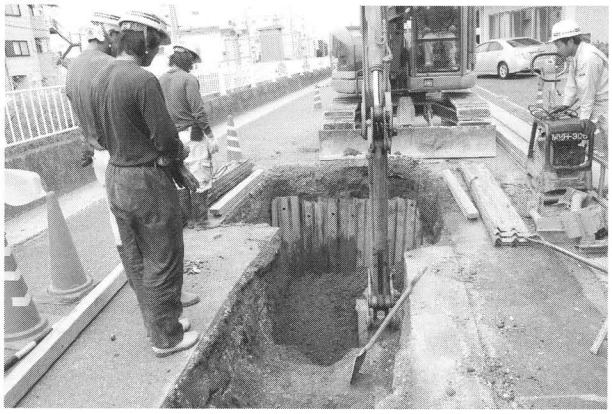
１区
０．盛土・客土
１．5Y6/1灰色細粒砂混粘土　旧耕作土
２．5Y5/1灰色粘土　撹拌され上面土壌化　作土
３．5B5/1青灰色粘土　撹拌され上面土壌化　作土
４．2.5Y6/8明黄褐色細粒砂～粗粒砂　河川堆積土

２区
０．盛土・撹乱
１．10YR6/3にぶい黄橙色細粒砂～極粗粒砂混シルト質粘土　Fe斑　整地層？
２．10YR6/2灰黄褐色細粒砂～極粗粒砂混シルト質粘土　Fe斑　ブロック状作土
３．2.5Y6/2灰黄色シルト質粘土　Fe斑　撹拌作土
４．10YR7/3にぶい黄橙色極細粒砂～細粒砂混シルト質粘土　Fe斑　撹拌作土
５．10YR6/3にぶい黄橙色極細粒砂～中粒砂多混シルト質粘土　Fe斑　Mn斑　ブロック状作土
６．10YR7/2にぶい黄橙色極細粒砂～細粒砂混シルト質粘土　Fe斑　Mn斑　ブロック状作土
７．10YR6/2灰黄褐色極細粒砂～細粒砂混シルト質粘土　ブロック状
８．10YR7/3にぶい黄橙色シルト混粘土　Fe斑多　撹拌作土
９．2.5Y6/2灰黄色シルト質粘土　撹拌作土
10．10YR7/2にぶい黄橙色シルト質粘土混極細粒砂～細粒砂　Fe斑　水成層
11．5GY4/1暗オリーブ灰色シルト質粘土　Fe斑　撹拌作土
12．2.5Y6/2灰黄色シルト質粘土～中粒砂互層　水成層

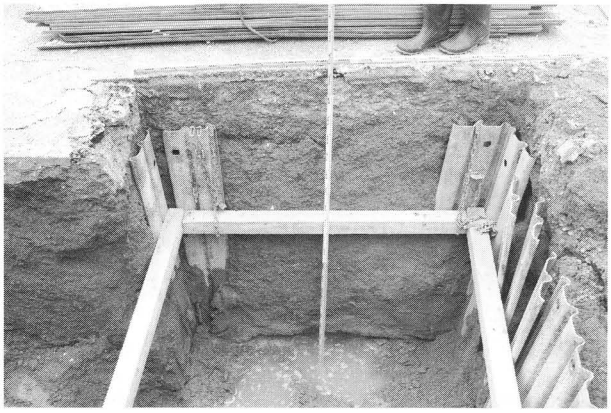
第３図　平断面図

図版1

調査地全景（北から）



１区機械掘削（北から）



１区東壁

２区11層上面足跡検出状況（西から）

２区11層上面足跡検出状況南部（西から）

２区11層上面足跡完掘状況（西から）

２区東壁

２区東壁下部

Ⅸ　久宝寺遺跡第81次調査（ＫＨ2011－81）

例　　言

1．本書は、大阪府八尾市南久宝寺１丁目地内で実施した下水道工事(23-25工区)に伴う発掘調査報告書である。

1．本書で報告する久宝寺遺跡第81次調査(ＫＨ2011－81)の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の埋蔵文化財調査指示書に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。

1．現地調査は、平成24年２月６日～２月10日(外業実働４日)に、坪田真一を調査担当者として実施した。調査面積は約25㎡である。

1．現地調査においては、飯塚直世・梶本潤二・芝﨑和美・西出一樹・永井律子・村田知子の参加を得た。

1．内業整理業務は下記が行い、現地調査終了後随時実施し、平成25年３月31日に完了した。
　遺物実測・トレースー市森千恵子、その他ー坪田。

1．本書の執筆・編集は坪田が行った。

本　文　目　次

1．はじめに……49
2．調査概要……50
　1）調査の方法と経過……50
　2）基本層序……50
　3）検出遺構と出土遺物……50
3．まとめ……53

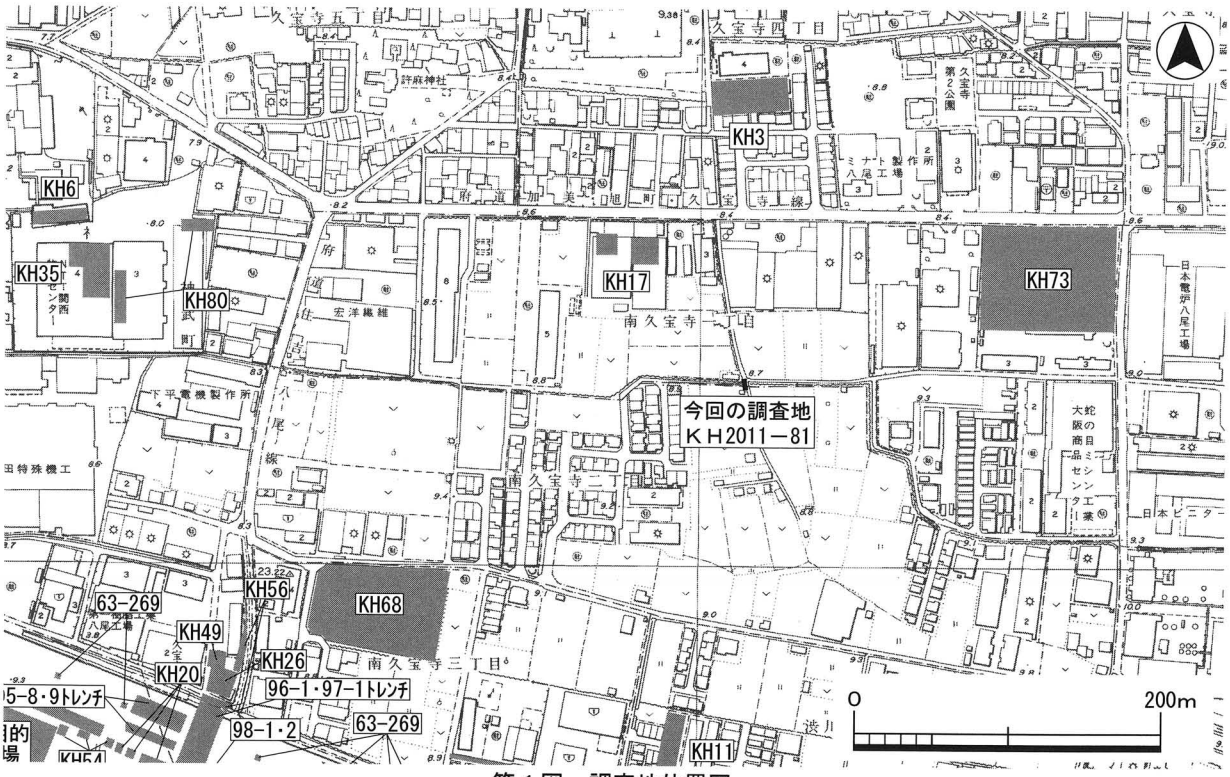
Ⅸ　久宝寺遺跡第81次調査（ＫＨ2011－81）

１．はじめに

久宝寺遺跡は八尾市の西端に位置し、現在の行政区画によると、八尾市内では北久宝寺１～３、久宝寺１～６、西久宝寺、南久宝寺１～３、神武町、北亀井町１～３、龍華町１・２、渋川町１～７がその範囲となっており、さらに西の大阪市域・北の東大阪市域に広がっている。地理的には旧大和川の主流である長瀬川の左岸にあたり、同地形上で南側に跡部遺跡・亀井遺跡・太子堂遺跡が存在する。

当遺跡発見の契機は、昭和10年に八尾市久宝寺５丁目で行われた道路工事の際に、弥生土器・土師器・丸木船の残片が出土したことによる。昭和48年度には、大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センターによる近畿自動車道天理～吹田線関連の総延長13.5㎞に及ぶ発掘調査が開始され、以降、大阪府文化財センター・東大阪市文化財協会・八尾市教育委員会・当調査研究会において多次にわたる発掘調査が実施されている。これらの調査成果から、当遺跡は縄文時代晩期～近世にわたる遺跡であることが確認されている。

今回の調査地は遺跡範囲中心部のやや南東にあたり、北側には中世末以降に久宝寺御坊顕証寺を中核として発展する久宝寺寺内町が位置している。調査地周辺では当調査研究会が第３・17・73次調査(KH3・17・73)を実施しており、KH17では弥生時代後期末～古墳時代前期、平安時代後期、KH3では古墳時代前期、KH73では奈良時代～中世を中心とした遺構が検出されている。なかでもKH17出土の古墳時代前期の多量の木製品(紡織具・農具等)や、KH3の古墳時代前期の方形周溝墓は特筆される。



第１図　調査地位置図

２．調査概要

１）調査の方法と経過

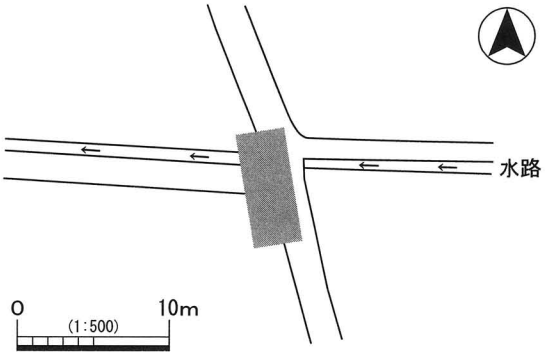
今回の調査は八尾市南久宝寺１丁目地内で実施した公共下水工事(23-25工区)に伴う調査で、当調査研究会が久宝寺遺跡内で行った第81次調査(ＫＨ2011－81)である。

調査地は発進立坑部分(東西約3.2×南北約7.6m)で、面積は約25㎡を測る。

調査は工事掘削深度である現地表(約T.P.+8.6m)下約4.4mまでについて、機械・人力掘削併用で実施した。

調査においては、工事設計図記載のベンチマーク(KBM.2：T.P.+8.525m)を標高の基準とした。

遺構名は遺構略号＋面＋２桁遺構番号で表した。



第２図　調査区位置図

２）基本層序

調査は現地表面より約1.0m下(T.P.+7.5m)から実施した。A層は調査区を横断する現況水路の埋土である。１層の細粒砂～粗粒砂互層は洪水砂あるいは河川堆積で、上面が第１面である。２層は作土と考えられ、下面が第２面である。３層は暗色を呈する土壌化層で、古墳時代初頭～前期の遺物包含層である。４～７層の粘土～極粗粒砂は河川堆積で、４層上面が第３面である。８層は湿地性堆積である。

３）検出遺構と出土遺物

〈第１面〉

１層上面の約T.P.+7.5mで井戸１基(ＳＥ101)、用水施設１基(ＳＸ101)を検出した。

ＳＥ101

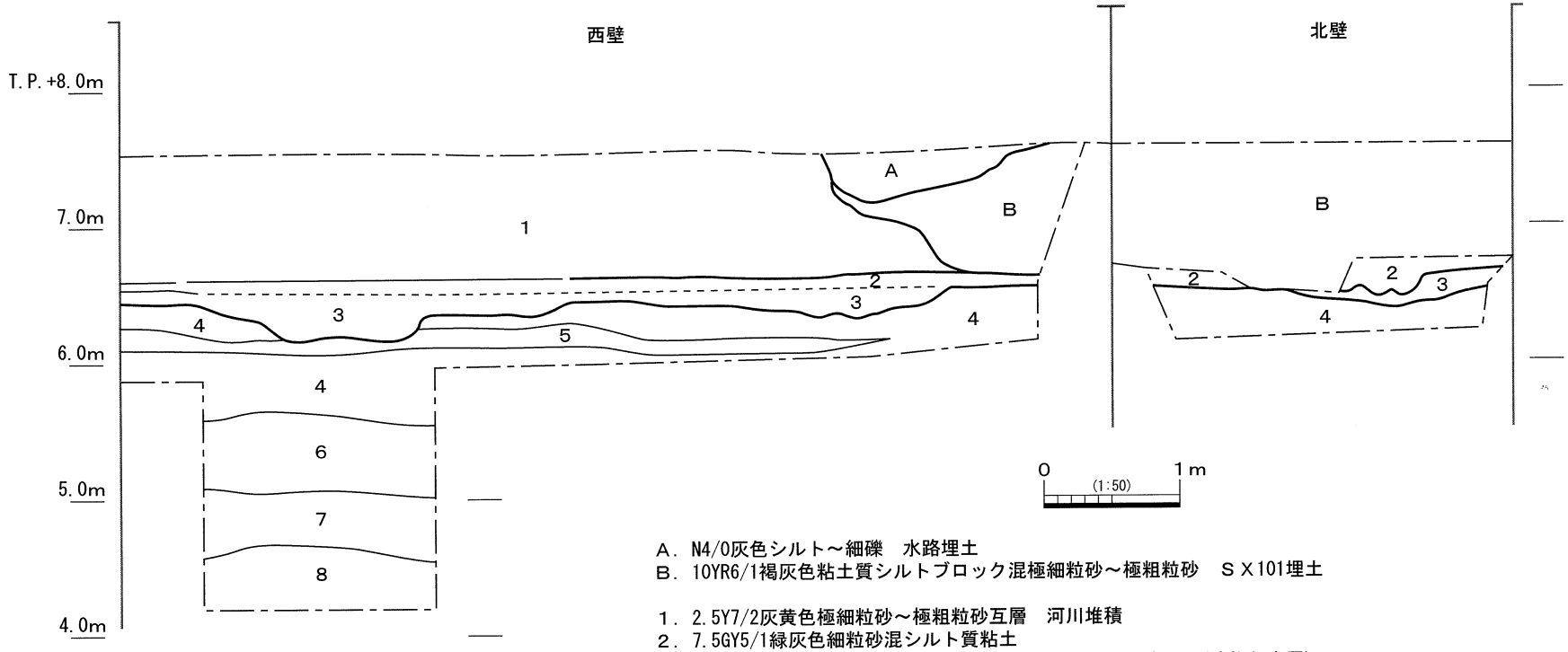
直径約80cm・高さ約55cmのコンクリート製の円形の井戸枠を積み重ねた井戸である。掘方は直径1.7m程度の不整円形を呈し、埋土は2.5Y5/1黄灰色シルト質粘土ブロック混極細粒砂～粗粒砂である。近年まで機能していた井戸で、現地表面から存在しており、内部には塩ビ製パイプが入れられていた。

ＳＸ101

北部で検出した樽と竹筒からなる用水施設で、樽上面は約T.P.+7.4m、竹筒上面は約T.P.+7.2mを測る。円孔を穿った樽を会所とし、東西方向と南北方向の竹筒を円孔に挿入して繋いでいる。竹筒の位置は現況の南北道路、東西水路とほぼ一致している。掘方は幅2.5m以上、深さ1.0m以上を測り、設営後の埋め戻し土はＢ層で、粘土質シルトブロックを含む細粒砂～極粗粒砂である。Ｂ層からは18世紀代を中心とした陶磁器類が出土している。

樽は口径約45cm・底径約41cm・高さ約61cmを測り、円孔は中位よりやや上に位置する。樽内には最下部に2.5Y6/1黄灰色極細粒砂～細粒砂、その上に7.5YR5/2灰褐色シルト質粘土が堆積し、上部には泥が溜まっていた。なおこの泥内には蓋板が落ち込んでいた。

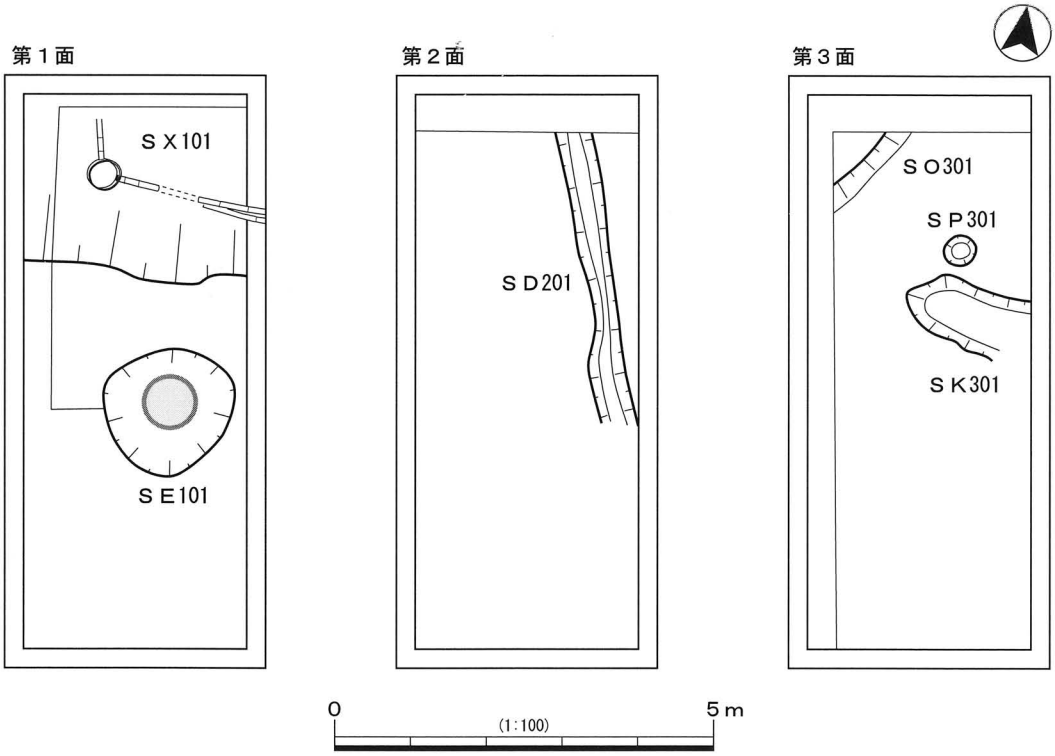
竹筒は太さ６～７cmを測り、東西方向で約1.8m、南北方向で約0.9mを検出した。東西方向の



A．N4/0灰色シルト～細礫　水路埋土
B．10YR6/1褐灰色粘土質シルトブロック混極細粒砂～極粗粒砂　ＳＸ101埋土

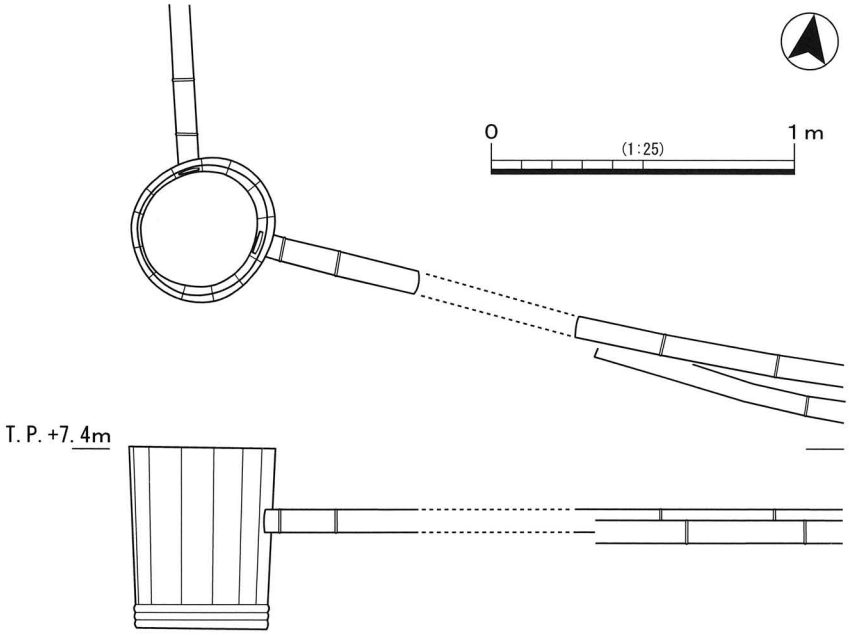
1．2.5Y7/2灰黄色極細粒砂～極粗粒砂互層　河川堆積
2．7.5GY5/1緑灰色細粒砂混シルト質粘土
3．2.5Y2/1黒色シルトブロック混極細粒砂～細粒砂　土壌化層(遺物包含層)
4．5Y5/1灰色極細粒砂～極粗粒砂互層　河川堆積
5．5GY5/1オリーブ灰色シルト～細粒砂　河川堆積
6．2.5GY5/1オリーブ灰色粘土～シルト質粘土互層　ラミナ状植物遺体　河川堆積
7．5GY5/1オリーブ灰色シルト質粘土～細粒砂互層　河川堆積
8．2.5Y3/2黒褐色粘土～シルト互層　細かい植物遺体　湿地性堆積

第３図　断面図



第４図　平面図

竹筒は東部で２本が重なる状況が見られ、この部分では竹筒の取替えが施されたものと捉えられる。流水方向については、東からの水を方向を変えて北に送るものと考えられるが、検出部分では竹筒がほぼ水平に設置されており明確でない。



第５図　ＳＸ101平面・側面模式図

〈第２面〉

２層下面の約T.P.+6.6mで溝１条（ＳＤ201）を検出した。

ＳＤ201

北北西－南南東方向に直線的に延びる溝で、検出長約4.0m・幅約45cm・深さ約15cmを測る。断面逆台形に近く、埋土は２層と同じである。作土である２層に伴う耕作関連溝である可能性が高い。遺物は出土していないが時期は近世頃と考えられる。

〈第３面〉

４層上面の約T.P.+6.5mで落ち込み１基（ＳＯ301）、土坑１基（ＳＫ301）、ピット１個（ＳＰ301）を検出した。ＳＫ301・ＳＰ301はＳＯ301底面の検出である。

ＳＯ301

４層は北西角がやや高く、北東－南西方向の肩を成して南東側に緩やかに下がっており、これを落ち込みとした。深さは最大で20cm程度を測り、３層が落ち込んでいる。

ＳＫ301

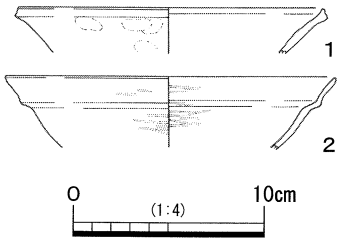
平面形は東西に長い溝状を呈し、東は調査区外に至る。検出部分の規模は東西約1.6m・南北約0.8m・深さ約13cmを測る。埋土は３層に類似しており炭を含んでいる。古墳時代前期（布留式期古相）の土器片が出土している。

ＳＰ301

平面形は直径約40cmの円形を呈し、深さ約６cmを測る。断面皿状で、埋土はＳＫ301と同じである。遺物は出土していない。

〈３層出土遺物〉

１・２を図化した。１は庄内式甕口縁部である。２はヘラミガキを多用する精製の有段口縁鉢である。１は古墳時代初頭、２は古墳時代前期初頭（布留式期古相）に比定される。



第６図　３層出土遺物

３．まとめ

第１面では用水施設ＳＸ101を検出した。構造から見て現在の上水道にあたる近代の用水施設である。八尾市域では東郷・八尾寺内町・久宝寺寺内町・中田遺跡等の発掘調査において同様の施設が検出されている。このような用水施設は宝永元年(1702年)の大和川付け替え以降普及していったようである。調査地北方の久宝寺寺内町東口には、現在は使用されていないが「寺井戸」と呼ばれる井戸が現存している。大和川付け替えによって、それまで主流であった東方の長瀬川流域には顕証寺新田が開発されるが、寺内町の中心であった久宝寺御坊が、顕証寺新田の旧大和川床に元井戸を構え、竹樋によってこの「寺井戸」に引水して村民の飲料水として利用されていたものである。ＳＸ101の検出により、久宝寺村においては「寺井戸」からの用水以外にも同様の用水が普及していたものと推測され、近代水道史を知る上で重要な資料といえよう。

第３面では古墳時代前期の遺構を検出し、北西部の第17次調査で確認している該期の集落域の南への広がりを確認した。

参考文献

・西村公助1989「6　久宝寺遺跡(第３次調査)」『八尾市文化財調査研究会年報　昭和63年度　財団法人八尾市文化財調査研究会報告25』財団法人八尾市文化財調査研究会
・岡田清一1997「Ⅱ　久宝寺遺跡第17次調査(ＫＨ93－17)」『久宝寺遺跡　財団法人八尾市文化財調査研究会報告55』財団法人八尾市文化財調査研究会
・原田昌則1999「Ⅰ　東郷遺跡第34次調査(ＴＧ90－34)」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告64』財団法人八尾市文化財調査研究会
・渕　斎2002「Ⅳ　中田遺跡第48次調査(ＮＴ2001－48)」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告73』財団法人八尾市文化財調査研究会
・岡田清一2004『久宝寺寺内町遺跡　第１次調査　－「八尾市まちなみセンター」建設工事に伴う発掘調査報告書－　財団法人八尾市文化財調査研究会報告80』財団法人八尾市文化財調査研究会
・荒川和哉2007「Ⅳ　八尾寺内町遺跡第４次調査(ＹＣ2005－４)」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告97』財団法人八尾市文化財調査研究会
・荒川和哉・他2009「Ⅰ　久宝寺遺跡第73次調査(ＫＨ2007－73)」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告127』財団法人八尾市文化財調査研究会
・八尾市水道局1989『八尾水道のあゆみ』

図版1

調査地周辺（東から）

機械掘削（北から）

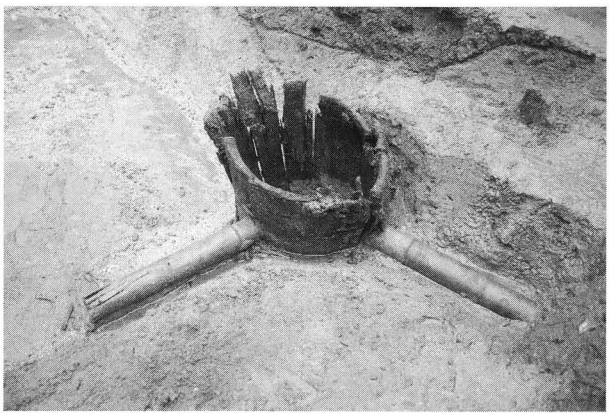
第１面検出（南から）

第１面（北から）

第１面ＳＥ101（北から）

第１面ＳＸ101（南西から）

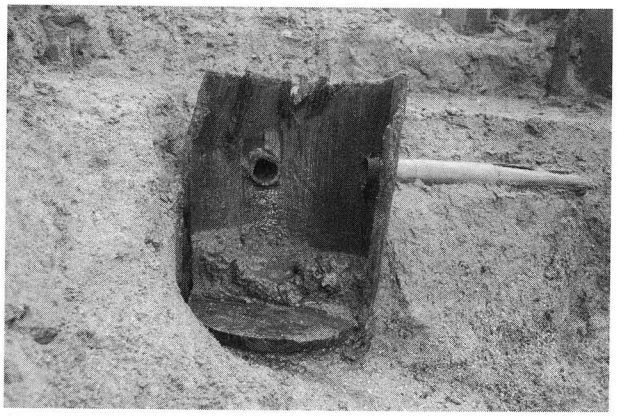
第１面ＳＸ101（東から）



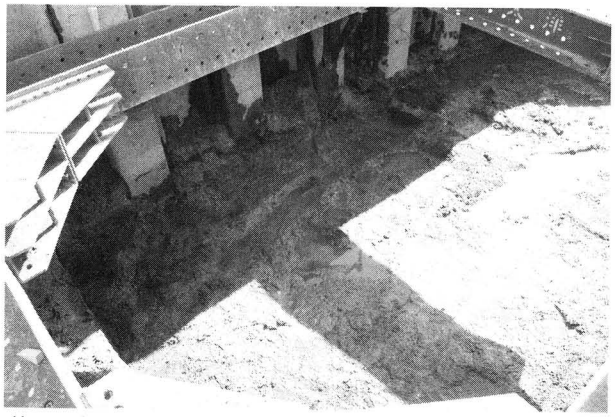
第１面ＳＸ101（北東から）

図版2

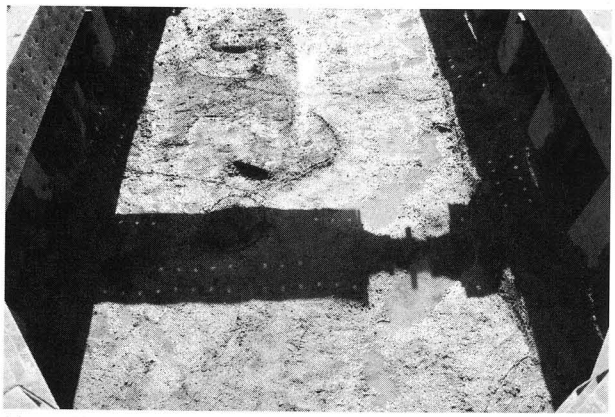
第１面ＳＸ101（南から）



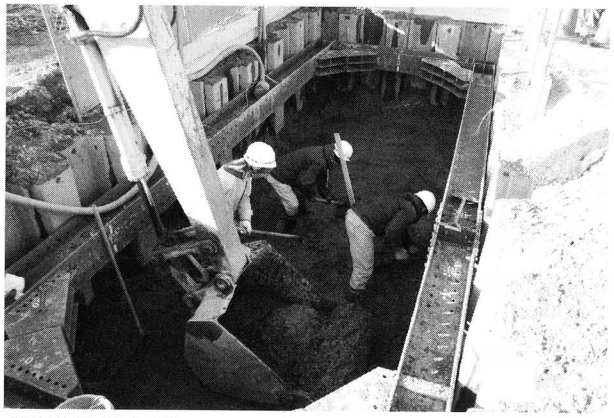
第１面ＳＸ101樽内部（南から）



第２面（北西から）

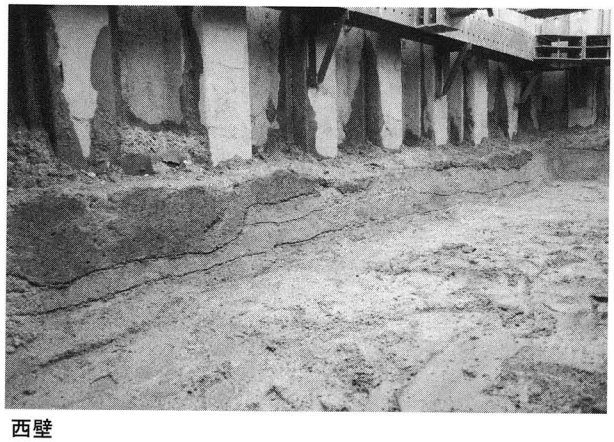


第３面検出（北から）

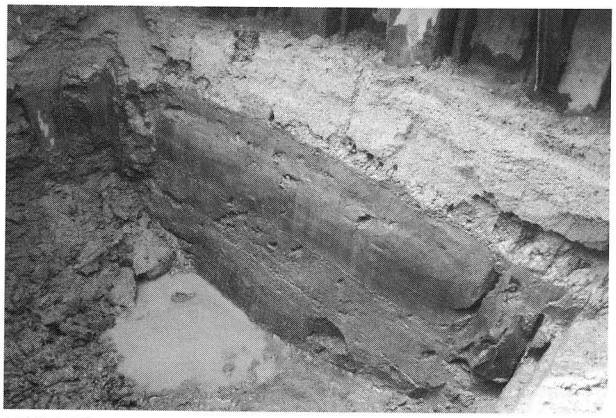


調査状況（南から）

北壁



西壁



西壁下層

Ｘ　久宝寺遺跡第83次調査（ＫＨ2012－83）

例　　言

1．本書は、大阪府八尾市南久宝寺３丁目地内で実施した下水道工事（24-110工区）に伴う発掘調査報告書である。

1．本書で報告する久宝寺遺跡第83次調査（ＫＨ2012－83）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の埋蔵文化財発掘調査指示書に基づき、公益財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。

1．現地調査は、平成24年10月31日～11月20日（外業実働５日）に実施した。調査面積は約35㎡である。調査担当者は高萩千秋である。

1．現地調査においては、飯塚直世・伊藤静江・國津玲子・芝﨑和美・永井律子の参加を得た。

1．内業整理業務は下記が行い、現地調査終了後随時実施し、平成25年３月31日に完了した。
　遺物実測－飯塚、遺物トレース－市森千恵子。

1．本書の執筆は高萩・坪田真一が、編集は高萩が行った。

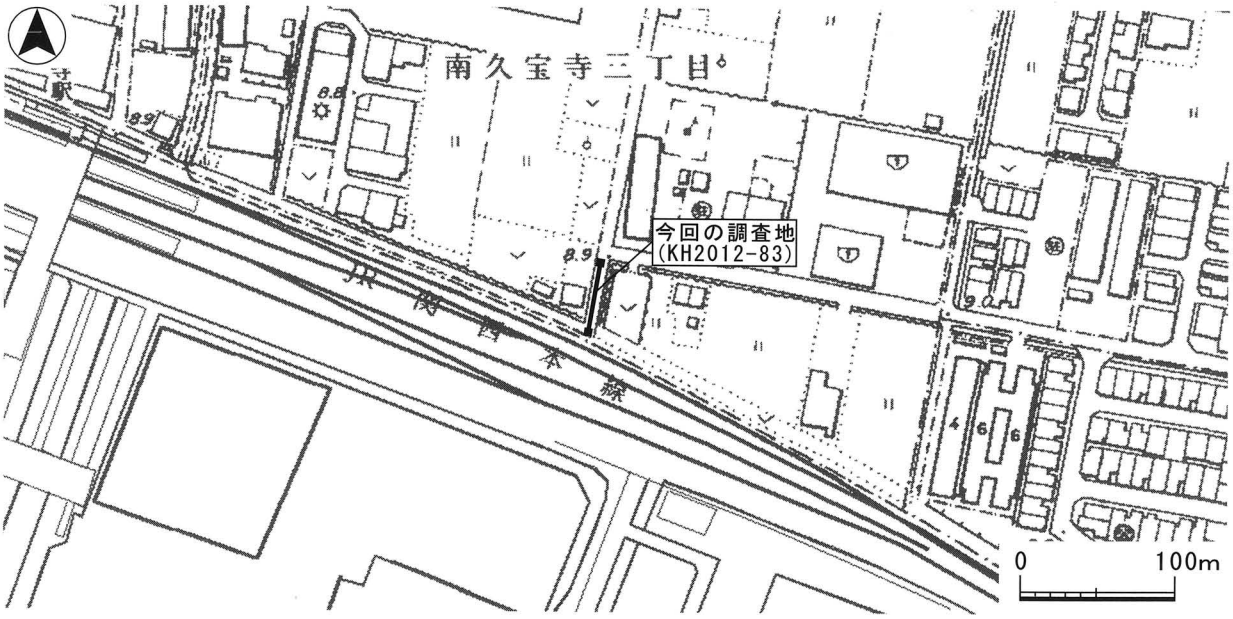
本　文　目　次

1．はじめに……57
2．調査概要……57
　1）調査の方法と経過……57
　2）基本層序……57
　3）検出遺構と出土遺物……59
3．まとめ……59

X　久宝寺遺跡第83次調査（KH2012－83）

1．はじめに

久宝寺遺跡の概要については、前頁Ⅸの久宝寺遺跡第81次調査で報告しており、ここでは省略する。今回の調査地は遺跡範囲の南部にあたり、周辺では、当研究会竜華操車跡地開発に伴う発掘認調査が実施されている。



第１図　調査地周辺図

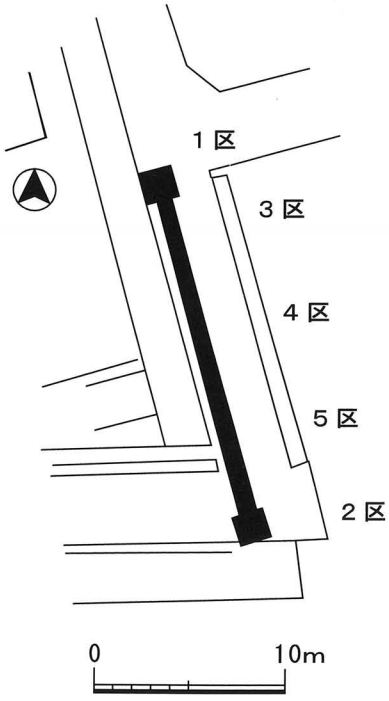
2．調査概要

1）調査の方法と経過

調査は、下水道工事（24－110工区）に伴う久宝寺遺跡第83次調査である。市教委の指示書により工事掘削深度までを対象にした人孔２箇所と、その間の開削部分である。調査区名を北側の人孔１区、南側を２区と称し、その間の開削は３回に分けた調査で、北から３～５区と称した。調査区の規模は１・２区が２m×２m、３～５区が幅1.2m×長さ22mで、総面積35㎡を測る。

調査で使用した標高数値は、下水工事の仮ベンチ（ZTJ　：T.P.＋9.062m）を使用した。

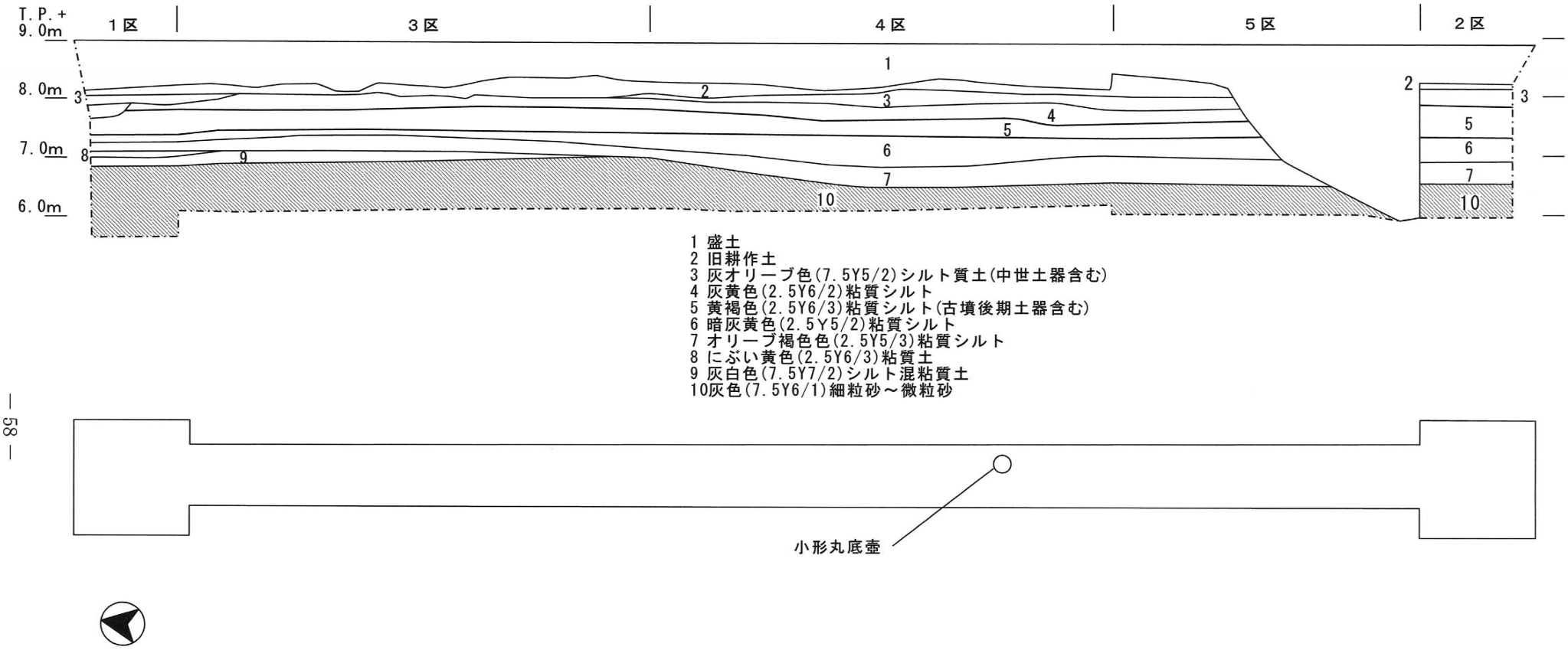
掘削については、工事掘削部分について、指示書に従って機械掘削及び人力による掘削を行った。



第２図　調査区配置図

2）基本層序

調査では、現地表下約3.0m（T.P.＋6.0～9.0m）間で、11層の基本層序を確認した。０層は盛土及び撹乱である。５区では現地表下2.5mまでの削平を受けている部分があった。１層は旧耕作土である。２～４層は中近世の作土層と考えられる。５層は炭化物が


T.P.+
9.0m
8.0m
7.0m
6.0m
1区
3区
4区
5区
2区
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
1 盛土
2 旧耕作土
3 灰オリーブ色(7.5Y5/2)シルト質土(中世土器含む)
4 灰黄色(2.5Y6/2)粘質シルト
5 黄褐色(2.5Y6/3)粘質シルト(古墳後期土器含む)
6 暗灰黄色(2.5Y5/2)粘質シルト
7 オリーブ褐色色(2.5Y5/3)粘質シルト
8 にぶい黄色(2.5Y6/3)粘質土
9 灰白色(7.5Y7/2)シルト混粘質土
10灰色(7.5Y6/1)細粒砂～微粒砂
小形丸底壺

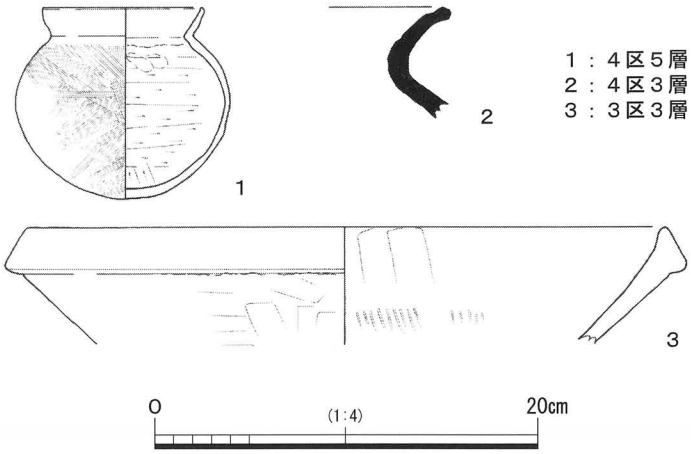
第３図　平断面図

見られる。６層は古墳時代中期～後期の遺物を含む。８層は古墳時代前期の遺物を含む。10層は粗粒砂混細粒砂で、河川又は洪水層である。

３）検出遺構と出土遺物

遺構は検出されなかった。

出土遺物は、弥生土器・古墳時代初頭～前期の古式土師器をコンテナ箱にして１箱を出土している。１は土師器小形丸底壺である。体部調整は外面がハケ、内面ヘラケズリである。砂粒を多く含む胎土で、焼成は良好である。法量は口径8.6cm・器高10.2cm・体部最大径11.3cmを測り、上半部の1/2程度を欠損する。古墳時代前期～中期に比定されよう。２は須恵器甕の口縁部小片である。口縁端部には面を有する。外面に自然釉が掛かる。古墳時代後期頃に比定される。３は瓦器摺鉢である。外面調整はヘラケズリである。摺目は５本/cmで、幅は不明である。15世紀代に比定される。



第４図　出土遺物実測図

３．まとめ

今回の調査では、遺構は確認できなかったが、古墳時代前期の遺物を含む層、後期の遺物を含む層を検出した。また中世～近世に至る作土層が確認され、中世以降は生産域であった。

周辺調査では、当地から北へ150mのところで行った当研究会実施の第68次調査では５世紀中頃の集落遺構や土器類が多数出土しており、集落域と推測される。５世紀後半～６世紀前半は遺構の検出はなかったが、円筒・形象・人物等の埴輪片や滑石製臼玉・有孔円板が出土しており、墓域があったと考えられる。６世紀中頃～後半の時期では、２間×７間の規模をもつ建物で、あまり類を見ない大型建物を検出しており、物部氏に関連する建物ではないかと推測されている。東に隣接する第82次調査では、古墳時代後期の住居関係の遺構が多数検出している。

また、調査区南側のJR大和路線の南では竜華操車場再開発に伴う調査から弥生時代中期～中近世に至る遺構・遺物が多数検出されている。

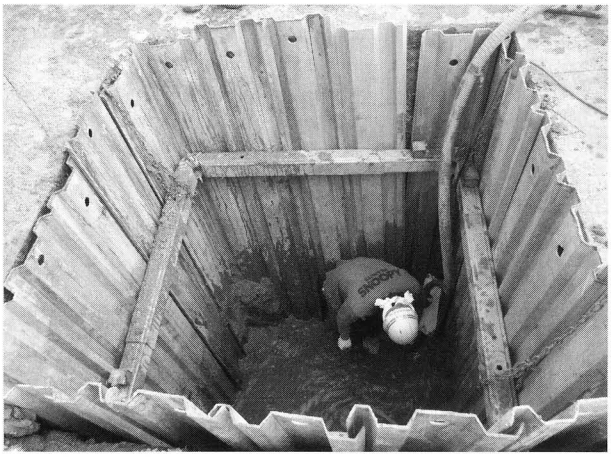
参考文献

・近江俊秀1989.3「4.久宝寺遺跡（63-269）の調査」『八尾市内遺跡昭和63年度発掘調査報告書Ⅱ』八尾市文化財調査報告20　昭和63年度公共事業　八尾市教育委員会
・米田敏幸1990.3「18.久宝寺遺跡（85-191）の調査」『八尾市内遺跡平成元年度発掘調査報告書Ⅰ』八尾市文化財調査報告20　平成元年度国庫補助事業　八尾市教育委員会
・原田昌則他2006「Ⅰ　久宝寺遺跡第23次調査（KH97-23）」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告89』財団法人八尾市文化財調査研究会
・成海佳子・樋口薫・金親満夫2001.6「4.久宝寺遺跡第33次調査(KH2000-33)」『平成12年度　(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』財団法人八尾市文化財調査研究会
・菊井佳弥2007「8.久宝寺遺跡第68次調査（KH2006-68）」『平成18年度（財）八尾市文化財調査研究会事業報告』財団法人八尾市文化財調査研究会
・坪田・島田・荒川2007「10.久宝寺遺跡第70次調査（KH2006-70）」『平成18年度（財）八尾市文化財調査研究会事業報告』　財団法人八尾市文化財調査研究会

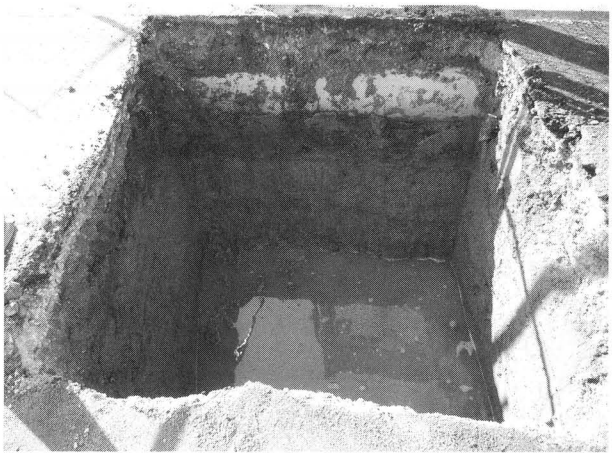
図版1

1区(東から)

1区下層(東から)

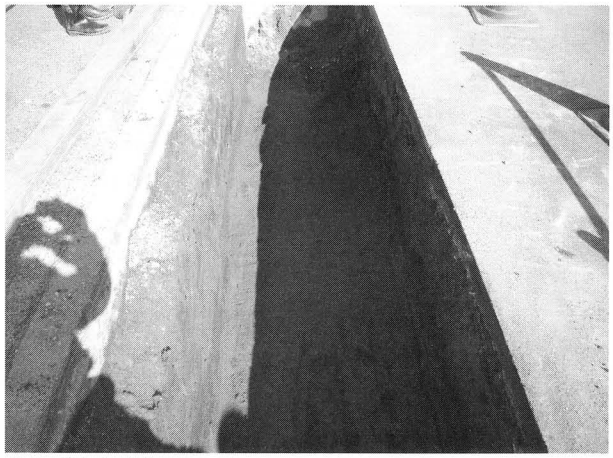


1区(西から)



2区(北から)

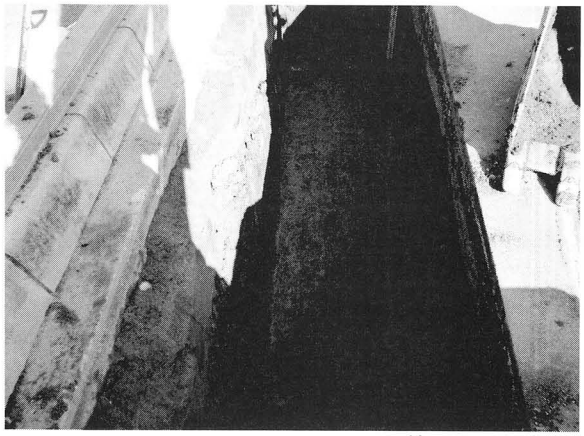
2区下層(北から)



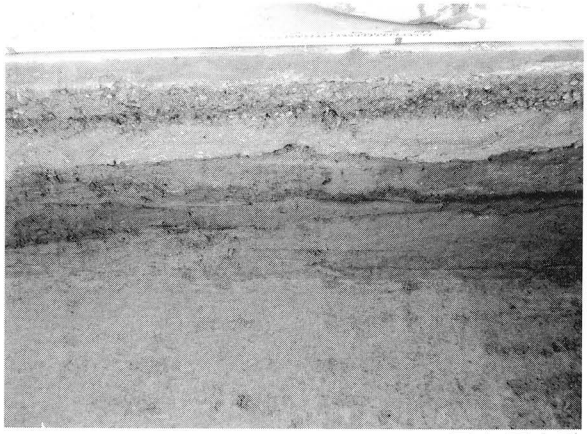
3区(北から)

3区下層(南から)

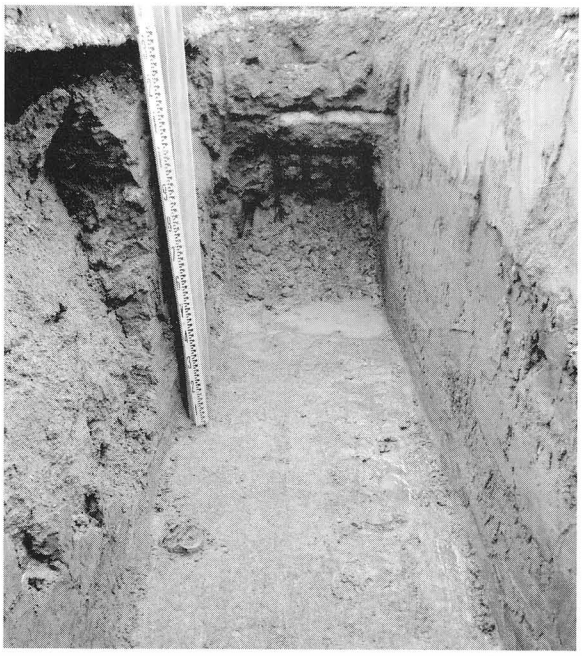
3区南部(北から)



4区第1面(東から)



4区上層東壁



4区下面(北から)

4区土器検出状況(西から)

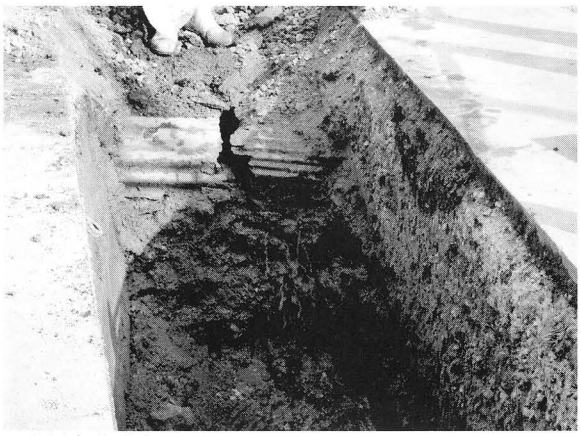
4区土器除いた後(南から)

4区下層(南から)

4区東壁

図版3

4区下層(東から)

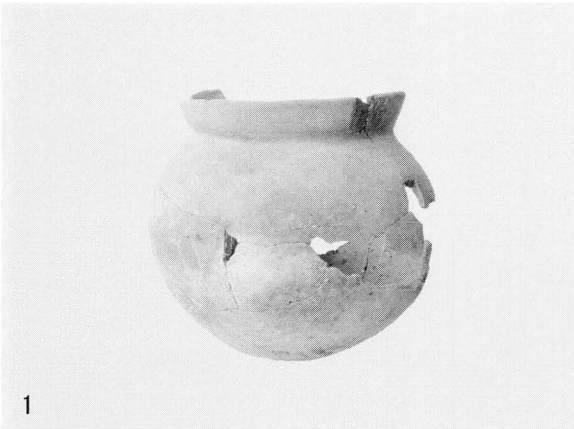


5区(南から)

4区下層(北から)

5区機械掘削(南から)

5区(南から)



1

3

XI　郡川遺跡第12次調査（ＫＲ2011－12）

例　　言

１．本書は、大阪府八尾市教興寺２、３丁目地内で実施した下水道工事(23-17工区)に伴う発掘調査報告書である。

１．本書で報告する郡川遺跡第12次調査(ＫＲ2011－12)の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の埋蔵文化財調査指示書に基づき、公益財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。なお調査は平成23・24年度にまたがったため、平成23年度をその１、平成24年度をその２として実施した。

１．現地調査は、その１(１～４区)が平成23年11月30日～平成24年３月15日(外業実働４日)に、その２(５・６区)が平成24年４月６日～４月13日(外業実働２日)に、高萩千秋・坪田真一を調査担当者として実施した。調査面積は約24㎡である。

１．現地調査においては、飯塚直世・梶本潤二・芝﨑和美・田島宣子・永井律子・村田知子・山内千惠子の参加を得た。

１．内業整理業務は坪田が行い、現地調査終了後随時実施し、平成25年３月31日に完了した。

１．本書の執筆・編集は坪田が行った。

本　文　目　次

１.はじめに……63
２.調査概要……64
　１)調査の方法と経過……64
　２)基本層序と出土遺物……64
３.まとめ……64

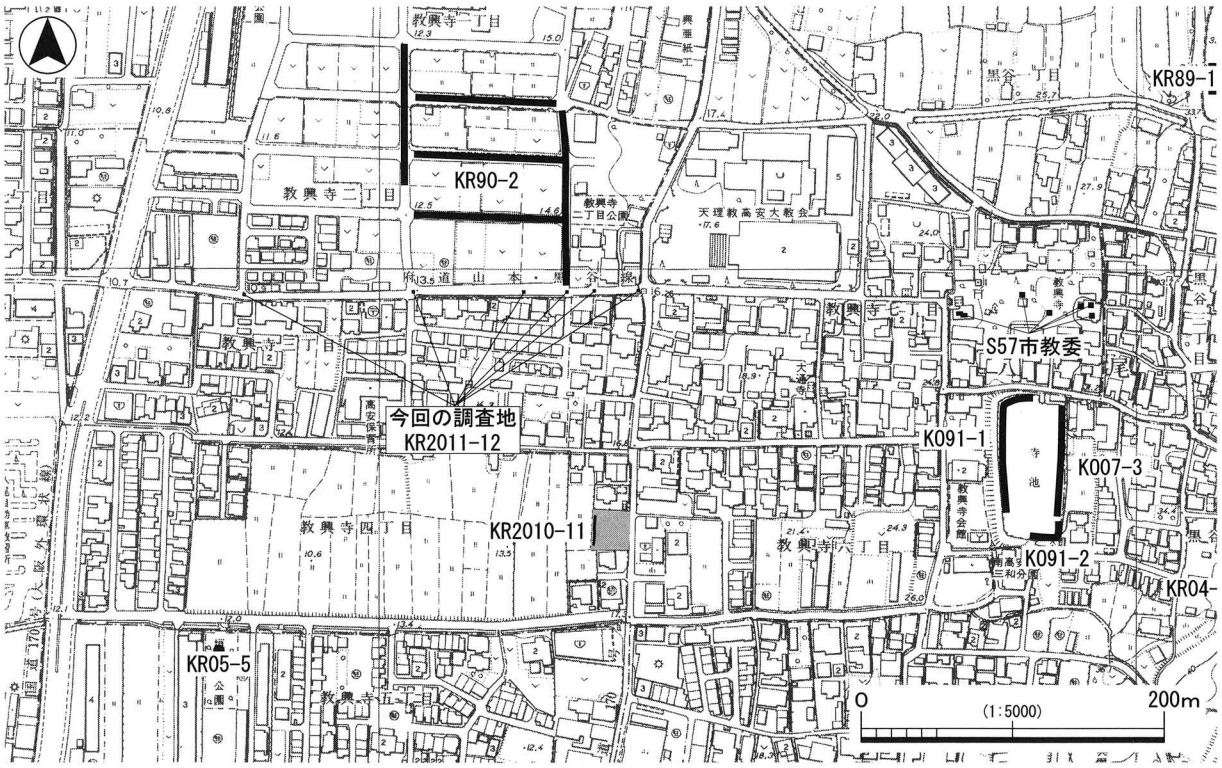
XI　郡川遺跡第12次調査（KR2011－12）

1．はじめに

郡川遺跡は大阪府八尾市の東部に位置し、現在の行政区画の郡川１～５丁目・教興寺１～７丁目・黒谷１～５丁目・垣内１～５丁目にあたる東西約1.1km・南北約1.2kmの範囲が遺跡範囲とされている。生駒山西麓から西に広がる河内平野に続く扇状地上に立地しており、地形的には西半部がT.P.+11～30mを測る緩斜面、東半部が30～70mを測る急斜面となっている。西側には旧大和川の主流であった玉串川・恩智川の氾濫原が広がっている。当遺跡は北側で水越遺跡、南側で恩智遺跡と接しており、東側の生駒山地西麓地域一帯には、古墳時代後期の群集墳を中心とする高安古墳群が広がっている他、東部には古代寺院である教興寺跡が存在する。

当遺跡では以前から、縄文時代後期とされる磨製石斧や、弥生・古墳時代の土器が採集されており、北の水越遺跡、南の恩智遺跡と同様の遺跡の存在が想定されていた。最初の発掘調査は、昭和63年に実施された八尾市教育委員会による遺構確認調査であり、古墳時代中期～後期の集落が確認された。その後、八尾市教育委員会・当調査研究会により多次にわたる発掘調査が行われており、当遺跡は南方の生駒山地西麓に位置する恩智遺跡と同様、縄文時代には扇状地末端部に集落が形成され、以降連綿と続く集落遺跡であると認識されている。

今回の調査地北側では、平成２(1990)年度に区画整理事業に伴う第２次調査を実施しており、弥生時代前期～中期、古墳時代、室町時代の遺構を検出している。今回の調査地である東西道路は、古代より河内と大和を結ぶ主要街道であった「信貴越道」にあたり、室町時代の井戸の存在から街道沿いに展開した集落の存在が想定されている。



第１図　調査地位置図

２．調査概要

１）調査の方法と経過

今回の調査は八尾市教興寺２、３丁目地内で実施した下水道工事(23-17工区)に伴う調査で、当調査研究会が郡川遺跡内で行った第12次調査(ＫＲ2011－12)である。

調査地は道路上に設置される人孔部分６箇所(約2.0×2.0m：西から１～６区)で、総面積は約24㎡を測る。

調査は現地表(T.P.+11.1～16.6m)下2.4～3.2mについて、機械・人力掘削併用で実施した。なお１区のみ夜間調査である。

調査では各調査区周辺に位置する工事使用のベンチマークを標高の基準とした。

２）基本層序と出土遺物

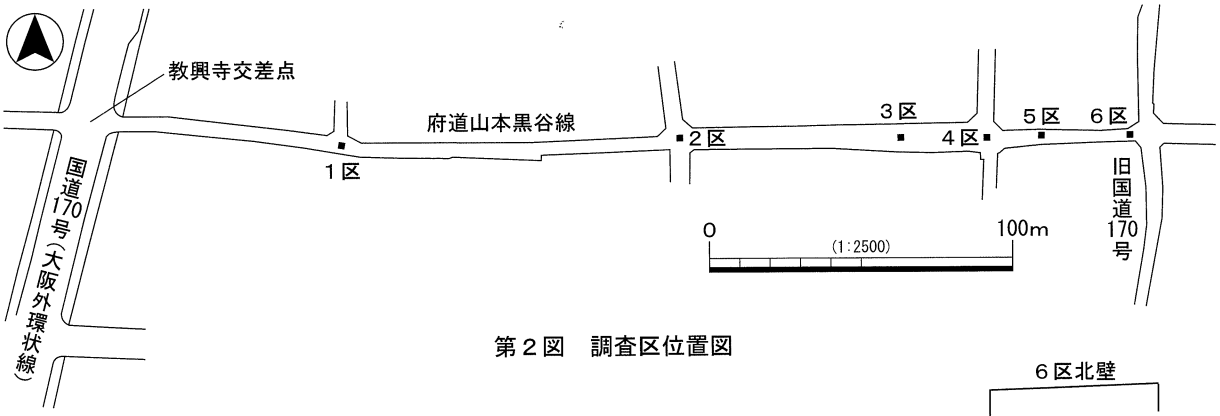
全調査区で洪水砂・土石流といった扇状地性堆積が確認され、遺構の存在は認められなかった。遺物は３区５層から中世頃に比定される瓦器甕の体部片１点、６区５層から時期不明の土師器片１点が出土したのみである。

３．まとめ

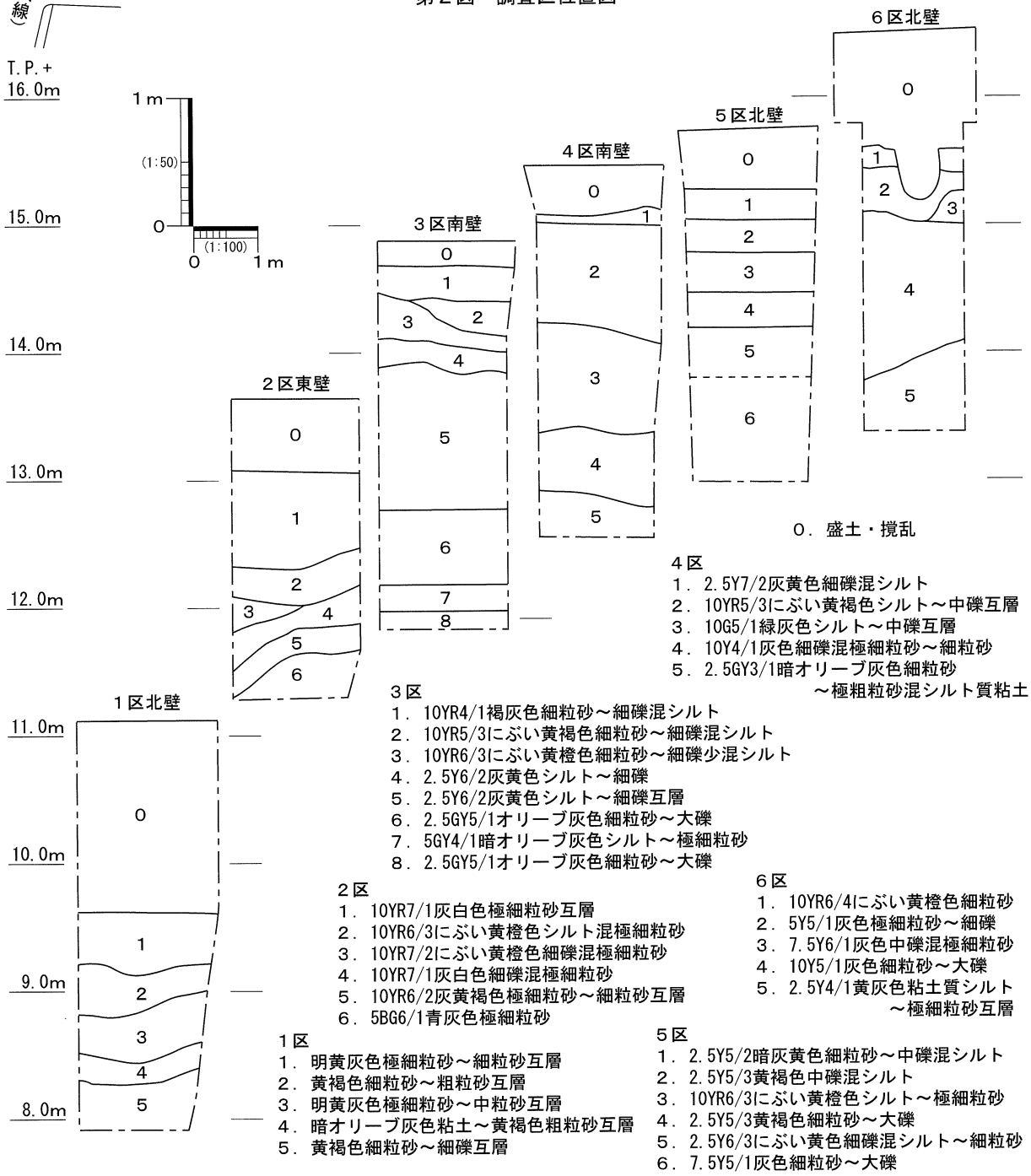
調査地は生駒山地西麓の扇状地に位置しており、全域で洪水砂・土石流といった扇状地性堆積が確認され、生活面は見られなかった。北側の第２次調査(ＫＲ90－２)の南部では、T.P.+13.0mで室町時代、12.6mで古墳時代前期の遺構を検出しているが、今回の調査地は東西方向の谷筋に当たっているものと考えられる。

参考文献

・原田昌則1999「Ⅲ　郡川遺跡第２次調査(ＫＲ90－２)」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告64』財団法人八尾市文化財調査研究会



第２図　調査区位置図



第３図　平断面図

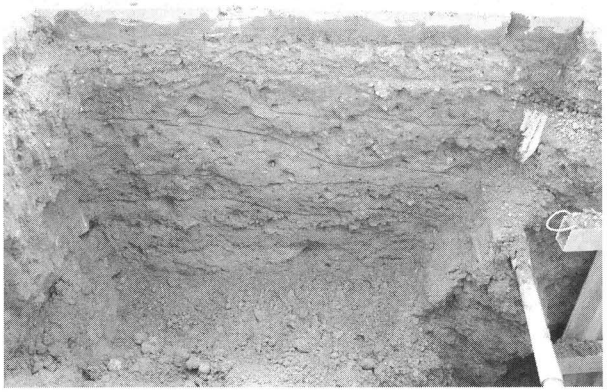
図版1

調査地（東から）

1区北壁

2区東壁

3区機械掘削（北西から）



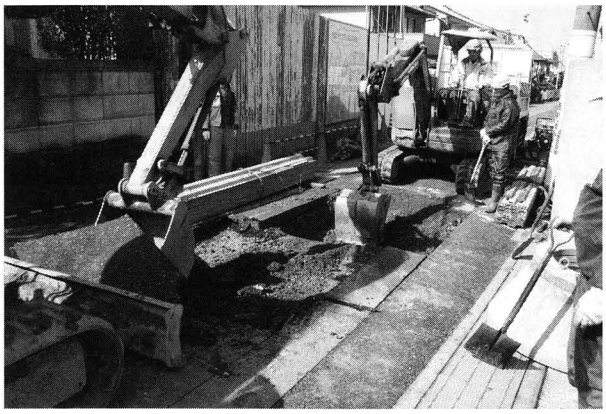
3区南壁上部

3区南壁下部

4区南壁上部

4区南壁下部

図版2



5区機械掘削（北東から）

5区北壁上部

5区北壁下部

5区東壁下部

6区調査地（東から）

6区北壁上部

6区最終面（南から）

6区北壁下部

XⅡ　水越遺跡第11次調査（ＭＫ2012－11）

例　　言

1．本書は、大阪府八尾市東町６丁目、千塚１丁目、大窪地内で実施した公共下水道工事(23-13工区)に伴う発掘調査報告書である。

1．本書で報告する水越遺跡第11次調査(ＭＫ2012－11)の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の埋蔵文化財調査指示書に基づき、公益財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。

1．現地調査は平成24年８月８日～８月30日(外業実働８日)に、坪田真一を担当者として実施した。調査面積は約60㎡である。

1．現地調査においては、飯塚直世・芝﨑和美・竹田貴子・村井俊子の参加を得た。

1．内業整理業務は下記が行い、現地調査終了後随時実施し、平成25年３月31日に完了した。
　遺物復元－飯塚・芝﨑、遺物実測－飯塚・市森千恵子・國津玲子・村井、遺物トレース－市森、その他－坪田。

1．本書の執筆・編集は坪田が行った。

本　文　目　次

1.はじめに……69
2.調査概要……70
　1)調査の方法と経過……70
　2)１区の調査……70
　3)２区の調査……72
3.まとめ……77

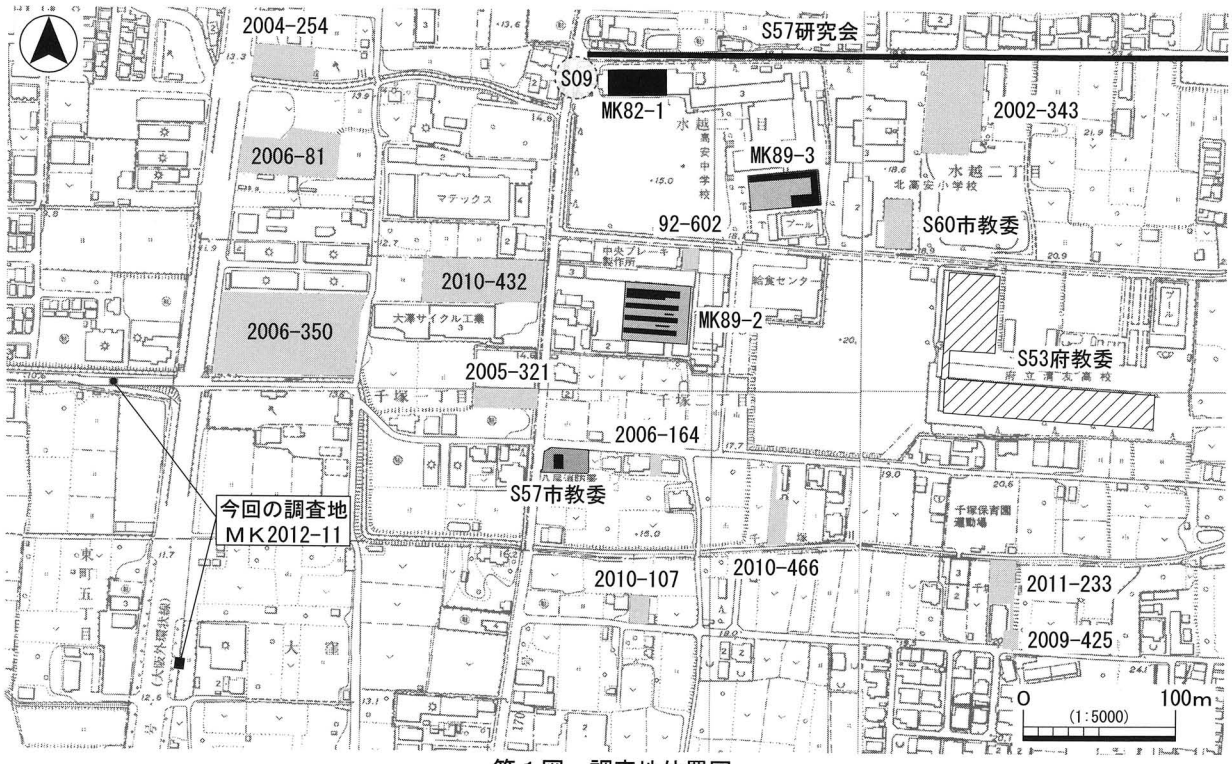
Ⅻ　水越遺跡第11次調査(MK2012－11)

1．はじめに

水越遺跡は大阪府八尾市の北東部に位置し、現在の行政区画では西高安町１丁目、水越２・５・７丁目、千塚１～３丁目、服部川１～７丁目、神立１丁目、及び千塚、大窪、山畑、服部川一帯の約1.2km四方がその範囲とされている。地形的には生駒山西麓から河内平野に続く扇状地上に立地し、西側には旧大和川の主流であった玉串川・恩智川の氾濫原が広がっている。当遺跡は北側で太田川遺跡・大竹遺跡、南側で郡川遺跡・高麗寺跡に接しており、東側には高安古墳群・高安千塚古墳群が広がっている。

当遺跡では大正９年に清原得巖氏により石鏃が採集されて以来、縄文時代の石器や弥生～古墳時代の土器・玉作関係資料が多く採集され、「高安遺跡」・「千塚遺跡」等の名称で遺跡の存在が知られていた。そして昭和53年に最初の発掘調査として、大阪府教育委員会によって大阪府立清友高等学校建設に伴う調査(S53府教委)が実施された。調査では既知の採集資料と同様の成果が得られた他、弥生時代～古墳時代の集落遺構(井戸・溝・方形周溝墓・方墳・土器棺等)、中世の集落遺構(掘立柱建物・井戸等)が検出された。その後、八尾市教育委員会・当調査研究会により多次に亘る発掘調査が行われており、これらの調査成果から、当遺跡は縄文時代中期～近世の複合遺跡であることが認識されている。特筆すべき成果として、遺跡範囲北部に当たる研究会第２次調査(MK89-2)では、南北方向に伸びる弥生時代中期の大溝の存在から環濠集落が推定されている。

今回の調査地は遺跡西端部に当たり、周辺ではこれまであまり発掘調査は行われておらず、遺跡の様相が不明な地域といえる。



第１図　調査地位置図

2．調査概要

1）調査の方法と経過

今回の調査は八尾市東町６丁目、千塚１丁目、大窪地内で実施した公共下水工事(23-13工区)に伴う調査で、当調査研究会が水越遺跡内で行った第11次調査(ＭＫ2012－11)である。

調査区は道路上に設定された立坑部分２箇所(北から１・２区)である。

調査区平面形は１区が直径約4.5ｍの円形、２区は東西約6.5ｍ×南北約7.5ｍの長方形を呈し、総面積は約60㎡である。

調査は、１区が現地表(T.P.+12.0ｍ)下1.8～4.9ｍ、２区は現地表(T.P.+12.7ｍ)下1.7～6.4ｍについて、人力・機械掘削を併用して実施した。１・２区共に断面観察用に東壁を残しながら掘削を進めた。なお１区は夜間調査である。

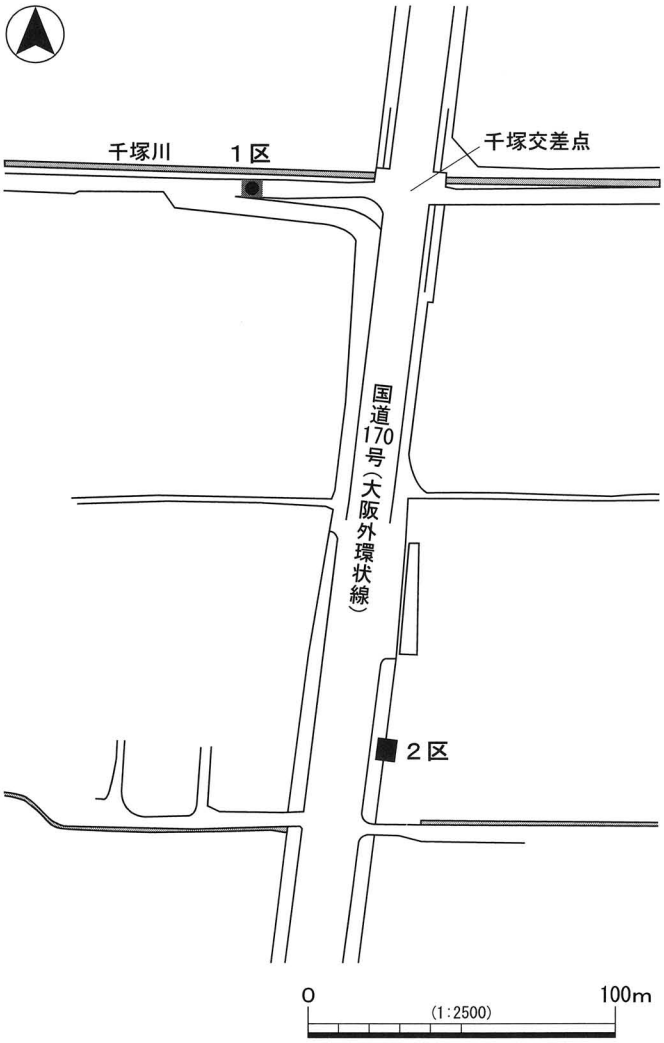
調査では、工事使用の仮ベンチマークを標高の基準とした。

遺構名は、遺構略号＋地区＋面＋番号とした(ＳＤ211：２区第１面１番目の溝)。

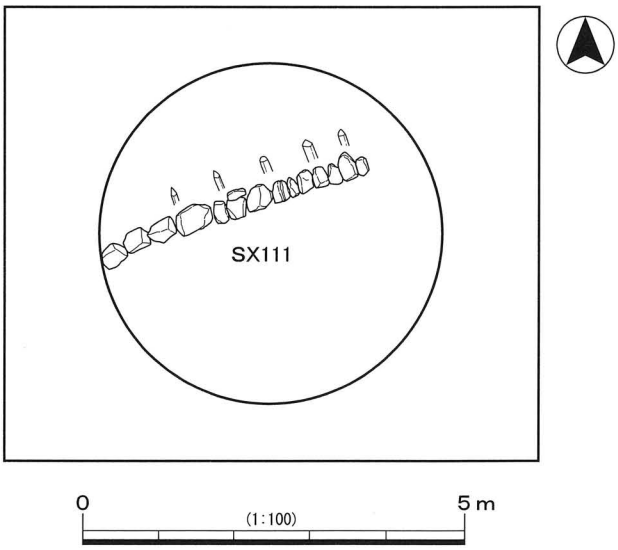
2）１区の調査

〈基本層序〉

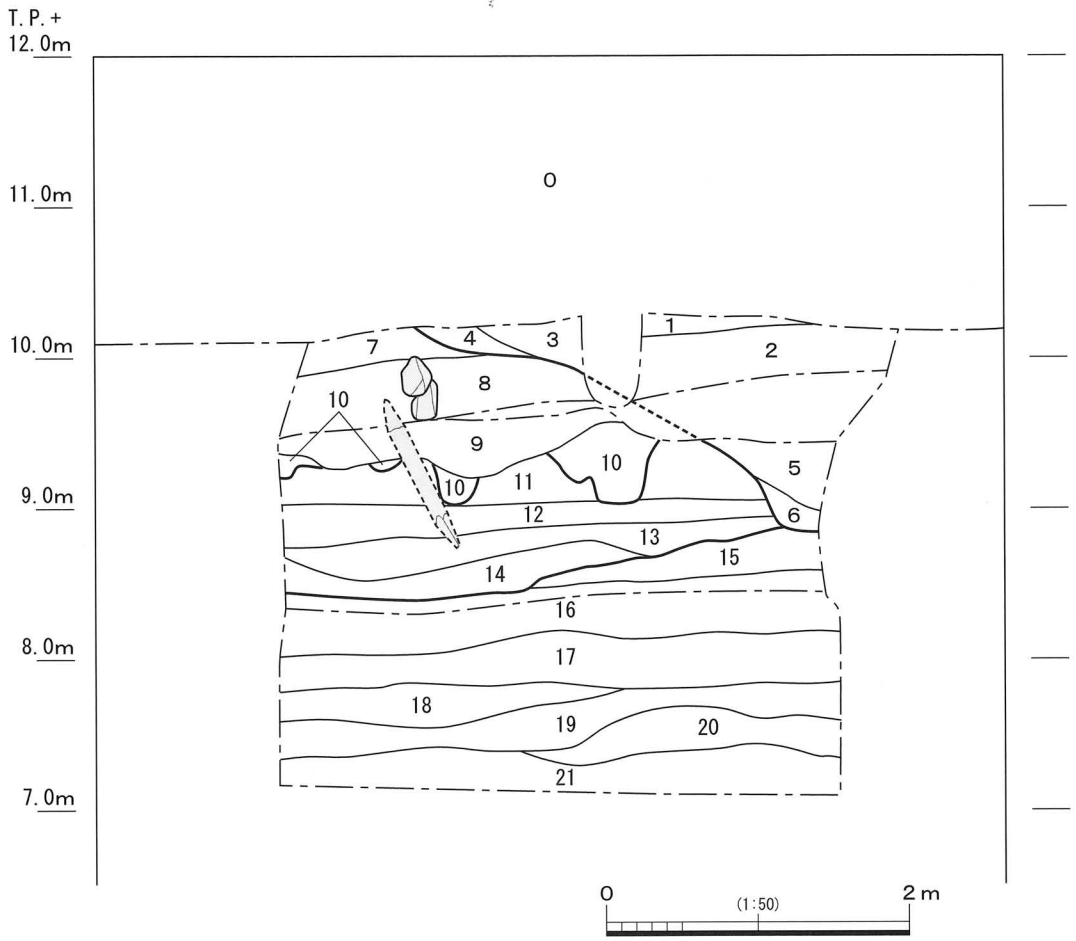
１～６層は粘土～極粗粒砂からなる水成層である。河川堆積で、調査区北側を西流する千塚川の前身河川と考えられる。７～９層は後述するＳＸ111に伴う盛土と考えられる。10層はブロック状を呈し遺構埋土と考えられるが、平行して延びる耕作溝の可能性が高い。11・12層は暗色を呈する土壌化層である。11層から弥生時代～古墳時代頃と考えられる土器片が１点出土している。13・14層はシルト～極粗粒砂からなる水成層である。15層は暗色を呈する土壌化層である。16層以下は扇状地性堆積の地山層である。



第２図　調査区位置図



第３図　１区平面図



１区
０．盛土・撹乱
１．オリーブ灰色シルト混細粒砂～極粗粒砂　水成層
２．オリーブ灰色極細粒砂～粗粒砂多混シルト　水成層
３．オリーブ灰色細粒砂～極粗粒砂混粘土質シルト　ラミナ状植物遺体　水成層
４．暗褐色細粒砂～極粗粒砂多混粘土質シルト　植物遺体　水成層
５．暗オリーブ灰色粘土～極粗粒砂互層　水成層
６．黒褐色極細粒砂～細粒砂混粘土　水成層
７．オリーブ灰色極細粒砂～極粗粒砂混シルト質粘土
８．オリーブ灰色細粒砂～中粒砂混シルト質粘土
９．オリーブ灰色シルト～粗粒砂
10．黄灰色極細粒砂～細粒砂混粘土質シルト　ブロック状
11．褐灰色極細粒砂～細粒砂混シルト質粘土　土壌化層
12．黄灰褐色細粒砂～粗粒砂多混粘土質シルト　土壌化層
13．黄灰色シルト～粗粒砂　水成層
14．暗灰黄色極細粒砂～極粗粒砂　水成層
15．褐灰色細粒砂～粗粒砂混シルト質粘土　土壌化層
16．にぶい黄色細粒砂～粗粒砂混シルト質粘土
17．にぶい黄色細粒砂混シルト質粘土
18．暗灰黄色細粒砂～粗粒砂多混粘土質シルト
19．灰黄色細粒砂～極粗粒砂混シルト
20．黄褐色シルト～細礫互層
21．暗オリーブ灰色粘土～シルト互層

第４図　１区東壁

〈検出遺構と出土遺物〉

・第１面

８層内(T.P.+10.0m)で石列(ＳＸ111)を検出した。

ＳＸ111

東北東－西南西方向に直線的に延びる石列で、検出長は約4.5mを測る。石材は径30～50cmのものを２段に積んでおり、南面を揃えている。また石列の北側には杭列が平行している。杭は北側から石列の下方に向って斜めに、約60cm間隔で打たれており、直径５～10cmの丸杭で、東壁で確認したものは長さ約1.1mを測る。石列検出時に18～19世紀代に比定される伊万里焼碗等が出土している。

断面の観察から、７～９層は旧千塚川(１～６層)右岸に構築された護岸施設(堤防)の盛土である可能性が高く、この石列・杭列についてはその基礎であったと捉えられる。構築の時期は19世紀以降であろう。

３）２区の調査

〈基本層序〉

１層は旧耕土である。２層も撹拌された作土で、下面が第１面である。３層は暗色を呈する土壌化層で、上面が第２面である。４層は極細粒砂～粗粒砂の互層状の水成層で、河川堆積あるいは洪水砂である。５層は撹拌が認められる土壌化層で、作土の可能性もある。６層は水成層と考えられるがやや土壌化している。７～９層は撹拌が認められる土壌化層である。７層上面が第３面である。10層以下は扇状地性堆積の地山層で、粘土～極粗粒砂の互層状の水成層であるが、16層は暗色を呈し土壌化している可能性がある。

〈検出遺構と出土遺物〉

第１・２面は大部分が撹乱されており、東部・中央部のみ遺構が遺存していた。

・第１面

２層下面(T.P.+10.8m)で溝７条(ＳＤ211～217)を検出した。ＳＤ211・212は南北方向、ＳＤ213～216は東西方向に平行して延びる溝である。幅20～50cm・深さ10cm程度を測り、埋土は２層と同じである。これらは耕作関連の溝であろう。ＳＤ217はこれらの溝群の南に位置する東西方向の溝である。北肩のみの検出で詳細は不明であるが、幅1.0m以上、検出部の深さ15cmを測る。埋土はブロック状の単層で、上部が２層により削平されていることから他の溝群より先行する。

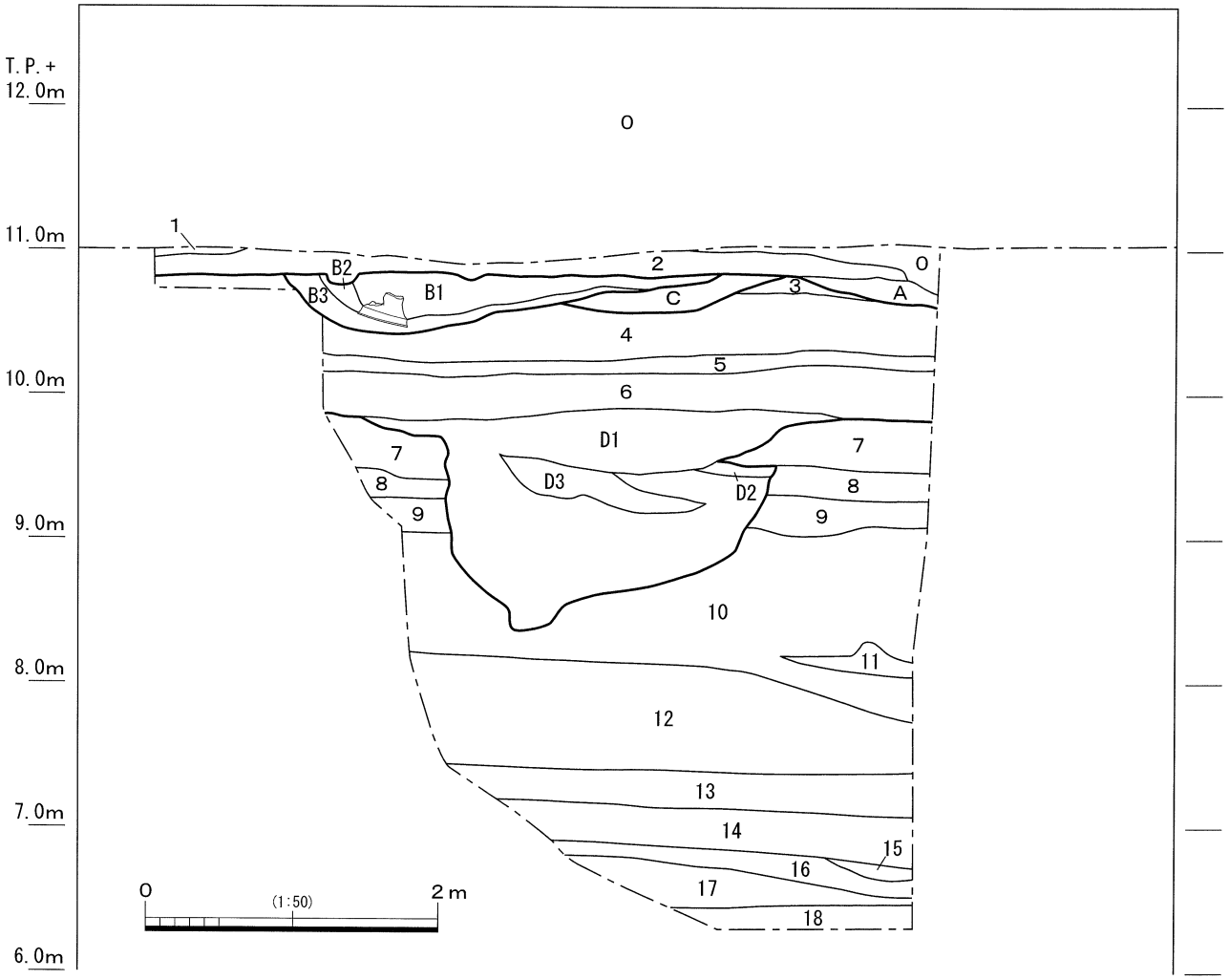
第１面の時期については、２層から伊万里焼碗(16)が出土していることから近世である。16は外面に窓を有する網目文を描くもので、17世紀末頃に比定される

・第２面

３層上面(T.P.+10.8m)で土坑３基(ＳＫ221～223)を検出した。

ＳＫ221

北東部で検出した土坑で、東部が調査区外に至るため詳細は不明である。検出部分の規模は南北約3.2m・東西約1.5m、深さは最大約45cmで北部が深くなっている。埋土はブロック状の３層を確認した。遺物は弥生時代後期に比定される土器が多く出土しており、１～８を図化した。底部付近からの出土が多く、北部・南部に集中しており、南部では完形に近い土器が横位で並んだような状況で出土している(１・３・６)。１は長頸壺である。調整は磨耗のため不明瞭であるが、



２区
０．盛土・撹乱
１．5GY4/1暗オリーブ灰色細粒砂～中粒砂多混シルト　旧耕土
２．10YR5/2灰黄褐色極細粒砂～細粒砂多混シルト質粘土　撹拌作土　ＳＤ211～216埋土
３．10YR5/1褐灰色極細粒砂～細粒砂多混シルト　土壌化層
４．2.5Y5/2暗灰黄色極細粒砂～粗粒砂互層　水成層
５．2.5Y5/2暗灰黄色極細粒砂～細粒砂混粘土質シルト　Fe斑　撹拌土壌化層
６．2.5GY4/1暗オリーブ灰色シルト～粗粒砂　土壌化層？
７．7.5Y2/2オリーブ黒色シルト～極細粒砂混粘土　土壌化層？
８．10Y3/1オリーブ黒色極細粒砂～細粒砂混シルト質粘土　撹拌土壌化層
９．2.5GY4/1暗オリーブ灰色極細粒砂～細粒砂混粘土　撹拌土壌化層
10．5GY4/1暗オリーブ灰色極細粒砂～中粒砂混粘土質シルト　水成層
11．2.5GY4/1暗オリーブ灰色シルト～極粗粒砂　水成層
12．5GY5/1オリーブ灰色シルト～極粗粒砂互層　水成層
13．2.5GY4/1暗オリーブ灰色粘土～極粗粒砂互層　水成層
14．2.5Y3/2黒褐色粘土～シルト互層　水成層
15．2.5Y6/2灰黄色細粒砂　水成層
16．10YR3/2黒褐色粘土質シルト混細粒砂～粗粒砂　土壌化層？
17．2.5Y6/1黄灰色シルト混細粒砂～粗粒砂　水成層
18．2.5Y3/2黒褐色細粒砂～粗粒砂混シルト質粘土　水成層

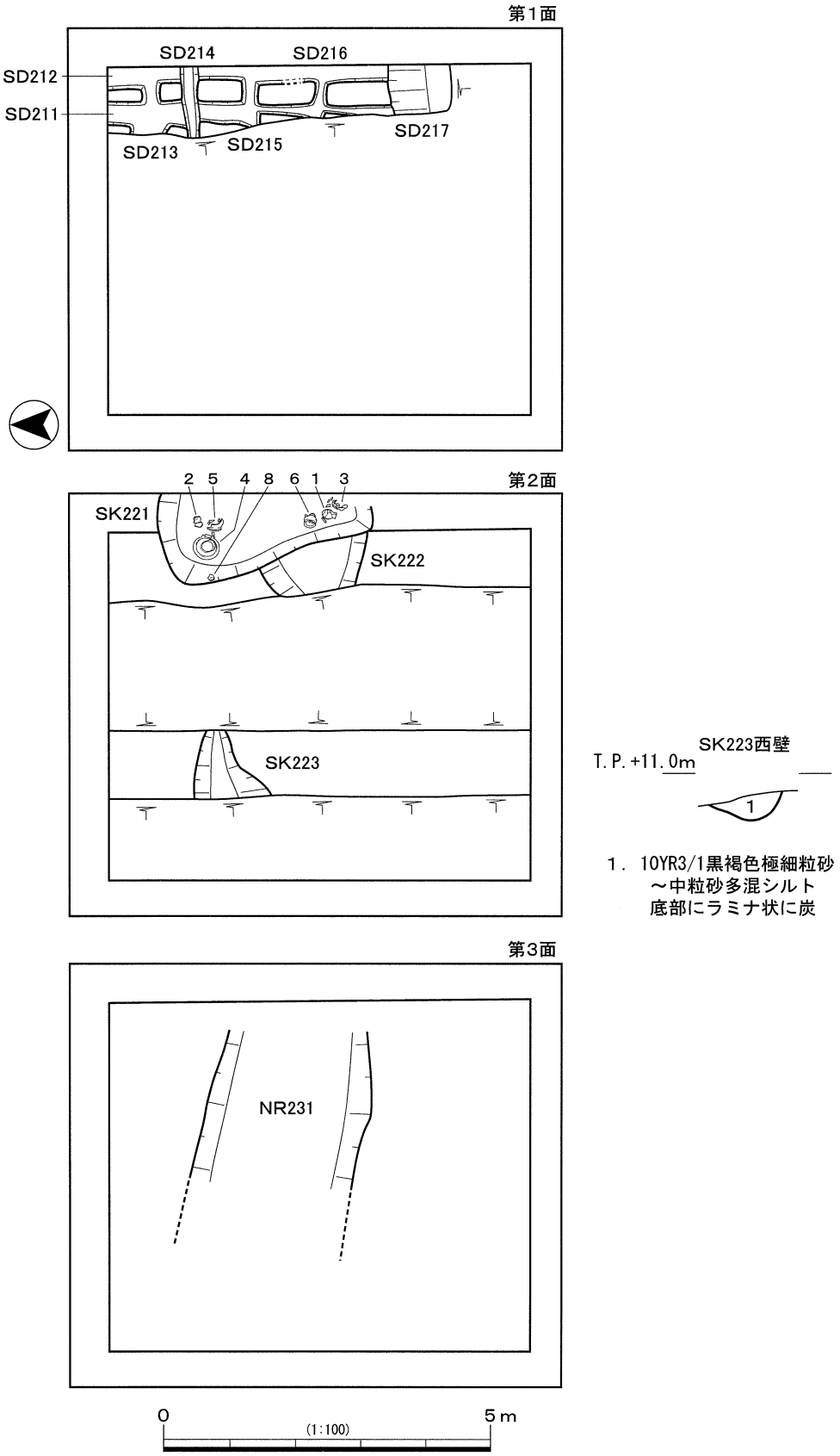
ＳＤ217
Ａ．10YR5/2灰黄褐色極細粒砂～細粒砂混シルト　ブロック状

ＳＫ221
B1．10YR3/1黒褐色極細粒砂～細粒砂混粘土　ブロック状
B2．10YR4/1褐灰色極細粒砂～細粒砂多混シルト質粘土　ブロック状
B3．10YR5/1褐灰色極細粒砂～細粒砂多混粘土質シルト　ブロック状

ＳＫ222
Ｃ．10YR5/1褐灰色極細粒砂～中粒砂多混粘土質シルト　ブロック状

ＮＲ231
D1．7.5Y6/1灰色シルト～極粗粒砂互層
D2．2.5GY6/1オリーブ灰色シルト～極細粒砂互層
D3．2.5GY5/1オリーブ灰色極細粒砂～極粗粒砂互層

第５図　２区東壁



第６図　２区平面図・遺構断面図

頸部外面は縦位のヘラミガキと思われる。２は壺の底体部である。３は同一固体の可能性がある頸部の状況から細頸壺と考えられる。頸部の基部外面には沈線及び刺突文を巡らせる。１～３の体部外面には黒斑が認められる。４は複合口縁壺で、ほぼ完存する口頸部のみ出土した。調整はヘラミガキを基調とする。口径34.2cmを測る。５は広口壺口頸部で、口縁部外端面に櫛描波状文を巡らせる。調整は外面ナデ、内面縦位ヘラミガキで、口縁部内面にはヘラミガキに先行する線刻による絵画文が認められる。題材については、向って右の頭部から左に長く延びる頸部を表現した動物か、あるいは大阪府八尾南遺跡、池上・曽根遺跡、船橋遺跡等で確認されている竜との類似性が認められ、その可能性もあるが詳細は不明である。６は甕である。調整は磨耗のため不明瞭で、内面のナデが確認できるのみである。法量は口径15.0cm・器高16.6cmを測る。７は甕、８は壺あるいは甕の底部である。８の外面調整は縦位ヘラミガキである。

ＳＫ222

東部をＳＫ221に、西部を撹乱により削平されており詳細は不明である。検出部分の規模は最大幅1.6m・深さ約25cmを測る。埋土はブロック状の単層である。遺物は弥生時代中期後半の土器・石器が出土しており、９～11を図化した。９は広口壺で、口縁端部外端面に簾状文を施す。10は鉢で、口縁端部外端面に斜位の刺突文、体部外面に簾状文及び最下位に斜位の刺突文を施す。９・10は生駒西麓産の胎土である。11は石庖丁で、刃は両刃でやや内湾する。緑泥片岩製である。

ＳＫ223

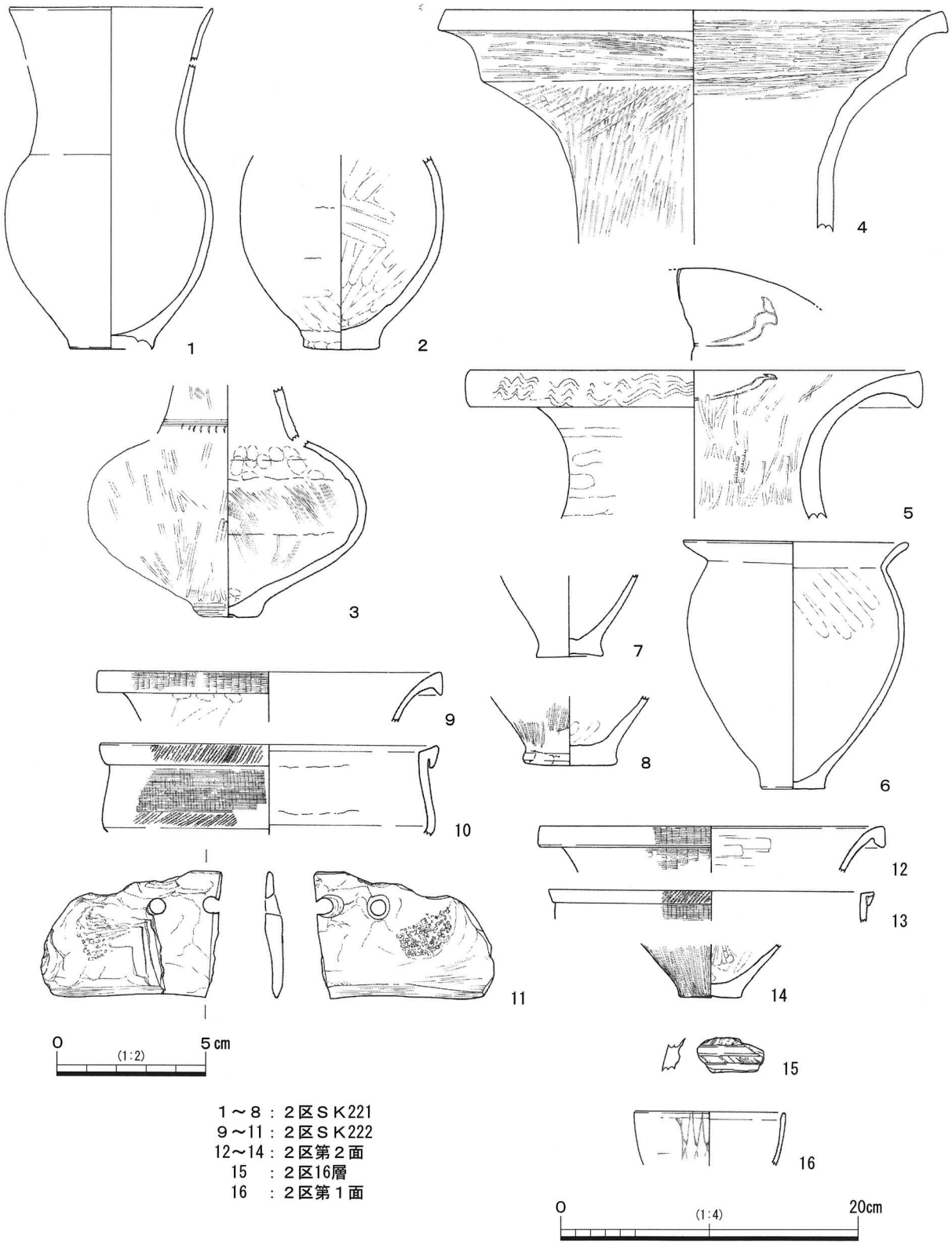
北東部で検出した土坑で、西・東を撹乱により削平されている。検出部分の規模は東西約1.1m・南北約1.2m・深さ約40cmを測る。埋土中に多く炭を含み、底部付近ではラミナ状の部分もある。遺物は弥生時代中期後半の土器が少量出土している。

・第３面

７層上面(T.P.+9.9m)で自然河川１条(ＮＲ231)を検出した。東西方向に延びる河川で、幅約2.4m・深さ約1.5mを測る。埋土はシルト～極粗粒砂の互層状を呈する。

・包含層出土遺物

12は広口壺で、口縁部外面及び口縁端部外端面に簾状文を施す。13は鉢で、口縁端部外端面に斜位の刺突文、体部外面に簾状文を施す。12・13は生駒西麓産の胎土である。14は壺底部と考えられ、調整は外面縦位のヘラミガキ、内面ヘラナデである。12～14は第２面検出時出土。15は土壌化層の可能性がある第16層出土である。口縁部付近の破片と思われ、凹線の上下に刻み目を施す特徴から、縄文時代後期後半の元住吉山２式の可能性がある。



1～8：２区ＳＫ221
9～11：２区ＳＫ222
12～14：２区第２面
15　：２区16層
16　：２区第１面

第７図　出土遺物

４．まとめ

今回の調査では、縄文時代～近世に亘る遺構・遺物を検出した。出土遺物量はコンテナ１箱を数える。

２区では近世耕作面の下面において弥生時代中期後半、後期の集落遺構を検出したほか、下層では自然河川や土壌化層の可能性がある縄文土器を含む地層を確認した。遺跡範囲西端部にあたる本調査地周辺では、これまであまり発掘調査は行われておらず、遺跡西部の様相を知る上で重要な成果といえる。またまた１区においても弥生時代～古墳時代頃と考えられる土壌化層から１点ではあるが土器が出土しており、遺跡範囲の西への広がりを示唆する成果ともいえよう。

２区検出の弥生時代後期の土坑ＳＫ221から出土した広口壺には、動物かあるいは竜と考えられる絵画文が見られ、絵画土器の研究において重要な資料となろう。

１区検出の護岸施設は近世の千塚川に伴うものと考えられる。

参考文献

・原田　修・久貝　健・島田和子1976『大阪文化誌　第２巻・第２号』財団法人大阪文化財センター
・吉岡　哲1988「河内の玉作遺跡－本校敷地周辺の遺跡とその性格－」『紀要　清友　第１号』大阪府立清友高等学校
・西村公助1997「Ⅴ　水越遺跡第２次調査（ＭＫ89－２）」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告57』財団法人八尾市文化財調査研究会
・戸沢充則編1994『縄文時代研究事典』東京堂出版
・岡本茂史・森屋美佐子・他2008『八尾南遺跡　大和川改修（高規格堤防）建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　（財）大阪府文化財センター調査報告書第172集』（財）大阪府文化財センター
・橋本裕行1987「弥生土器の絵」『特集　弥生土器は語る　季刊考古学　第19号』雄山閣出版株式会社

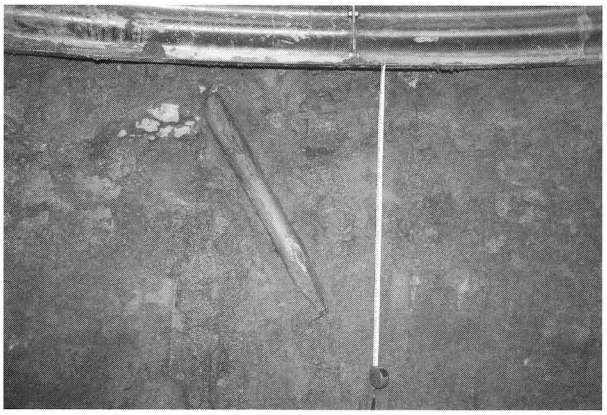
図版1

1区調査地(西から)

1区機械掘削(北から)

1区SX111(西から)

1区SX111(北から)


1区SX111東壁内杭(西から)

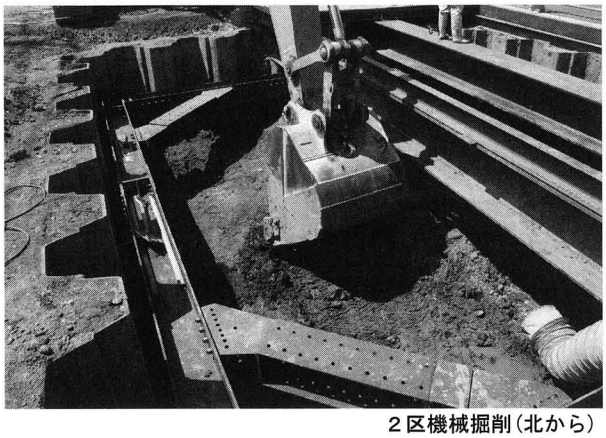
1区東壁(1段目)

1区東壁(2段目)

1区東壁(3段目)

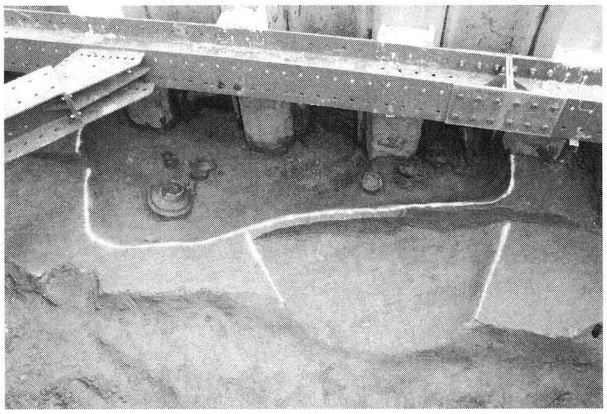
図版2

２区調査地（北西から）



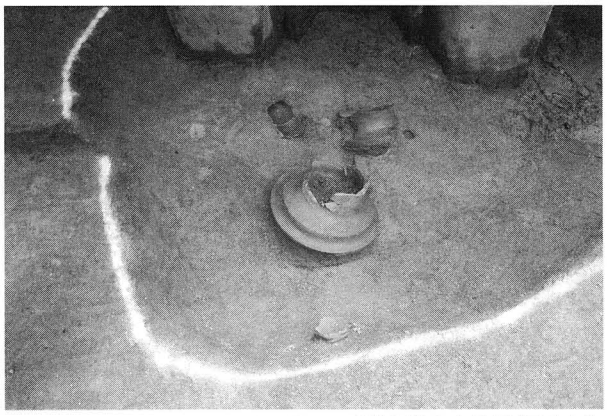
２区機械掘削（北から）

２区第１面（南から）



２区ＳＫ221・222（西から）

２区ＳＫ221（北から）

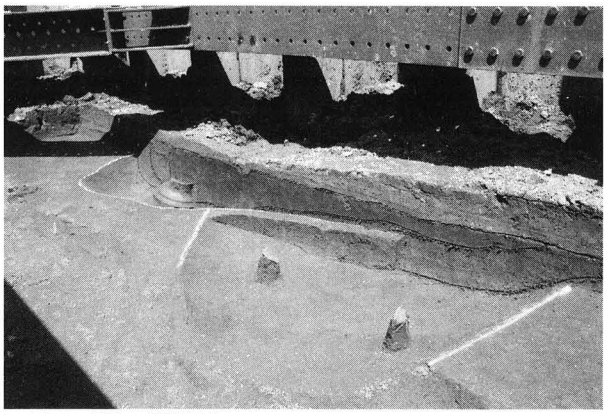


２区ＳＫ221土器出土状況（西から）

２区ＳＫ221土器出土状況（西から）

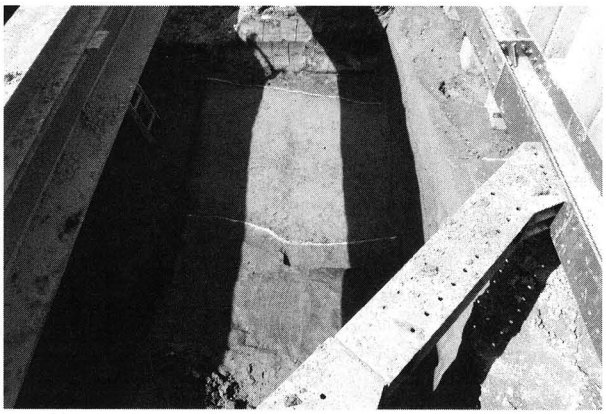
２区ＳＫ221土器出土状況（西から）

図版3

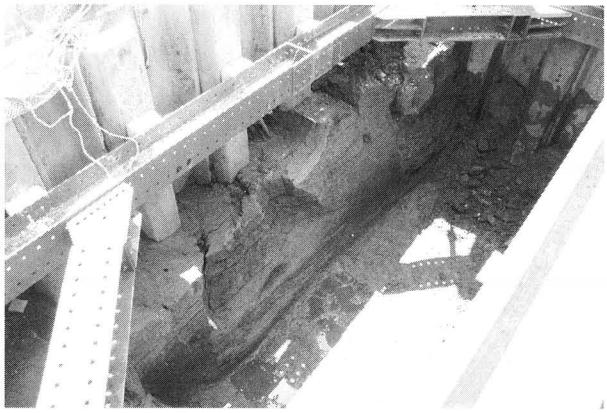


２区ＳＫ221・222東壁

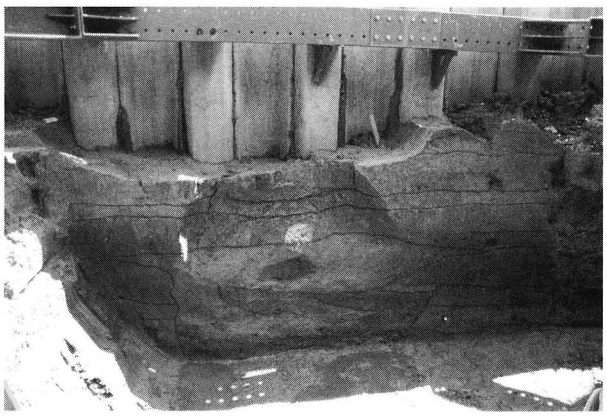
２区ＳＫ223（東から）



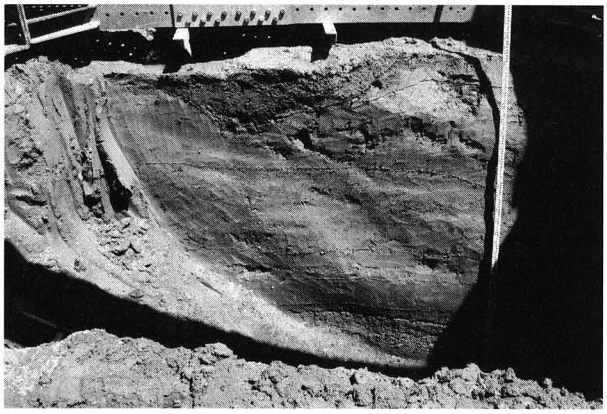
２区第３面ＮＲ231（南から）



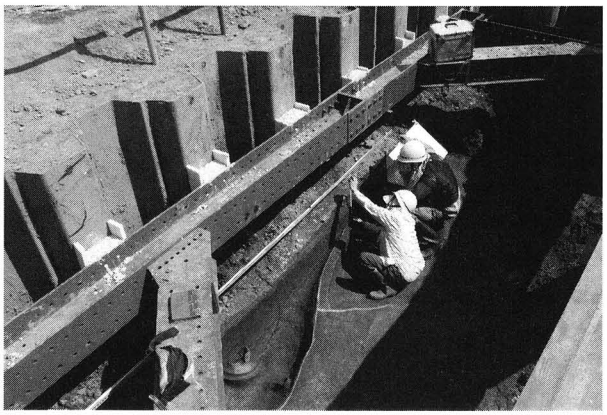
２区東壁（２段目）



２区ＮＲ231東壁



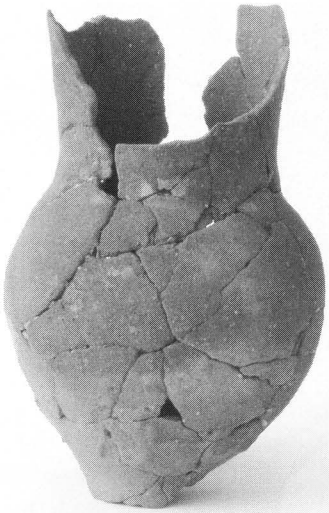
２区東壁（３段目）



２区調査状況（北西から）

２区調査状況（北西から）

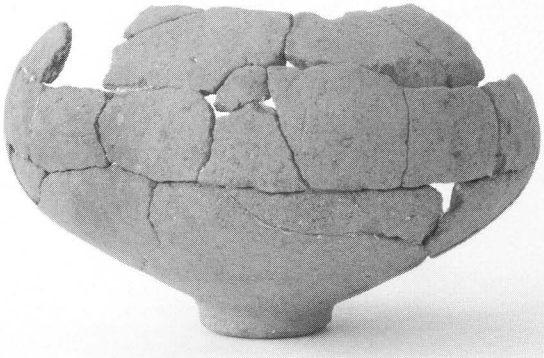
図版4


1

5

2

6

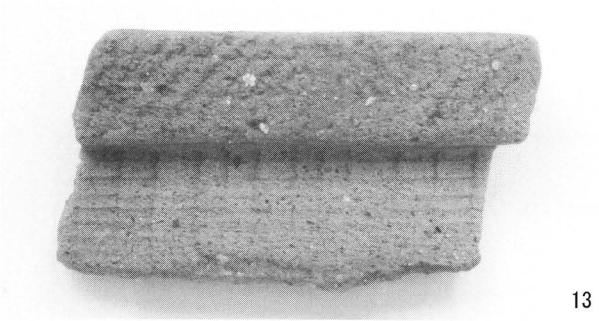

3

4

7

図版5

8


13

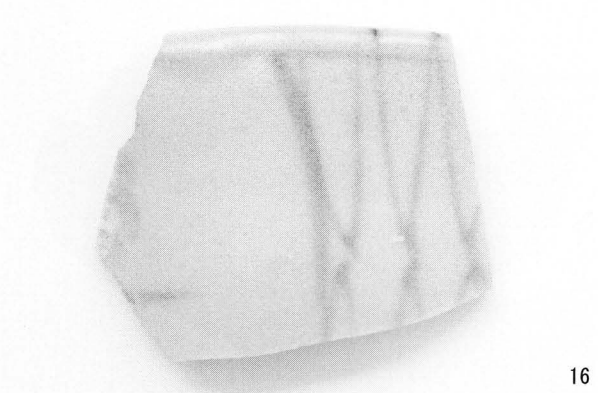
9

14

10

15

12


16

11

XⅢ　弓削遺跡第16次調査（ＹＧＥ2011－16）

例　　言

1．本書は、大阪府八尾市志紀町南２丁目地内で実施した下水道工事(23-30工区)に伴う発掘調査報告書である。

1．本書で報告する弓削遺跡第16次調査(ＹＧＥ2011－16)の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の埋蔵文化財調査指示書に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。

1．現地調査は、平成24年１月14日～３月３日(外業実働３日)に、坪田真一を調査担当者として実施した。調査面積は約12㎡である。

1．現地調査においては、梶本潤二・芝﨑和美・竹田貴子・田島宣子の参加を得た。

1．内業整理業務は下記が行い、現地調査終了後随時実施し、平成25年３月31日に完了した。
　遺物復元・実測・トレースー山内千惠子。

1．本書の執筆・編集は坪田が行った。

本　文　目　次

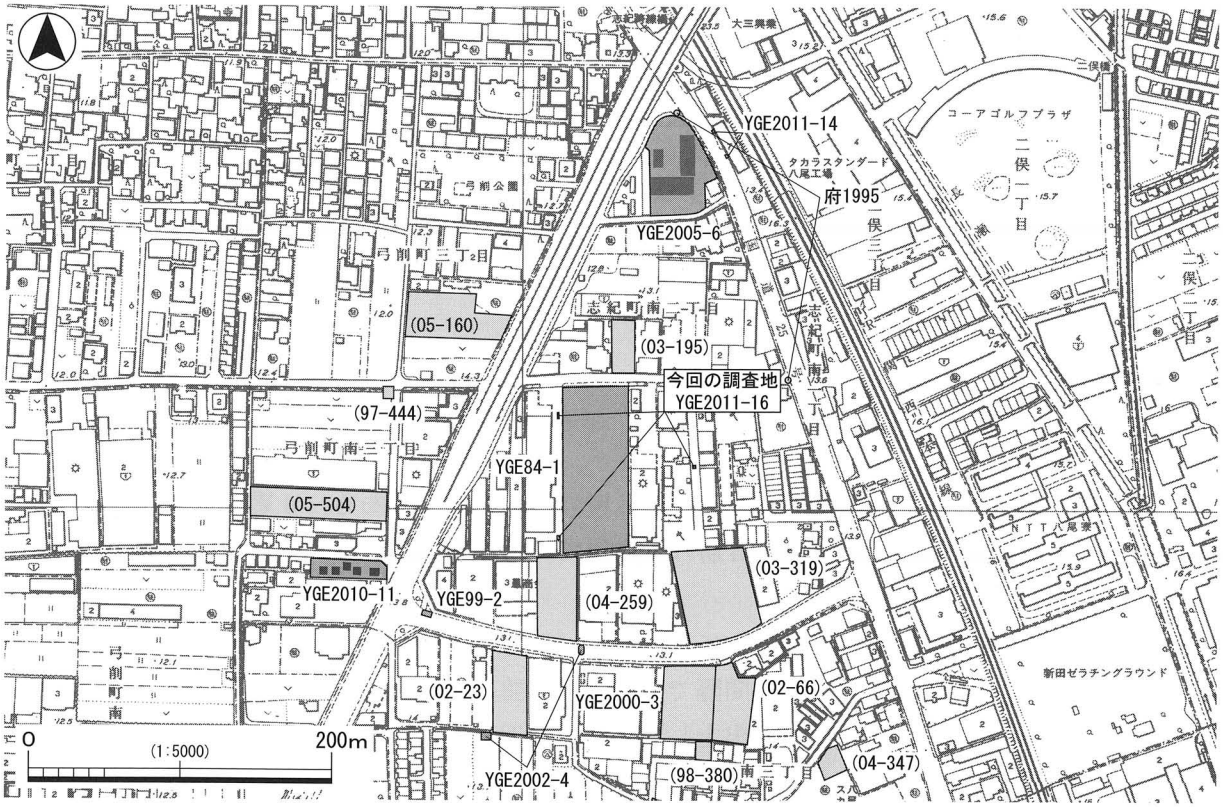
1．はじめに……83
2．調査の方法と経過……84
3．調査概要……84
4．まとめ……89

XIII　弓削遺跡第16次調査（ＹＧＥ2011－16）

１．はじめに

弓削遺跡は八尾市南東部に位置する弥生時代前期以降の複合遺跡で、現在の行政区画では、八尾市志紀町南２～４丁目、弓削町３丁目・弓削町南３丁目の一部、東西約0.5km・南北約0.7kmの範囲がその範囲となっている。地理的には、東を生駒山地、南を羽曳野丘陵、西を上町台地、北を淀川に囲まれた河内平野の南部、旧大和川の主流であった長瀬川と玉串川の分岐地点の西側にあたり、長瀬川左岸の沖積地上に位置している。遺跡範囲内の現地表の標高は、T.P.+12.8～15.0ｍを測る。当遺跡の周辺には、長瀬川を挟んで北東側には東弓削遺跡・弓削寺跡、北西側には志紀遺跡・田井中遺跡・木の本遺跡があり、南側には本郷遺跡（柏原市）が隣接する。

当遺跡では、昭和58年に志紀町南２丁目で八尾市教育委員会が実施した試掘調査において、多量の弥生土器、土師器、須恵器、埴輪等が出土し、これを受けて昭和59年に最初の発掘調査となる第１次調査（YGE84-1）を実施した。調査では弥生時代中期～奈良時代の遺構が確認され、膨大な量の土器が出土した弥生時代後期の溝や、墨書人面土器が出土した奈良時代の井戸の検出が特筆される。今回の調査地は遺跡範囲の中央部に当たり、この第１次調査地に近接している。また周辺では当調査研究会が第２・４・６次調査を実施している他、八尾市教育委員会・当調査研究会による小規模な遺構確認調査が行われている。主な成果として、第２次調査では弥生時代後期～古墳時代初頭、第４次調査では弥生時代後期、第６次調査では弥生時代後期、奈良時代、中世の遺構を確認している。



第１図　調査地位置図

2．調査の方法と経過

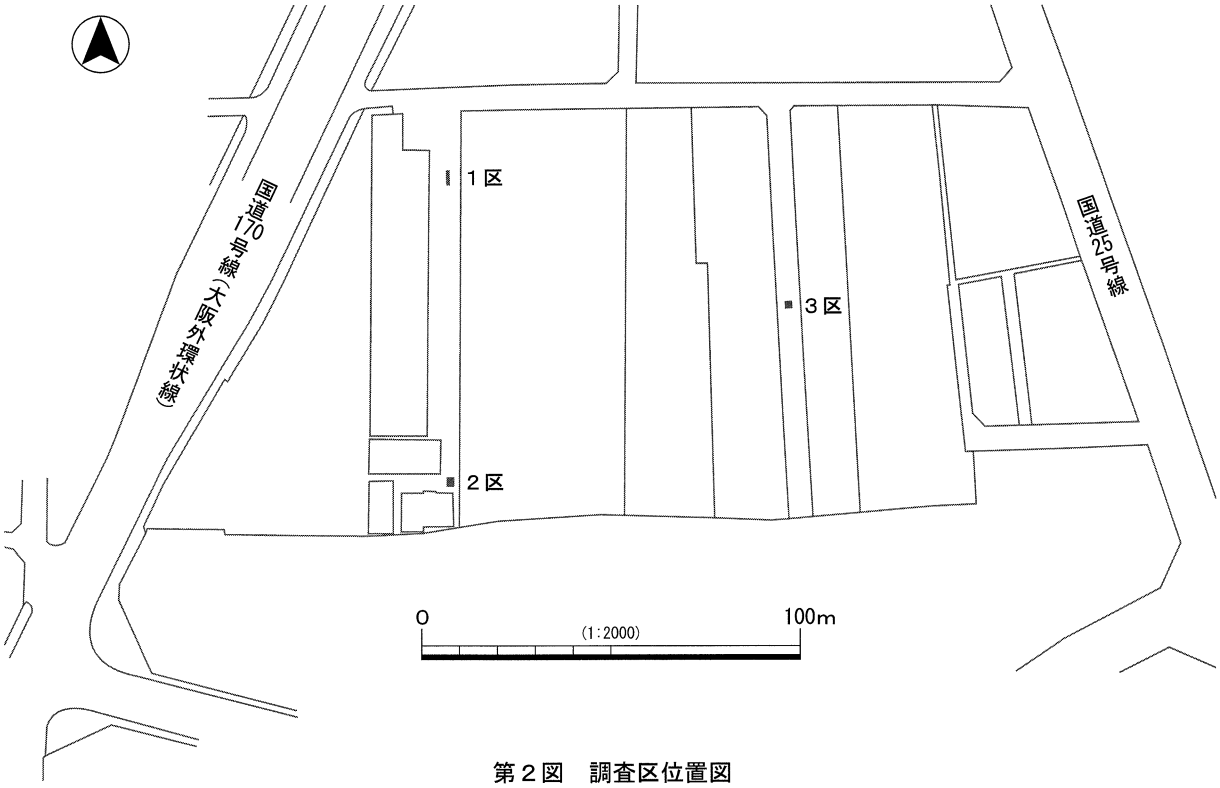
今回の調査は八尾市志紀町南２丁目地内で実施した下水道工事(23-30工区)に伴う調査で、当調査研究会が弓削遺跡内で行った第16次調査(ＹＧＥ2011－16)である。

調査地は道路上に設置される人孔部分(約2.0×2.0m)２箇所、管路部分(約1.0×4.0m)１箇所(北西から１～３区)で、総面積は約12㎡を測る。

調査は現地表(T.P.+13.6～13.8m)下1.6～2.2mについて、機械・人力掘削併用で実施した。

調査では工事使用のベンチマークを標高の基準とした。

遺構名については、遺構略号＋地区＋面＋遺構番号とした。



第２図　調査区位置図

3．調査概要

〈１区〉

・基本層序

０層は盛土。１層は旧耕土である。２～４層は撹拌された作土である。４層から古代頃と考えられる土師器、須恵器片が出土した。５層は水成層で河川堆積と考えられる。

・検出遺構

４層上面(T.P.+12.4m)で土坑４基(ＳＫ111～114)を検出した。規模は南北幅約1.5m、東西1.0m以上、深さ40cm以上を測り、約20cm間隔で南北方向に並ぶ状況である。断面逆台形を呈し、埋土はシルト～極細粒砂である。遺物は出土していない。近世において洪水後の水田復旧のため掘削された土坑と考えられ、類例からみていずれも東西方向に長い平面形が想定される。

〈２区〉

・基本層序

０層は盛土。１層は旧耕土である。２層は撹拌された作土である。３層は水成層で、洪水砂と考えられる。４～６層は撹拌された作土である。４層から時期不明の土師器片が少量出土した。７層は水成層で、１区５層に対応すると考えられる。８層はFe斑を多く含む層相で、作土の可能性がある。時期不明の土師器片が少量出土した。

・検出遺構

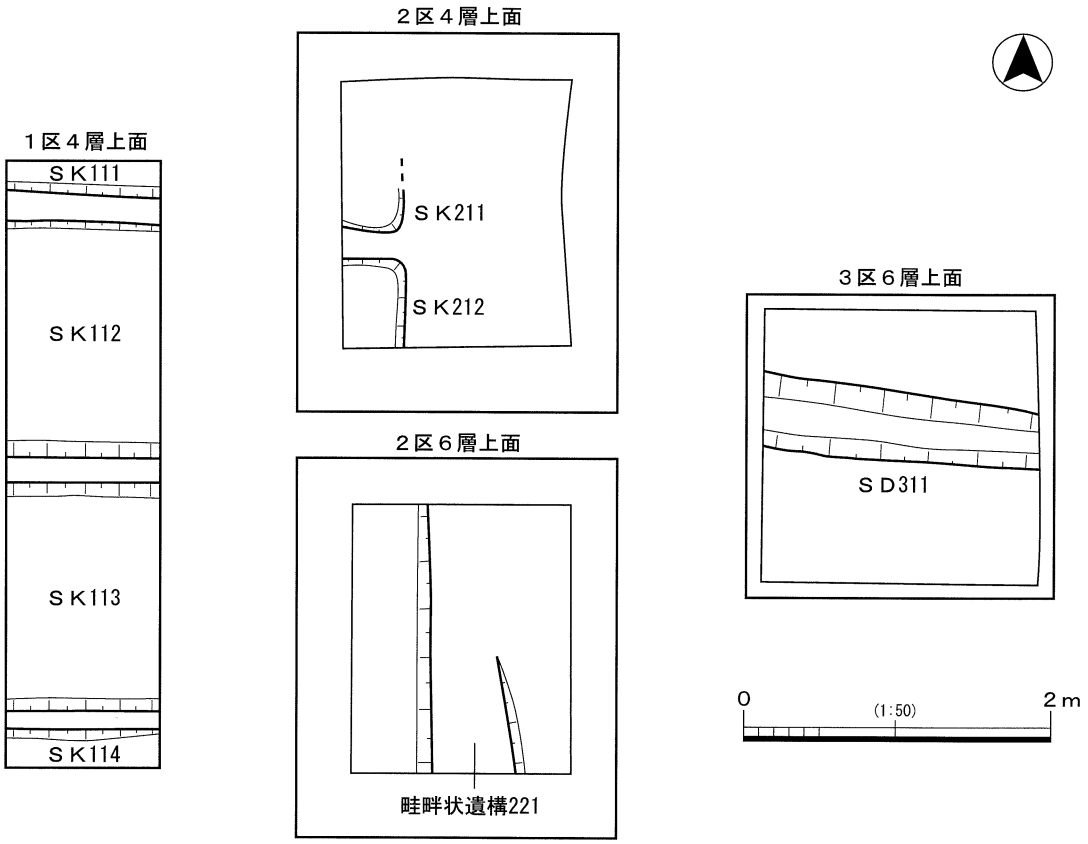
４層上面(T.P.+12.5m)で土坑２基(**ＳＫ211・212**)を検出した。共に一部分の検出で詳細は不明であるが、検出部分の平面形は方形の角部分にあたる。規模は**ＳＫ211**が東西40cm以上・南北30cm以上、**ＳＫ212**が東西40cm以上・南北60cm以上で、深さは約50cmを測る。検出状況や埋土の様相は１区**ＳＫ111～114**と類似するもので、性格を同じくする土坑群と考えられる。遺物は出土していない。

６層上面(T.P.+12.3m)で畦畔状遺構１条(**畦畔状遺構221**)を検出した。南北方向に直線的に延びるもので、規模は上幅約50cm・下幅約70cm・高さ５cm程度を測る。盛土は認められず削り出されていると捉えられる。時期は中世以降と考えられるが詳細は不明である。

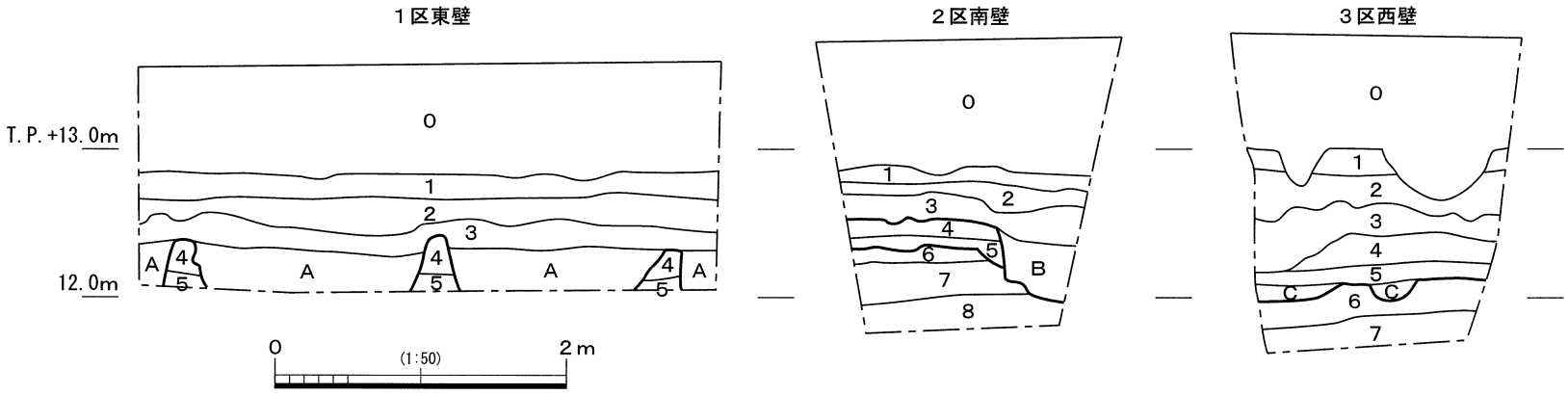
〈３区〉

・基本層序

０層は盛土。１層は旧耕土である。２層は水成層と考えられる。３層は撹拌された作土である。



第３図　平面図



１～３区
０．盛土・撹乱
１．5Y3/1オリーブ黒色シルト質粘土混極細粒砂～細粒砂　旧耕土

１区
２．7.5GY5/1緑灰色シルト質粘土ブロック混シルト～極細粒砂　撹拌作土
３．2.5GY6/1オリーブ灰色シルト質粘土ブロック混シルト　撹拌作土
４．2.5Y5/1黄灰色細粒砂～粗粒砂混シルト質粘土　撹拌作土
５．10YR4/3にぶい黄褐色細礫混シルト～中粒砂　水成層

Ａ．5Y6/1灰色シルト～極細粒砂　水成層

３区
２．2.5Y6/2灰黄色シルト　水成層？
３．10YR6/2灰黄褐色シルト混粘土質シルト　Mn斑　撹拌作土
４．10YR4/1褐灰色細粒砂～細礫少混粘土質シルト　土壌化層
５．10YR4/2灰黄褐色極細粒砂～細粒砂混粘土質シルト　土壌化層
６．10YR5/3にぶい黄褐色極細粒砂～細礫少混シルト質粘土　ブロック状　土壌化層
７．2.5Y5/2暗灰黄色粘土質シルト　土壌化層

ＳＤ311
Ｃ．10YR4/2灰黄褐色細粒砂混粘土質シルト　ブロック状

２区
２．10G4/1暗緑灰色極細粒砂～細粒砂混粘土質シルト　撹拌作土
３．10Y6/1灰色シルト～極細粒砂　水成層
４．7.5GY6/1緑灰色極細粒砂～細粒砂混粘土質シルト　撹拌作土
５．2.5Y6/1黄灰色細粒砂～中粒砂多混シルト質粘土　Fe斑　撹拌作土
６．2.5Y6/2灰黄色細粒砂～中粒砂混シルト質粘土　Fe斑多　撹拌作土
７．2.5Y6/2灰黄色10YR7/2にぶい黄橙色シルト～極細粒砂　Fe斑多　水成層
８．10YR6/2灰黄褐色細粒砂混シルト質粘土　Fe斑多　作土？

ＳＫ211・212
Ｂ．7.5Y6/1灰色シルト～中粒砂　水成層のブロック層

第４図　断面図

４・５層は暗色を呈する土壌化層である。平安時代前半、及び下層からの巻き上げと考えられる奈良時代頃までの遺物を多く含んでいる。６層はややブロック状を呈する土壌化層で、南西部では飛鳥時代頃までの土器を多く含んでおり、遺構埋土の可能性もある。７層は水成層と考えられるがやや土壌化している。

・検出遺構

６層上面(T.P.+12.1m)で溝１条(ＳＤ311)を検出した。東西方向に直線的に延びる溝で、規模は幅40～50cm・深さ10～15cmを測る。断面椀状を成し、埋土はブロック状の単層である。生産関連遺構と考えられるが詳細は不明である。遺物は飛鳥～奈良時代頃の須恵器・土師器が出土しており１・２を図化した。１は土師器杯である。口縁端部は内面に浅い段を成し、底体部内面には放射状暗文を施す。時期は飛鳥時代後期頃に比定されよう。２は土師器壺である。調整は口縁部ヨコナデ、体部は外面ナデ、内面板ナデで、頸部内面には粘土接合痕が明瞭に残る。

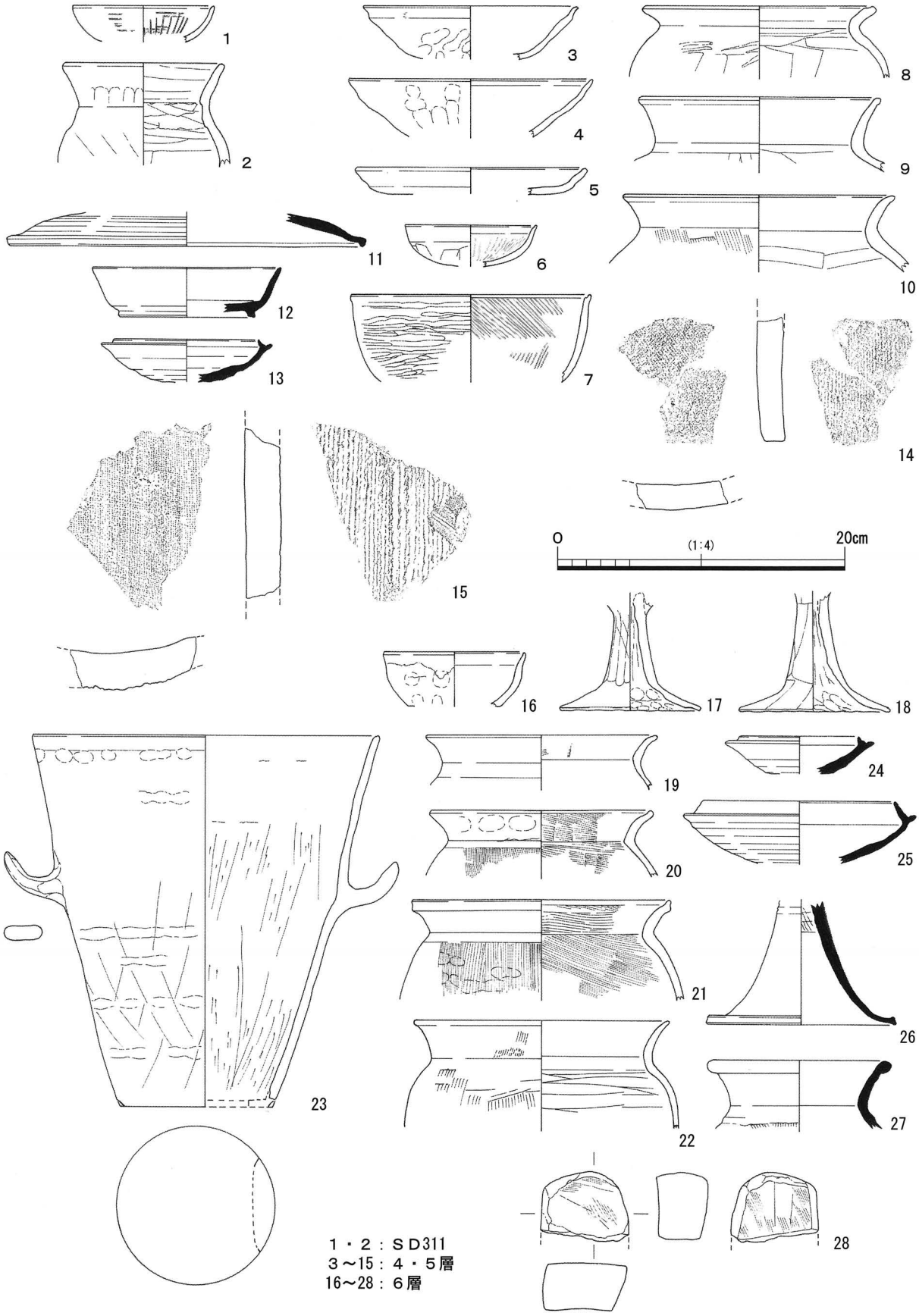
・地層内出土遺物

４・５層(３～15)

３・４は土師器椀である。共に口縁部ヨコナデ、体部外面には指頭圧痕が残るもので、３はヨコナデが強く口縁部に明瞭な段が生じている。５は土師器皿である。３～５は９～10世紀代に比定される。６・７は土師器杯である。外面調整は６がヨコナデ、７は横方向ヘラミガキである。内面の暗文は６が放射状、７は斜放射状に２段に施す。飛鳥時代に比定される。８～10は土師器甕である。胎土は８が砂粒を多く含み、９・10は精良である。調整は口縁部ヨコナデで、体部は９・10がタテハケ、８は肩部外面に横方向の工具痕が認められる。11は須恵器杯蓋、12・13は須恵器杯身である。13は底部外面に自然釉が厚く掛かる。11・12が奈良時代前半頃、13が飛鳥時代初頭に比定される。14・15は平瓦である。共に凹面布目、凸面縄目タタキで、14は凹面がやや煤けている。

６層(16～28)

16は土師器鉢である。17・18は土師器高杯の脚部である。脚柱部外面は面取りされ、内面には絞り目が残り、裾部内面には指頭圧痕が明瞭に残る。19～22は土師器甕である。20・21は内面にヨコハケ、体部外面にタテハケを施す。23は土師器甑で、底部の縁辺に楕円形の蒸気孔が巡るものである。口径約24cm・高さ約26cmに復元できる。調整は口縁部ヨコナデ、体部ナデで、内面下半が下から上へのヘラケズリである。底部付近が煤けている。16～23の土師器は飛鳥時代頃に比定される。24・25は須恵器杯身である。25は底部外面に火襷が見られる。26は須恵器長脚高杯で二段スカシを施す。27は須恵器壺類の口縁部である。肩部の形状から見て横瓶、あるいは大形の提瓶である可能性が高い。24は飛鳥時代、25～27は古墳時代後期に比定される。28は砥石で、使用面は１面である。


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
0
(1:4)
20cm
1・2：SD311
3～15：4・5層
16～28：6層

第５図　３区出土遺物

４．まとめ

今回の調査では古墳時代後期～近世の遺構・遺物を検出した。出土遺物はコンテナ１箱である。

東の３区では古墳時代後期～飛鳥時代（６層）、奈良～平安時代前期（４・５層）の遺物が多く出土した。調査区は古代より大和と難波を結ぶ主要道であった奈良街道の西側に近接することから、街道沿いに発展した該期の集落の存在が推定できる。

中世以降は一帯が生産域となっており、２区６層上面では生産関連遺構（畦畔状遺構）が見られた。また近世では洪水後の水田復旧のため掘削されたと考えられる土坑が１・２区で見られた。こういった土坑は当遺跡の他、池島・福万寺遺跡等で確認されている。

参考文献

・米田敏幸1984『八尾市内遺跡昭和58年度発掘調査報告書　－高安古墳群の調査他－　八尾市文化財調査報告10 昭和58年度国庫補助事業』八尾市教育委員会
・西村公助1985「８　弓削遺跡（第１次調査）」『昭和59年度事業概要報告』財団法人八尾市文化財調査研究会
・森本めぐみ2001「Ⅷ　弓削遺跡第２次調査（ＹＧＥ99－２）」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告67』財団法人八尾市文化財調査研究会
・西村公助2003「XⅦ　弓削遺跡第４次調査（ＹＧＥ2002－４）」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告75』財団法人八尾市文化財調査研究会
・西村公助2007「Ⅴ　弓削遺跡第６次調査（ＹＧＥ2005－６）」『財団法人八尾市文化財調査研究会報告97』財団法人八尾市文化財調査研究会
・菊井佳弥2007「２－26　弓削遺跡（2005-504）の調査」『八尾市内遺跡平成18年度発掘調査報告書　八尾市文化財調査報告55　平成18年度国庫補助事業』八尾市教育委員会
・廣瀬時習・他2007『池島・福万寺遺跡３　（財）大阪府文化財センター調査報告書第158集』財団法人大阪府文化財センター

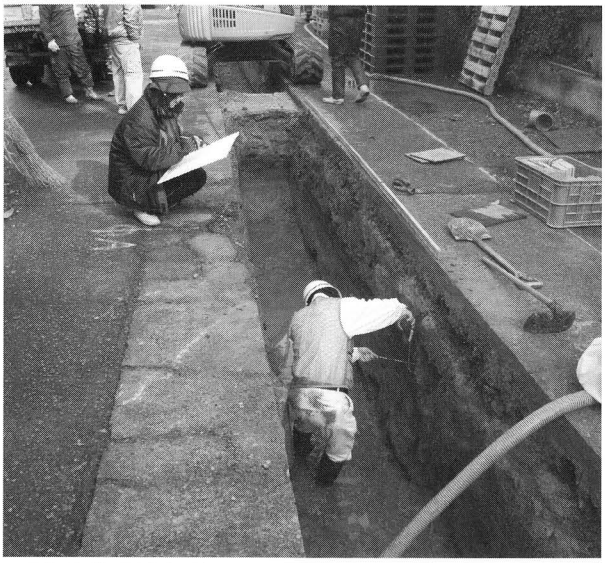
図版1

1・2区調査地(北から)

1区機械掘削(南から)

1区第1面(北から)

1区東壁



1区調査状況(南から)

2区南壁

図版2

２区第１面（北から）

２区第２面（北から）

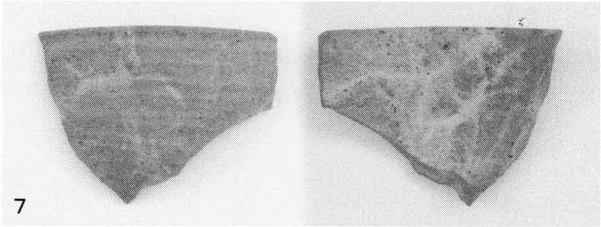
３区第１面検出（西から）

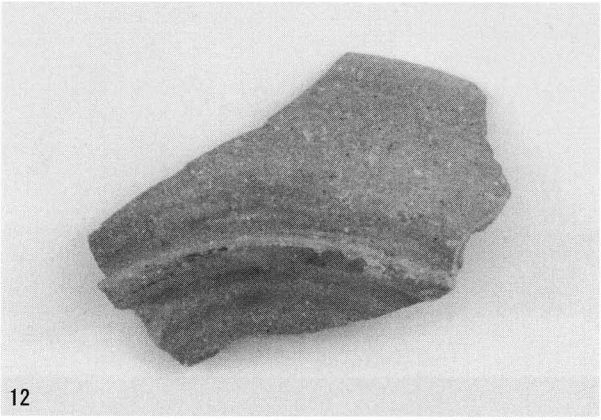
３区第１面（東から）

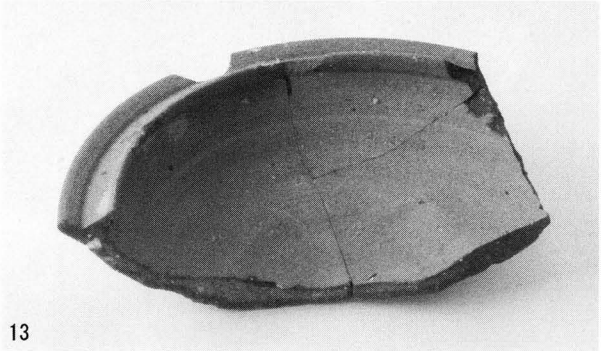
３区西壁

３区西壁内土器出土状況

図版3

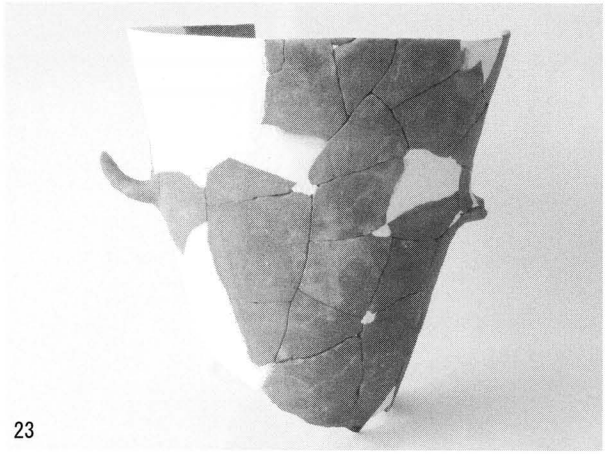

7


12

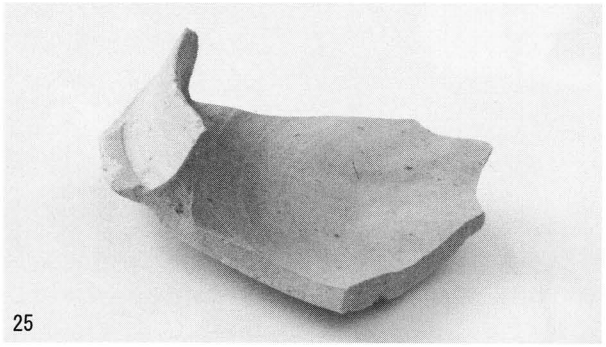

13

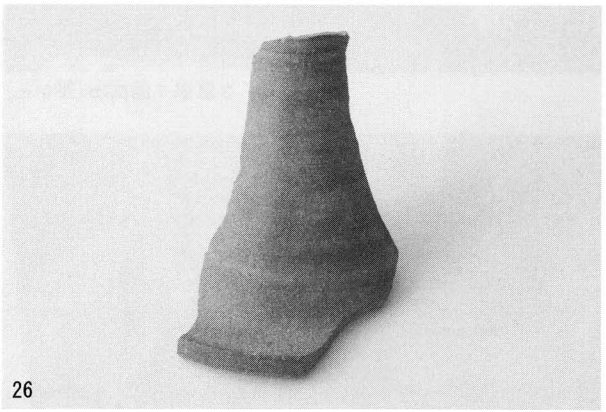
17 18

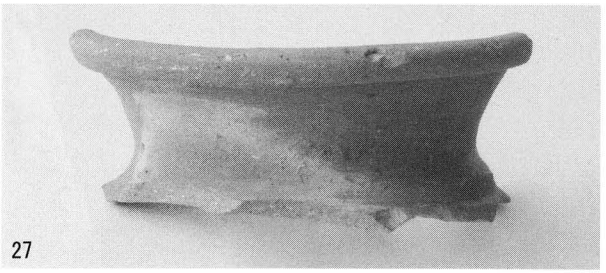
21


23

24


25


26


27

XⅣ　弓削遺跡第18次調査（ＹＧＥ2011－18）

例　　言

1．本書は、大阪府八尾市志紀町南１～３丁目地内で実施した下水道工事（23-29工区、24-38工区）に伴う発掘調査報告書である。

1．本書で報告する弓削遺跡第18次調査（ＹＧＥ2011－18）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の埋蔵文化財調査指示書に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会（平成24年度は公益財団法人八尾市文化財調査研究会）が八尾市から委託を受けて実施したものである。

1．現地調査は、その１（平成23年度23-29工区）を平成24年１月14日～３月３日（外業実働２日）に、その２（平成24年度24-38工区）を平成24年10月23日～11月28日（外業実働２日）に実施した。調査面積は計約16㎡である。調査担当者はその１が坪田真一、その２が高萩千秋・西村公助である。

1．現地調査においては、市森千恵子・伊藤静江・國津玲子・梶本潤二・芝﨑和美・竹田貴子・田島宣子・村田知子の参加を得た。

1．内業整理業務は下記が行い、現地調査終了後随時実施し、平成25年３月31日に完了した。
　遺物実測－市森・伊藤・國津、遺物トレース－市森。

1．本書の執筆は高萩・坪田・西村が行い、編集は坪田が行った。

本　文　目　次

1．はじめに……93
2．調査概要……94
　1）調査の方法と経過……94
　2）基本層序と出土遺物……94
　3）検出遺構と出土遺物……94
3．まとめ……96

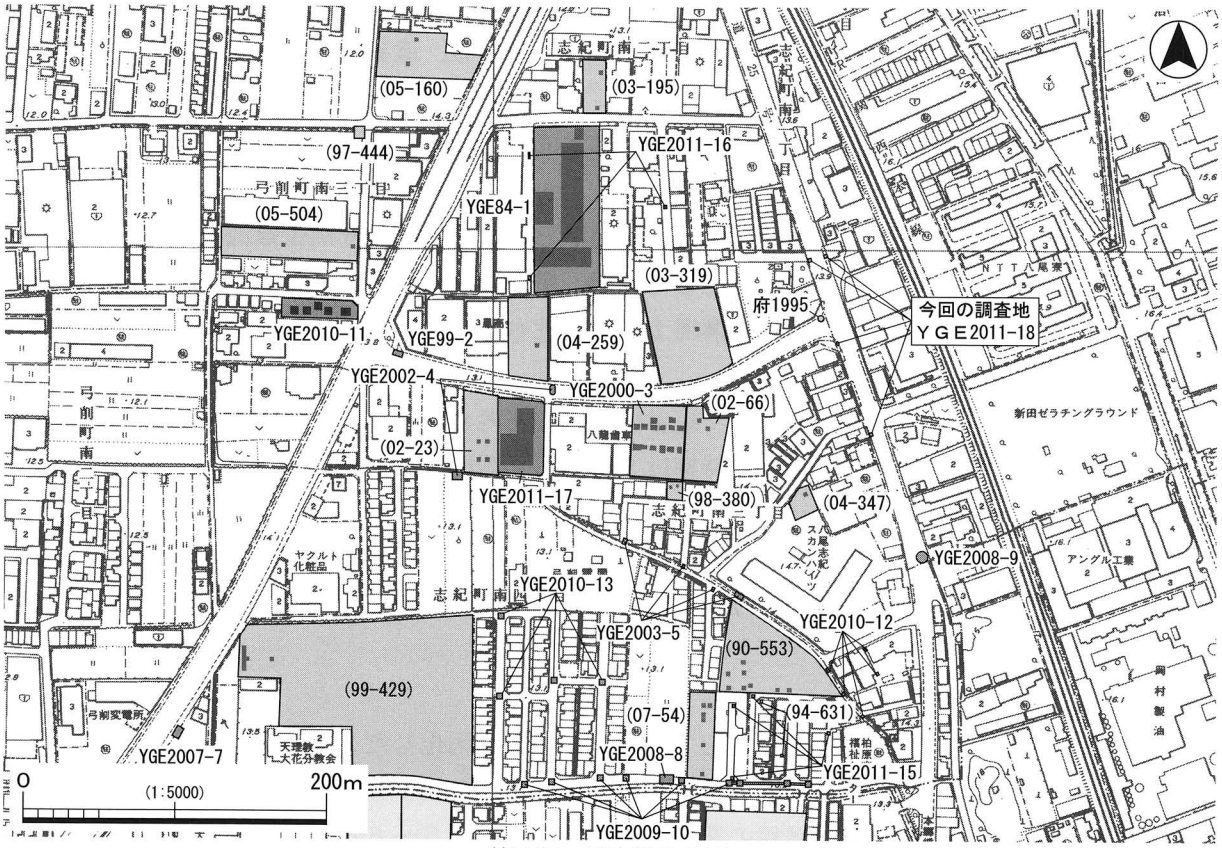
XIV　弓削遺跡第18次調査（ＹＧＥ2011－18）

１．はじめに

弓削遺跡は八尾市南東部に位置する弥生時代前期以降の複合遺跡で、現在の行政区画では、八尾市志紀町南２～４丁目、弓削町３丁目・弓削町南３丁目の一部、東西約0.5km・南北約0.7kmの範囲がその範囲となっている。地理的には、東を生駒山地、南を羽曳野丘陵、西を上町台地、北を淀川に囲まれた河内平野の南部、旧大和川の主流であった長瀬川と玉串川の分岐地点の西側にあたり、長瀬川左岸の沖積地上に位置している。遺跡範囲内の現地表の標高は、T.P.+12.8～15.0ｍを測る。当遺跡の周辺には、長瀬川を挟んで北東側には東弓削遺跡・弓削寺跡、北西側には志紀遺跡・田井中遺跡・木の本遺跡があり、南側には本郷遺跡（柏原市）が隣接する。

当遺跡では、昭和59年に最初の発掘調査となる第１次調査（YGE84-1）を実施しており、弥生時代中期～奈良時代の遺構が確認され、膨大な量の土器が出土した弥生時代後期の溝や、墨書人面土器が出土した奈良時代の井戸の検出が特筆される。

今回の調査地は遺跡範囲の東を画する奈良街道（国道25号線）上に当たり、周辺では西部で当調査研究会が第３次調査（YGE2000-3）を実施している他、八尾市教育委員会・当調査研究会による小規模な遺構確認調査が多く行われている。第３次調査では弥生時代中期～後期、古墳時代後期の遺構・遺物が検出され、古墳時代後期では埴輪が多く出土したことから周辺に古墳の存在が想定されている。



第１図　調査地位置図

２．調査概要

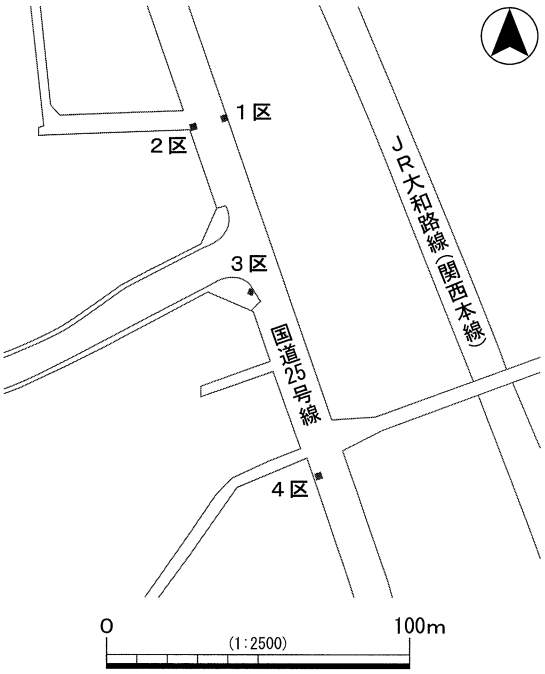
１）調査の方法と経過

今回の調査は八尾市志紀町南１～３丁目地内で実施した下水道工事(23-29工区、24-38工区)に伴う調査で、当調査研究会が弓削遺跡内で行った第18次調査(ＹＧＥ2011－18)である。

調査地は道路上に設置される人孔部分(約2.0×2.0m)４箇所(北から１～４区)で、総面積は約16㎡を測る。諸般の事情により、その１(平成23年度23-29工区)として２・３区、その２(平成24年度24-38工区)として１・４区の調査を実施した。

調査は現地表(T.P.+13.9～14.5m)下1.7～3.0mについて、機械・人力掘削併用で実施した。

調査では工事使用のベンチマークを標高の基準とした。



第２図　調査区位置図

２）基本層序と出土遺物

〈１区〉

０層はアスファルト・バラス・盛土。１層は作土で細粒砂が混ざっている。２～４層は中世期の遺物を微量に含んだ作土層である。５層は粘質シルト層で古墳時代～古代の遺物包含層と考えられる。６～９層は粘質シルト層が水平堆積する水成層である。遺物は出土しなかった。

〈２区〉

０層は盛土・撹乱。１層は旧耕土である。２層は水成層で近世の洪水砂と考えられる。３～６層は水成層と考えられるが、やや撹拌が見られることから作土の可能性もある。４層から中世～近世の瓦器甕片、５層からは古代頃の土師器、６層からは古式土師器片が少量出土している。７層は静水性の水成層である。８～10層は土壌化層で、炭を多く含む層相である。８・９層は古墳時代前期の遺物包含層である。10層は遺構埋土の可能性もある。11層は水成層である。

〈３区〉

０層は盛土・撹乱。１～４層は水成層で近世の洪水砂と考えられ、２区２層に相当すると考えられる。５・６層は作土と考えられる。時期は５層から瓦器椀の小片が出土しており中世頃に比定されよう。

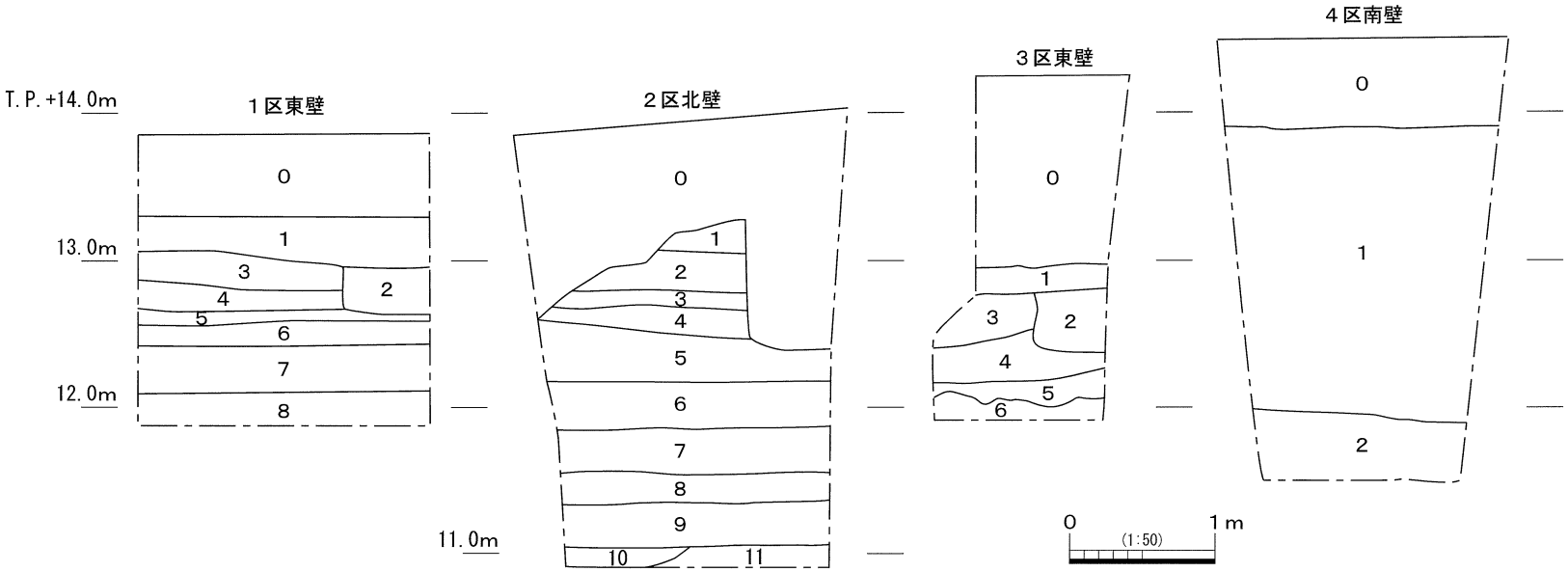
〈４区〉

０層は盛土である。１・２層の砂層は河川堆積で、層厚2.4m以上を測る。

３）検出遺構と出土遺物

〈１区〉

５層から古墳時代～古代の遺物が出土しており、**１**・**２**を図化した。**１**は土師器高杯の杯部である。調整は外面ナデで指頭圧痕が明瞭に残る。内面はハケの後、放射状にヘラミガキを施す。飛鳥時代に比定される。**２**は円筒埴輪の突帯部の小片である。５～６世紀に比定されよう。



1区
0．盛土（アスファルト・バラス）
1．10YR7/3にぶい黄橙色シルト混細粒砂
2．10YR6/6明黄褐色細粒砂
3．10YR5/2灰黄褐色粘土質シルト
4．2.5Y6/2灰黄色粘土質シルト
5．2.5Y5/2暗灰黄色シルト質粘土
6．7.5Y4/1灰色シルト
7．5Y4/1灰色シルト質土
8．10Y5/1灰色粘土質シルト

2区
0．盛土・撹乱
1．2.5GY3/1暗オリーブ灰色シルト混極細粒砂～細粒砂　旧耕土
2．5GY6/1オリーブ灰色粘土質シルト～シルト互層　水成層
3．5BG5/1青灰色極細粒砂混シルト質粘土　作土？
4．5Y4/1灰色シルト質粘土～極細粒砂　作土？
5．5GY5/1オリーブ灰色シルト混シルト質粘土　作土？
6．2.5GY4/1暗オリーブ灰色シルト混粘土　土壌化層　作土？
7．5GY4/1暗オリーブ灰色粘土質シルト～シルト　水成層？
8．2.5Y4/1黄灰色シルト～極細粒砂混粘土質シルト　炭　土壌化層
9．2.5Y3/1黒褐色極細粒砂混シルト質粘土　炭　土壌化層
10．2.5Y5/2暗灰黄色極細粒砂混シルト質粘土　炭　土壌化層
11．2.5GY6/1オリーブ灰色シルト　水成層

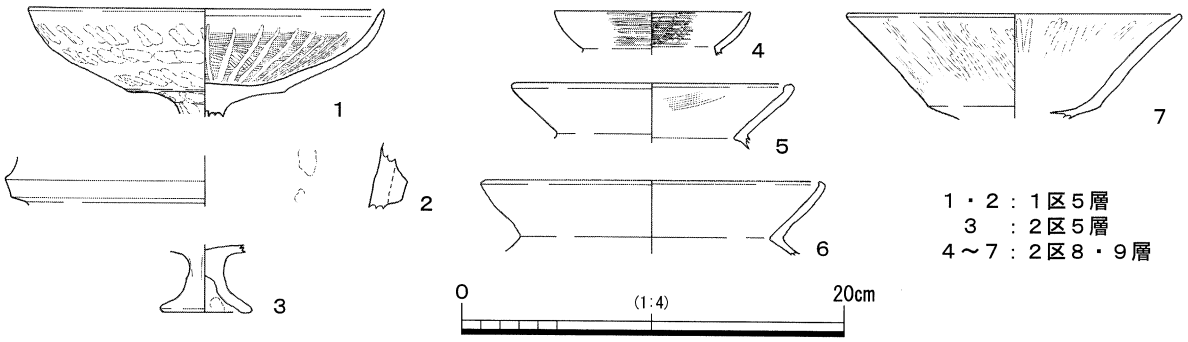
3区
0．盛土・撹乱
1．10Y6/1灰色シルト～粗粒砂　水成層
2．5Y5/1灰色シルト質粘土～極細粒砂　水成層
3．2.5GY6/1オリーブ灰色シルト質粘土　水成層
4．2.5Y4/2暗灰黄色粘土～シルト互層　水成層
5．2.5GY6/1オリーブ灰色シルトブロック混極細粒砂　作土？
6．5Y4/1灰色シルト混シルト質粘土　作土？

4区
0．盛土
1．灰褐色細砂～粗砂（河川堆積層）
2．灰色礫混粗砂（河川堆積層）

第3図　断面図

〈２区〉

３は５層出土の土師器高杯脚部である。手捏ね成形によるミニチュア土器で、奈良時代頃に比定されよう。４～７は８・９層出土の古式土師器である。４は精製の小形丸底壺の口縁部である。調整は外面横位、内面斜放射状のヘラミガキである。５・６は甕口縁部である。７は高杯の口縁部で、調整は縦位ヘラミガキである。４～７は古墳時代前期前葉(布留式期古相)に比定される。



第４図　出土遺物

３．まとめ

今回の調査では古墳時代前期～近世の遺構・遺物を検出した。

古墳時代前期では２区で遺物包含層(８・９層)、遺構埋土の可能性がある地層(10層)を確認した。南部に近接する府1995調査地においても同時期の土器が多く出土しており、この一帯が該期の集落域となっているようである。西部の調査地では認められないことから、小規模な集落域の可能性がある。

古墳時代後期～古代では１・２区で遺物包含層が見られた。調査区の西側で行われた発掘調査で確認されている該期の集落域の広がりが確認できたといえる。１区出土の飛鳥時代の土師器高杯は遺存状態が良好なもので、集落域は近辺に求められよう。調査地は古代より大和と難波を結ぶ主要道であった奈良街道にあたることから、街道沿いに発展した集落の存在が推定できる。

４区では盛土直下で河川堆積を検出した。砂層は層厚2.4m以上を測り、大規模な河川の存在が考えられ、東側の長瀬川に関連する河川の一つと考えられる。

参考文献

・西村公助1985「８　弓削遺跡(第１次調査)」『昭和59年度事業概要報告』財団法人八尾市文化財調査研究会
・高萩千秋2002「Ⅱ　弓削遺跡第３次調査(ＹＧＥ2000－３)」『八尾市立埋蔵文化財調査センター報告３　平成13年度』八尾市教育委員会・財団法人八尾市文化財調査研究会
・岩瀬　透・阿部幸一1995「弓削・志紀遺跡」『寝屋川南部流域下水道事業に伴う中垣内・志紀・弓削・太平寺遺跡発掘調査概要』大阪府教育委員会

図版1　その1（2・3区）

２区調査地（北から）

２区北壁上部

２区北壁下部

３区調査地（北から）

３区機械掘削（西から）

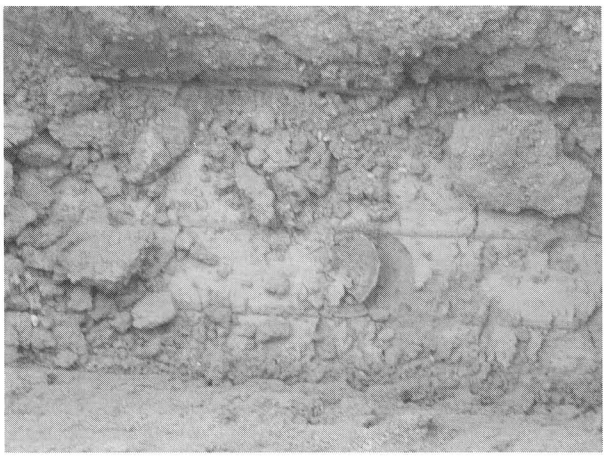
３区全景（西から）

３区東壁上部

３区東壁下部

図版2　その2（1区・4区）

1区（西から）



1区高杯出土状況（東から）

1区高杯検出面（西から）

1区（西から）

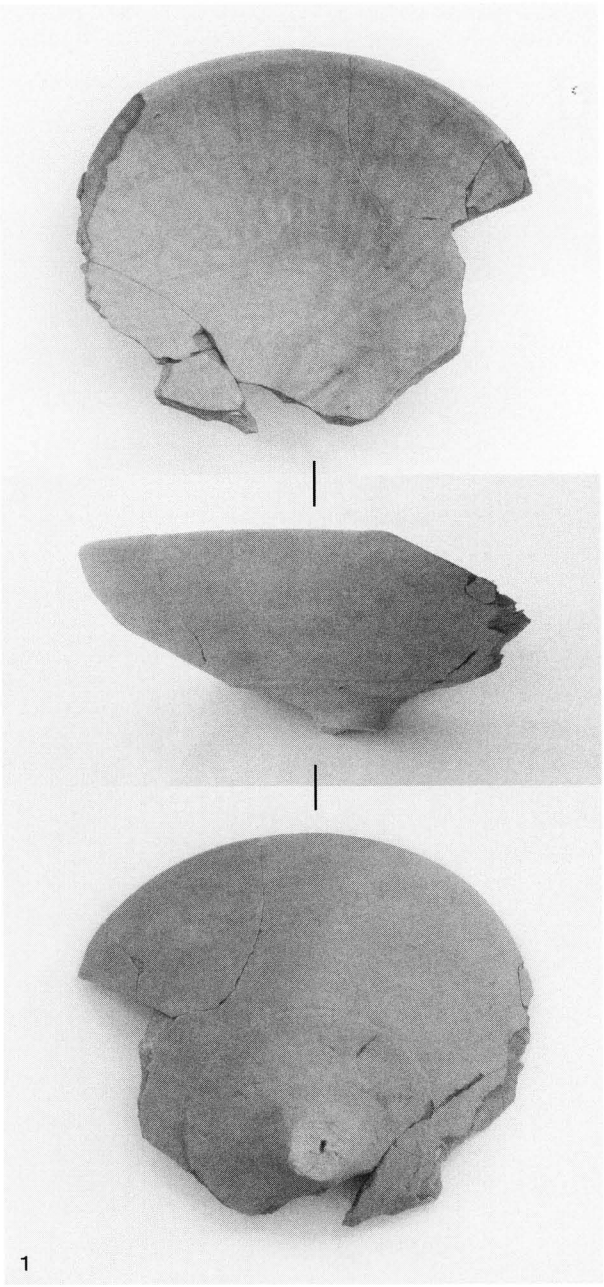
1区東壁

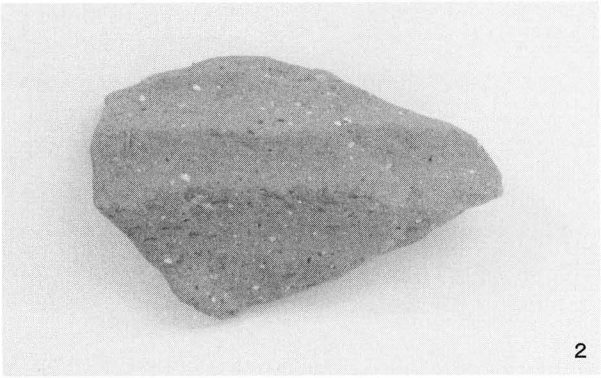
1区機械掘削（東から）

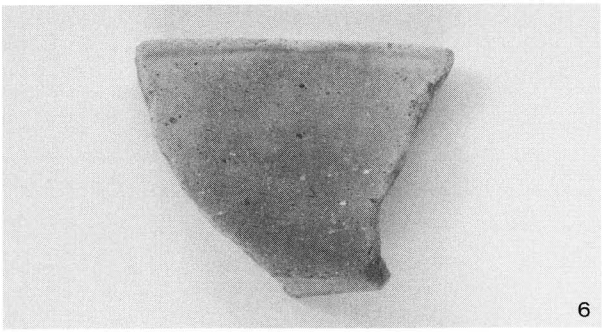
2区南壁0～3層

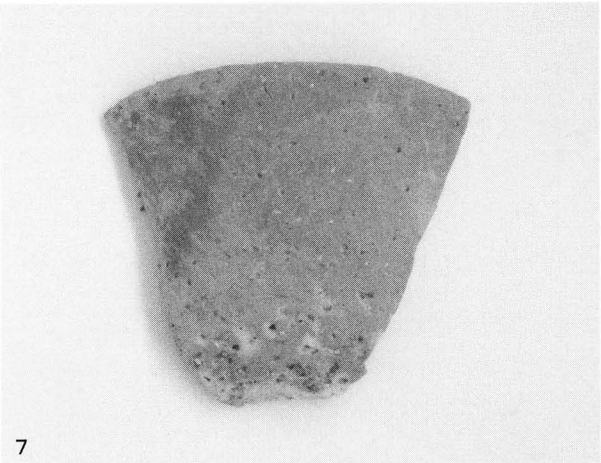
2区周辺状況（北東から）

図版3









報　告　書　抄　録

ふりがな	おおたいせき　おおたけにしいせき　おんぢいせき　がくおんじいせき　かめいいせき きのもといせき　きゅうほうじいせき　こおりがわいせき　みずこしいせき　ゆげいせき
書　　名	太田遺跡　大竹西遺跡　恩智遺跡　楽音寺遺跡　亀井遺跡　木の本遺跡　久宝寺遺跡　郡川遺跡　水越遺跡　弓削遺跡
副 書 名	
シリーズ名	公益財団法人八尾市文化財調査研究会報告
シリーズ番号	141
編集者名	高萩千秋・坪田真一・西村公助
編集機関	公益財団法人八尾市文化財調査研究会
所 在 地	〒581－0821　大阪府八尾市幸町四丁目58－２　TEL・FAX　072－994－4700
発行年月日	西暦2013年３月31日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	発掘期間	発掘面積 (㎡)	発掘原因
おおたいせき 太田遺跡 (第14次調査)	おおさかふやおしおおたしんまち２ちょうめ 大阪府八尾市太田新町２丁目	27212	68	34度 35分 40秒	135度 35分 27秒	20121029 ～ 20130115	約16	記録保存調査 公共下水道工事 (24-31工区)
おおたけにしいせき 大竹西遺跡 (第７次調査)	おおさかふやおしおおたけ２ちょうめ 大阪府八尾市大竹２丁目	27212	54	34度 38分 28秒	135度 38分 05秒	20120315 ～ 20120322	約41	記録保存調査 公共下水道工事 (23-11工区)
おんぢいせき 恩智遺跡 (第26次調査) こおりがわいせき 郡川遺跡 (第13次調査)	おおさかふやおしおんぢみなみまち４ちょうめ 大阪府八尾市恩智南町４丁目 おおさかふやおしかいち３ちょうめ 大阪府八尾市垣内３丁目	27212	30 60	34度 36分 35秒	135度 37分 57秒	20120413 ～ 20120924	約16	記録保存調査 公共下水道工事 (23-43工区)
おんぢいせき 恩智遺跡 (第27次調査)	おおさかふやおしおんぢきたまち２・３ちょうめ 大阪府八尾市恩智北町２・３丁目	27212	30	34度 36分 48秒	135度 37分 51秒	20120514 ～ 20120704	約20	記録保存調査 公共下水道工事 (23-19工区)
がくおんじいせき 楽音寺遺跡 (第４次調査)	おおさかふやおしがくおんじ１ちょうめ 大阪府八尾市楽音寺１丁目	27212	53	34度 38分 32秒	135度 38分 10秒	20130131 ～ 20130206	約23	記録保存調査 公共下水道工事 (24-７工区)
かめいいせき 亀井遺跡 (第18次調査)	おおさかふみなみかめいちょう４ちょうめ 大阪府八尾市南亀井町４丁目	27212	26	34度 36分 49秒	135度 34分 41秒	20121211 ～ 20121226	約39	記録保存調査 公共下水道工事 (24-23工区)
きのもといせき 木の本遺跡 (第23次調査)	おおさかふやおしきのもと３ちょうめ、みなみきのもと２ちょうめ 大阪府八尾市木の本３丁目、南木の本８丁目	27212	35	34度 35分 51秒	135度 35分 14秒	20110712 ～ 20120310	約32	記録保存調査 公共下水道工事 (22-41工区)
きのもといせき 木の本遺跡 (第24次調査)	おおさかふやおしみなみきのもと５・６ちょうめ 大阪府八尾市南木の本５・６丁目	27212	35	34度 36分 03秒	135度 35分 33秒	20120530 ～ 20120628	約８	記録保存調査 公共下水道工事 (23-113工区)
きゅうほうじいせき 久宝寺遺跡 (第81次調査)	おおさかふやおしみなみきゅうほうじ１ちょうめ 大阪府八尾市南久宝寺１丁目	27212	23	34度 37分 28秒	135度 35分 19秒	20120206 ～ 20120210	約25	記録保存調査 公共下水道工事 (23-25工区)
きゅうほうじいせき 久宝寺遺跡 (第83次調査)	おおさかふやおしみなみきゅうほうじ３ちょうめ 大阪府八尾市南久宝寺３丁目	27212	23	34度 37分 19秒	135度 35分 11秒	20121031 ～ 20121120	約35	記録保存調査 公共下水道工事 (24-110工区)
こおりがわいせき 郡川遺跡 (第12次調査)	おおさかふやおしきょうこうじ２、３ちょうめ 大阪府八尾市教興寺２、３丁目	27212	60	34度 37分 07秒	135度 37分 57秒	20111130 ～ 20120413	約24	記録保存調査 公共下水道工事 (23-17工区)
みずこしいせき 水越遺跡 (第11次調査)	おおさかふやおしひがしまち６ちょうめ、ちづか１ちょうめ、おおくぼ 大阪府八尾市東町６丁目、千塚１丁目、大窪	27212	42	34度 37分 54秒	135度 38分 00秒	20120808 ～ 20120830	約60	記録保存調査 公共下水道工事 (23-13工区)
ゆげいせき 弓削遺跡 (第16次調査)	おおさかふやおししきちょうみなみ２ちょうめ 大阪府八尾市志紀町南２丁目	27212	71	34度 35分 48秒	135度 36分 59秒	20120114 ～ 20120303	約12	記録保存調査 公共下水道工事 (23-30工区)
ゆげいせき 弓削遺跡 (第18次調査)	おおさかふやおししきちょうみなみ１～３ちょうめ 大阪府八尾市志紀町南１～３丁目	27212	71	34度 35分 45秒	135度 37分 05秒	20120114 ～ 20121128	約16	記録保存調査 公共下水道工事 (23-29工区) (24-38工区)

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構・地層	主な遺物	特記事項
太田遺跡 (第14次調査)	集落	近世	井戸		
大竹西遺跡 (第７次調査)	集落	古墳～奈良時代	包含層	円筒埴輪、土師器	
恩智遺跡 (第26次調査) 郡川遺跡 (第13次調査)	集落		扇状地性堆積		
恩智遺跡 (第27次調査)	集落	中世	作土		
楽音寺遺跡 (第４次調査)	集落		扇状地性堆積		
亀井遺跡 (第18次調査)	集落	中世～近世	作土		
木の本遺跡 (第23次調査)	集落	弥生時代後期 古墳時代中期～後期 古代	包含層 包含層 作土		
木の本遺跡 (第24次調査)	集落	古代	作土		
久宝寺遺跡 (第81次調査)	集落	古墳時代前期 近世	土坑・ピット・落ち込み 用水施設・耕作溝	古式土師器	
久宝寺遺跡 (第83次調査)	集落	古墳時代 中世	包含層 包含層	土師器 瓦器	
郡川遺跡 (第12次調査)	集落		扇状地性堆積		
水越遺跡 (第11次調査)	集落	縄文時代後期 弥生時代中期 弥生時代後期 近世	包含層 土坑 土坑 護岸施設、耕作溝	縄文土器 弥生土器、石器(石包丁) 弥生土器(絵画土器)	
弓削遺跡 (第16次調査)	集落	古墳時代後期～飛鳥時代 古代 近世	包含層 溝、包含層 水田復旧土坑	土師器、須恵器 土師器、須恵器	
弓削遺跡 (第18次調査)	集落	古墳時代前期 古墳時代後期～古代	包含層 包含層	古式土師器 円筒埴輪、土師器	

要約	水越11次では縄文時代後期の包含層、弥生時代中期～後期の遺構が検出され、遺跡西部の様相を解明する上で重要な調査となった。また弥生時代後期の絵画土器は特筆される。弓削16・18次では奈良街道沿いに発展した古代集落の存在が確認された。久宝寺81次の用水施設は、近代水道史を知る上で貴重な資料となろう。

公益財団法人八尾市文化財調査研究会報告141

Ⅰ 太田遺跡(第14次調査)
Ⅱ 大竹西遺跡(第７次調査)
Ⅲ 恩智遺跡(第26次調査)・郡川遺跡(第13次調査)
Ⅳ 恩智遺跡(第27次調査)
Ⅴ 楽音寺遺跡(第４次調査)
Ⅵ 亀井遺跡(第18次調査)
Ⅶ 木の本遺跡(第23次調査)
Ⅷ 木の本遺跡(第24次調査)
Ⅸ 久宝寺遺跡(第81次調査)
Ⅹ 久宝寺遺跡(第83次調査)
XI 郡川遺跡(第12次調査)
XII 水越遺跡(第12次調査)
XIII 弓削遺跡(第16次調査)
XIV 弓削遺跡(第16次調査)

発　行　　平成25年３月
編　集　　公益財団法人八尾市文化財調査研究会
〒581－0821
大阪府八尾市幸町四丁目58番地の２
TEL・FAX (072) 994－4700

印　刷　　ぷりんと工房　ヒロノ
表紙　レザック66　＜260kg＞
本文　マットコート　＜70kg＞
図版　マットコート　＜70kg＞